

つかばたけいせき  
**塚畠遺跡 IV**

— C地点の調査 —

2012

本庄市遺跡調査会

## 序

埼玉県北部に位置する児玉地方は、県内でも有数の遺跡の宝庫として知られており、本庄市だけでも市内に500カ所以上もの埋蔵文化財包蔵地が存在しています。それらは数万年前の旧石器時代の遺跡からありますが、中でも古墳時代の遺跡の多さは県内随一とも言われ、県指定史跡の鷺山古墳や宥勝寺裏埴輪窯跡をはじめ、該期の著名な遺跡も数多く所在し、当地域における当時の繁栄ぶりが窺えます。

本書は、平成元年に民間会社の工場建設に伴う事前の記録保存を目的として実施した、本庄市児玉町共栄に所在する塚畠遺跡C地点の発掘調査の成果を記録したものです。発掘調査の結果、調査区内からは古墳時代中期から後期の竪穴式住居跡が多数検出され、その中から当時の人々が日常生活で使っていた土器など膨大な量の遺物が出土しました。このような、やむを得ず破壊されてしまう貴重な遺跡を、発掘調査によって記録保存し、歴史資料として後世に残し伝えていくことは、現代に生きる我々に託された重要な責務の一つであります。これらの資料を将来にわたってより多くの人々が検討できる環境を整えながら、当地域の歴史性や地域的特性を明らかにしていくことは、我々や子孫たちの地域に根差したより良い社会的・文化的環境づくりに役立つものと考えられます。

本書が、学術研究の基礎資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護や遺跡を理解するための一助として、学校教育や生涯学習の場で、多くの方々に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご尽力を賜りました村奈照明株式会社、山下武治、井河自動車株式会社の各氏をはじめ、ご教示・ご協力をいただきました皆様に、心から感謝申し上げます。

平成24年3月

本庄市遺跡調査会  
会長 茂木孝彦

## 例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町共栄字南共和 250 番地・277 番地に所在する、塚島遺跡C地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、村奈照明株式会社の工場建設(250番地)と、井河自動車株式会社の工場・事務所建設(277番地)に伴う事前の記録保存を目的として、平成元年4月1日～6月30日の期間に実施した。
3. 発掘調査地点は、当初は便宜的に村奈照明株式会社の工場建設予定地(250番地)をC1地点、井河自動車株式会社の工場・事務所建物予定敷地部分(277番地)をC2地点としたが、本報告では総称してC地点とした。
4. 発掘調査は、児玉町遺跡調査会が実施し、その調査担当には恋河内昭彦があたった。
5. 発掘調査から本書刊行に至る経費は、村奈照明株式会社、山下武治、井河自動車株式会社が負担した。
6. 第4図C地点全体図中のXY座標値は、世界測地系の新座標値に変換したもので、その下の()内の数値は調査当時の旧座標値である。
7. 本報告書を作成するにあたり、遺構番号をA地点からの通し番号と整合させたため、以下のとおり住居番号を一部変更した。  
(旧)第1号住居跡 → (新)第46号住居跡  
(旧)第2号住居跡 → (新)第47号住居跡  
(旧)第3号住居跡 → (新)第48号住居跡
8. 遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。  
A-法量、B-成形、C-整形・調整、D-胎土、E-色調、F-残存度、G-備考、  
H-出土層位
9. 出土遺物の抽出・選別と実測及び写真撮影は、祐歴史考房まほらに委託した。
10. 本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。
11. 発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご教示・ご協力をいただいた。記して感謝いたします。  
赤熊 浩一、岩瀬 諫、大谷 徹、金子 彰男、栗島 義明、駒宮 史朗、坂本 和俊、  
篠崎 潔、外尾 常人、田中 広明、田村 誠、富田 和夫、中沢 良一、中村 倉司、  
長滝 歳康、丸山 修、矢内 勲、  
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、

## 発掘調査組織

### 児玉町遺跡調査会（平成元年度）

会 長	野口 敏雄	児玉町教育委員会教育長	
理 事	田島 三郎	児玉町文化財保護審議委員長	
	清水 守雄	児玉町文化財保護審議委員	
	日向 國俊	児玉町文化財保護審議委員	
	中兼 久偉	児玉町文化財保護審議委員	
	武内 和雄	児玉町文化財保護審議委員	
	吉川 豊	児玉町教育委員会社会教育課長	
	幹 事	立花 勲	〃
前川 由雄		〃	社会教育係長
金子 幸弘		〃	主任
鈴木 徳雄		〃	主事
渋谷 路子		〃	主事
恋河内昭彦		〃	主事

## 整理・報告書刊行組織

### 本庄市遺跡調査会（平成24年度）

会 長	茂木 孝彦	本庄市教育委員会教育長	
理 事	清水 守雄	本庄市文化財保護審議委員	
	関和 成昭	本庄市教育委員会事務局長	
監 事	坂本 和雄	本庄市監査委員事務局長	
幹 事	金井 紀夫	本庄市会計課長	
	金井 孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長	
	鈴木 徳雄	〃	副参事兼課長補佐兼歴史民俗資料館長
	太田 博之	〃	課長補佐兼埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃	埋蔵文化財係主幹
	大熊 季広	〃	主査
	松澤 浩一	〃	主査
	松本 完	〃	主任
	の野 善行	〃	臨時職員



# 目 次

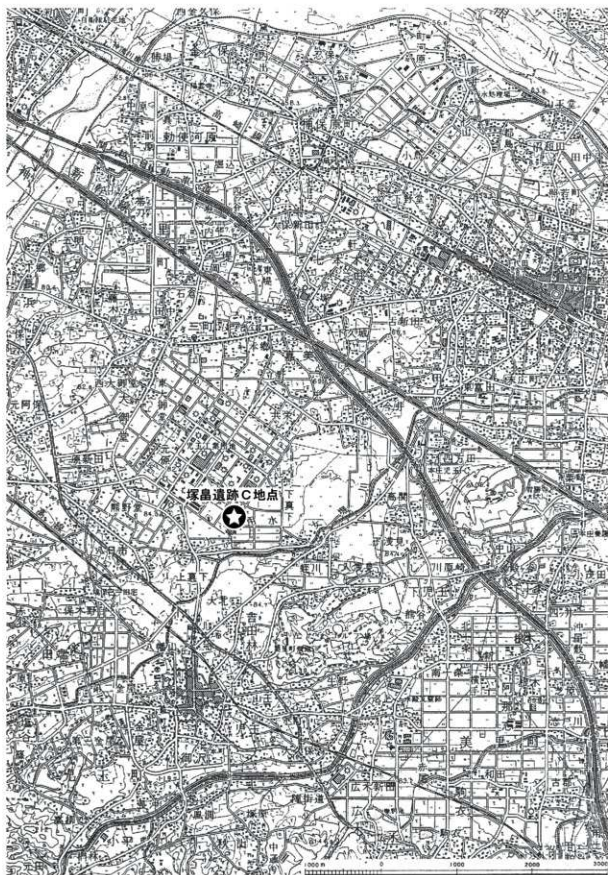
序

例言

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第1節	C1地点の経緯	1
第2節	C2地点の経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	3
第Ⅲ章	遺跡の概要	4
第Ⅳ章	検出された遺構と遺物	6
第1節	竪穴式住居跡	6
第2節	掘立柱建物跡	103
第3節	土 坑	103
第4節	溝 跡	109
第Ⅴ章	まとめ 一塚島遺跡C地点の古墳時代集落の様相	110
第1節	中期の集落	110
第2節	後期の集落	111
参考文献		113

写真図版

報告書抄録



第1図 遺跡の位置

## 第 I 章 発掘調査に至る経緯

### 第 1 節 C 1 地点の経緯

昭和 63 年 12 月、埼玉県児玉郡児玉町大字共栄（現本庄市児玉町共栄）字南共和 277 番地に、工場の建設を予定している村奈照明株式会社代表取締役村奈勲より、建設予定地内にかかる埋蔵文化財の所在とその取扱いについて、児玉町教育委員会に照会があった。

照会のあった建設予定地は、『遺跡分布地図』に記載されている周知の埋蔵文化財包蔵地である No54-029（当時）の範囲内に位置しており、東側隣地の 250 番地（C 2 地点）の試掘調査でも多くの遺構が確認されていることから、予定地内においても埋蔵文化財が所在する可能性が極めて高いと考えられたため、埋蔵文化財の所在については、試掘調査を実施して明確にする必要があることを説明した。

同年 12 月 22 日に、建設予定地の地権者である山下武治から、児玉町教育委員会に試掘調査の依頼があり、平成元年 1 月 19 日に建設予定地内の試掘調査を実施した。その結果、ほぼ全域から古墳時代の住居跡が多数確認されたため、「開発予定地は埋蔵文化財が所在するため現状保存することが望ましいが、やむを得ず現状変更する場合は事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要がある」ことを説明し、文化財保護に対する理解と協力を求めた。

その後、両者で協議を重ねたが、すでに工場建設の計画が進行しており、予定地を現状で保存することが困難であることから、やむを得ず事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査の実施に当たっては、平成元年 4 月 1 日に村奈照明株式会社代表取締役村奈勲及び山下武治と児玉町遺跡調査会会長野口敏雄（当時）の間で、発掘調査に関する委託契約を締結し、現地での発掘調査は隣接する C 2 地点と同時に同日より開始した。

### 第 2 節 C 2 地点の経緯

昭和 63 年 11 月 19 日、埼玉県児玉郡児玉町大字共栄（現本庄市児玉町共栄）字南共和 250 番地に、工場と事務所の建設を予定している井河自動車株式会社代表取締役井河久昇より、建設予定地内にかかる埋蔵文化財の所在とその取扱いについて、児玉町教育委員会に照会があった。

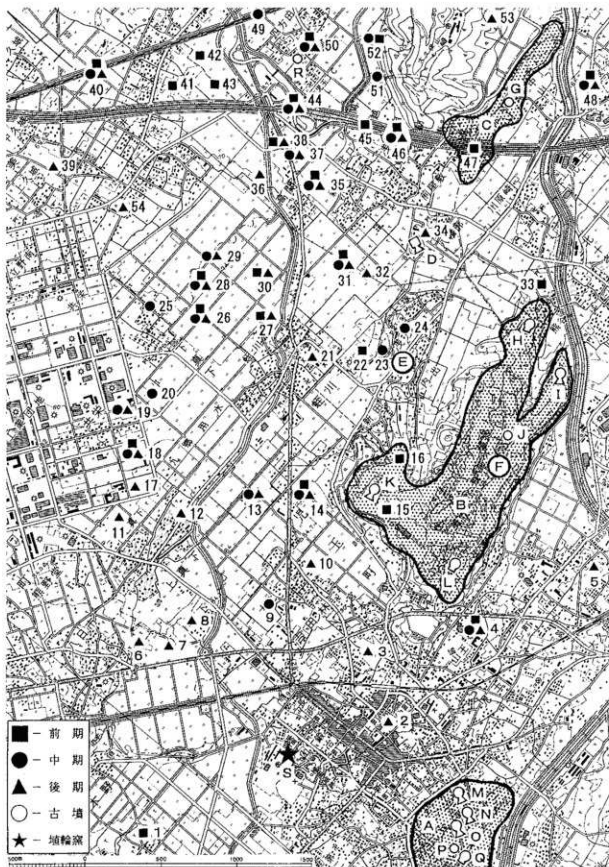
建設予定地は、『遺跡分布地図』に記載されている周知の埋蔵文化財包蔵地である No54-029（当時）の範囲内に位置していることから、埋蔵文化財が所在する可能性が高いと考えられたため、試掘調査を実施して明確にする必要があることを説明した。

同年 12 月 17 日に、井河久昇から児玉町教育委員会に試掘調査の依頼があり、同年 12 月 23 日に建設予定地内の試掘調査を実施した。その結果、ほぼ全域から古墳時代の住居跡が多数確認されたため、「開発予定地は埋蔵文化財が所在するため現状保存することが望ましいが、やむを得ず現状変更する場合は事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要がある」ことを説明し、文化財保護に対する理解と協力を求めた。

その後、両者で協議を重ねたが、すでに工場建設の計画が進行しており、予定地を現状で保存することが困難であることから、やむを得ず事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査の実施に当たっては、平成元年 4 月 1 日に井河自動車株式会社代表取締役井河久昇と児玉町遺跡調査会会長野口敏雄（当時）の間で、発掘調査に関する委託契約を締結し、現地での発掘調査は隣接する C 1 地点と同時に同日より開始した。

なお、当時包蔵地範囲は、白鳳～平安時代の集落跡を主とする 029 の南共和遺跡に属していたが、検出された住居跡の時期から、隣接する古墳時代の集落跡を主とする 028 の塚島遺跡に変更した。



第2図 女堀川中流域の古墳時代遺跡

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡は、JR高崎線の本庄駅から南西側に約5km、関越自動車道本庄児玉インターチェンジから南西側に約2.5km、JR八高線の児玉駅から北に約2kmの本庄市児玉町共栄地内に所在している。本遺跡周辺は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川によって形成された神流川扇状地の東端付近にあたり、秩父山地の北側に連なる上武山地の北側に延びる児玉丘陵下の低平で広大な本庄台地の東側縁辺部に立地している。本遺跡の東側は、上武山地内に源を発する女堀川に沿って帯状の低地が開けており、その低地の向い側には生野山・鷲山・大久保山の残丘性独立丘陵が列状に並んで対峙している。

本遺跡周辺の女堀川中流域では、旧石器時代からの遺物等が見られるが、概して弥生時代までの遺跡は少なく、古墳時代になって遺跡数が爆発的に増加する現象が見られる。低地内に集落が積極的に進出するようになる古墳時代前期の遺跡は、低地内の大規模集落の後張遺跡を中心に、周辺に小規模集落が多く展開する様相が窺え、本庄台地縁辺部のやや奥に位置する諏訪遺跡・残丘上の生野山遺跡・塚本山遺跡では、方形周溝墓(群)による墓域が形成され、前期の首長墓の鷲山古墳(全長60m:前方後方墳)も低地内の集落からよく見える小規模な残丘上に築造されている。

中期の遺跡は、前期から継続する集落も多いが、本庄台地や残丘下の低台地上にさらに集落が拡散する傾向が見られる。該期は、前期からの低地開発を基盤にして、さらに開発規模を拡大させていると考えられ、低地内の微高地上の高縄田遺跡と蛭川坊田遺跡や、本庄台地上の将監塚遺跡(第3次調査地点)などで、やや規模の大きな直線的な溝が検出されている。そして該期の生産性の向上と地域社会の繁栄や成熟を示すように、生野山残丘の異なった尾根筋上に墳丘直径が60m級の大型円墳の金鑽神社古墳と生野山將軍塚古墳の首長墓が築造されている。

後期の遺跡は、集落がさらに中流域の全域に拡散し、低地周辺の本庄台地上や丘陵部内の開発が一層進行する。首長墓は、墳形が中期の大形円墳から全長60m級の前方後円墳に変わり、生野山残丘上に生野山銚子塚古墳と生野山16号墳が築造されている。そして、後期を通じて同じ残丘上には数百を数える小円墳が作られ、生野山古墳群や塚本山古墳群などの大規模群集落が形成される。

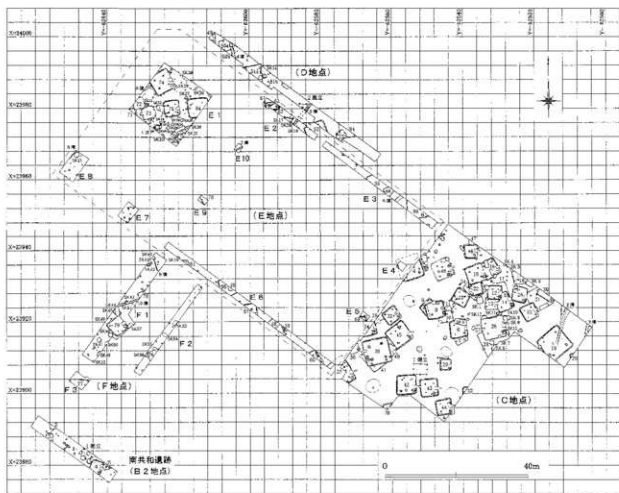
7世紀後半の白鳳時代になると、中流域の低地内に立地する集落の多くは廃絶され、女堀川の沖積低地を取り囲むように、低地と接する本庄台地の縁辺部や残丘斜面下の低台地上に集落が移動する現象が見られ、水田部の条里制の施工と関連してか、集落の大規模な地域的再編成が行われる。

1. 十二天遺跡
2. 仲町遺跡
3. 女池遺跡
4. 児玉清水遺跡
5. 大久保遺跡
6. 八荒神遺跡
7. 反り町遺跡
8. 金佐奈遺跡
9. 高縄田遺跡
10. 宮田遺跡
11. 辻ノ内遺跡
12. 上真下東遺跡
13. 辻堂遺跡
14. 南街道遺跡
15. 生野山遺跡(墓)
16. 生野山遺跡(集落)
17. 新宮遺跡
18. 塚島遺跡
19. 古井戸南遺跡
20. 平塚遺跡
21. 共和小学校校庭遺跡
22. 日延遺跡
23. 城の内遺跡
24. 新屋敷遺跡
25. 将監塚東遺跡
26. 堀向遺跡
27. 左口遺跡
28. 藤塚遺跡
29. 前田甲遺跡
30. 祐島遺跡
31. 浅見境北遺跡
32. 浅見境遺跡
33. 宮ヶ谷戸遺跡
34. 鷲山南遺跡
35. 東牧西分遺跡
36. 今井川越田遺跡
37. 梅沢遺跡
38. 川越田遺跡
39. 往来北遺跡
40. 諏訪遺跡
41. 塔頭遺跡
42. 地神遺跡
43. 今井桑里遺跡
44. 後張遺跡
45. 飯玉東遺跡
46. 雷電下遺跡
47. 塚本山遺跡
48. 村後遺跡
49. 九反田遺跡
50. 四方田遺跡
51. 根田遺跡
52. 山根遺跡
53. 大久保山遺跡
54. 今井原屋敷遺跡
- A. 長沖古墳群
- B. 生野山古墳群
- C. 塚本山古墳群
- D. 鷲山古墳
- E. 金鑽神社古墳
- F. 生野山將軍塚古墳
- G. W45号墳
- H. 熊谷後1号墳
- I. 生野山16号墳
- J. 生野山9号墳
- K. 生野山銚子塚古墳
- L. 物見塚古墳
- M. 長沖31号古墳
- N. 長沖32号墳
- O. 長沖25号墳
- P. 長沖14号墳
- Q. 長沖8号墳
- R. 四方田古墳
- S. 八幡山墳輪廓跡

### 第三章 遺跡の概要

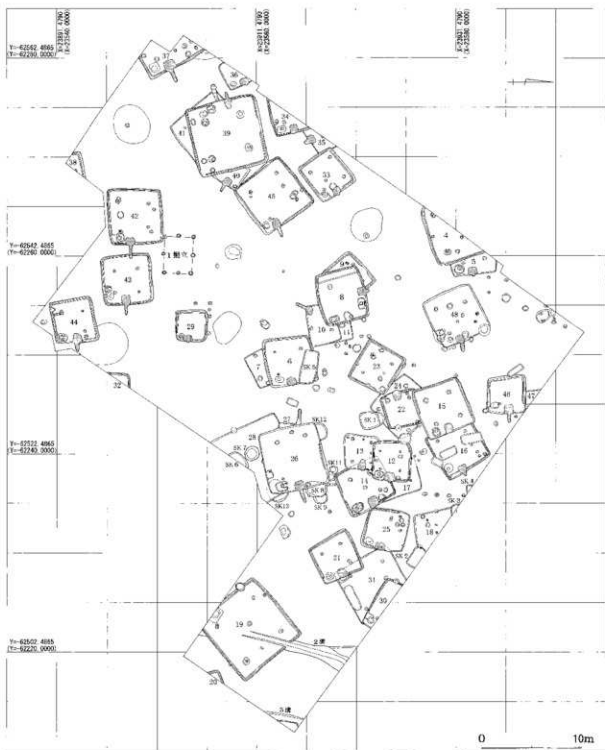
本遺跡は、女堀川中流域左岸の標高 80 m を測る本庄台地の東側縁辺部に立地する、古墳時代前期～後期の集落跡と中世の屋敷跡を主体とする複合遺跡である。本遺跡の発掘調査は、昭和 62 年に県営ほ場整備事業児玉北部地区の小排水路建設に伴う A 地点（大屋 1991）の第 1 次から、同年に町道改良（外周道路）拡幅舗装工事に伴う B 地点の第 2 次、平成元年に民間の工場と事務所建設に伴う C 地点の第 3 次、平成 2 年に町道改良舗装工事に伴う D 地点の第 4 次、平成 15 年に民間の事務所と倉庫建設に伴う E 地点（恋河内 2008b）の第 5 次、平成 16 年に民間の倉庫建設に伴う F 地点（恋河内 2008a）の第 6 次にわたって実施されている。

今回報告する C 地点で検出された主な遺構は、竪穴式住居跡 45 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 13 基、溝跡 2 条である。竪穴式住居跡は、ほとんどが古墳時代中・後期のもので、中期 11 軒、後期 34 軒である。主に、中期の住居跡は炬が主体で、後期の住居跡はカマドが付設されている。カマドが付設される方向は、東西南北いずれのものも見られるが、東側に付設されているものが圧倒的に多い。また、住居内でのカマドの作り替えも認められる。掘立柱建物跡は、平面形が 2 間×2 間の長方形を呈し、その形態から中世のものと考えられる。おそらく、本地点の北西側約 80 m の E 1 地点で検出された 13 世紀後半頃を主体とする 3 基



第3図 塚島遺跡B～F地点全体図

の方形堅穴状遺構や井戸などの中世屋敷跡と関係するものかもしれない。土坑は、縄文時代中期後半（加曾利E3式）2基、古墳時代中～後期8基、中世以降3基で、各時代の土坑ともその性格が分かるものはない。溝跡は、調査区北側の東端から、近世後期以降の類似した形態で並走する溝が2条検出されている。



第4図 塚畠遺跡C地点全体図

## 第IV章 検出された遺構と遺物

### 第1節 竪穴式住居跡

#### 第4号住居跡(第5図、図版2)

調査区の北西端に位置し、重複する第5号住居跡を切っている。調査区内では住居跡の南東側半分が検出されただけであるが、北西側の一部は近接するE4地点(恋河内2008)で検出されている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、調査区内と隣接するE4地点で検出された部分から推測すると、コーナー部分が丸みをもつ比較的整った方形を呈すると思われる。規模は、北東～南西方向が6.10m、北西～南東方向は5mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で45cmある。調査区内で検出された各壁下には、幅20cm・深さ10cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、5ヶ所検出されている。この中でP1とP2は、おそらく住居の対角線上に配置されていると思われることから、4本主柱穴を構成するピットの一部と考えられる。

カマドは、貯蔵穴とともに調査区内では検出されていないため、おそらく調査区外の北西側壁に付設されている可能性が高い。

出土遺物は、住居壁際の床面上や覆土中から、土器が多く出土している。土器以外では、覆土中から児玉地方に多く見られる土製支脚AⅡ型(恋河内2008a)と思われる破片が1点出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

#### 第4・5号住居跡土層説明

##### <第4号住居跡>

第1層: 暗褐色土層(白色粒子を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しりまりはない。)

第2層: 黒褐色土層(ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しりまりはない。)

第3層: 暗茶褐色土層(ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性、しりまり共ない。)

第4層: 黒褐色土層(ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しりまりはない。)

##### <第5号住居跡>

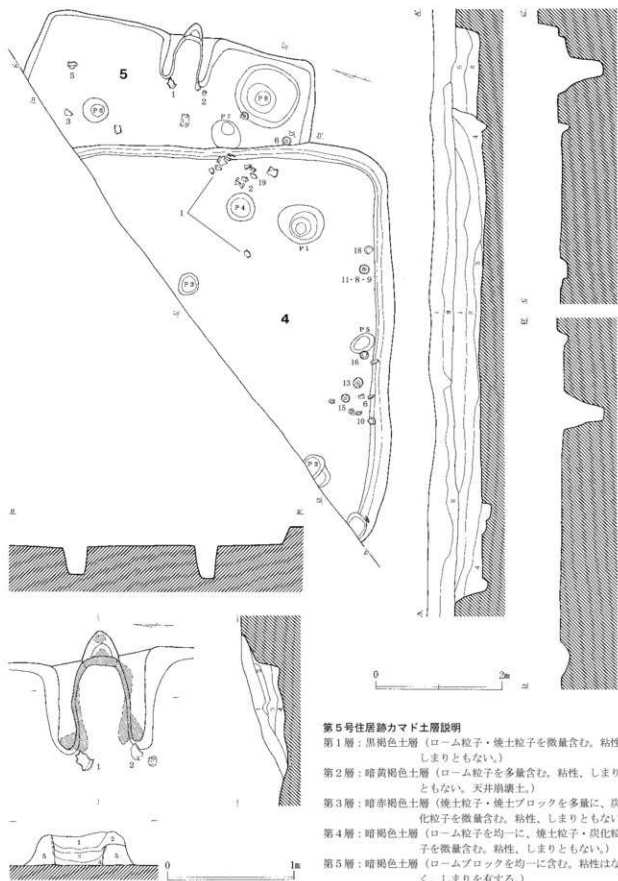
第5層: 黒褐色土層(白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しりまりを有する。)

第6層: 暗茶褐色土層(ローム粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しりまりを有する。)

#### 第4号住居跡出土遺物観察表

1	変	A. 口縁部径21.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 片岩粒、赤色粒。E. 茶褐色。F. 1/4。G. 胴部外面黒斑あり。H. 覆土中。
2	変	A. 口縁部径20.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 暗褐色。F. 1/2弱。H. 覆土中。
3	大形鉢	A. 口縁部径22.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡橙褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
4	大形鉢	A. 口縁部径22.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
5	小形変	A. 口縁部径17.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒。E. 暗茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
6	大形坏	A. 口縁部径18.2。器高6.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明橙褐色。F. 2/3。H. 床面付近。
7	坏	A. 口縁部径14.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 暗褐色。F. 1/3。H. 覆土中。覆土中。
8	坏	A. 口縁部径14.0。器高4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡橙褐色。F. 1/2。G. No 9・11と重なって出土。H. 覆土中。

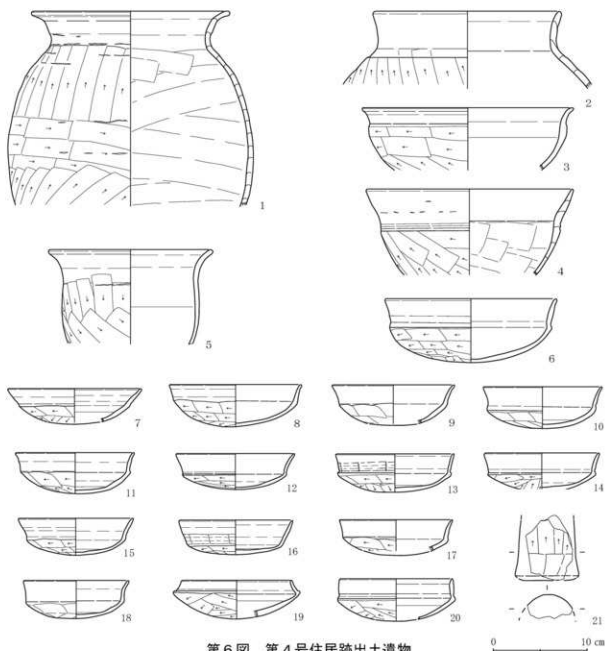




**第5号住居跡カマド土層説明**

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性、しまりともない。天井崩壊土。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量に、炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第5図 第4・5号住居跡



第6図 第4号住居跡出土遺物

9	坏	A. 口縁部径 13.0. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面ナデ. D. 赤色粒、白色粒. E. 淡橙褐色. F. 1/3. G. 体部外面磨滅. No 8・11と重なって出土. H. 覆土中.
10	坏	A. 口縁部径 12.6. 器高 4.4. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面ナデ. D. 赤色粒. E. 淡褐色. F. ほぼ完形. H. 床面直上.
11	坏	A. 口縁部径 12.6. 器高 4.4. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面ナデ. D. 赤色粒. E. 明橙褐色. F. 完形. G. No 8・9と重なって出土. H. 覆土中.
12	坏	A. 口縁部径 12.6. 器高 3.8. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面ナデ. D. 赤色粒、白色粒. E. 淡褐色. F. 2/3. H. 覆土中.
13	坏	A. 口縁部径 12.6. 器高 4.2. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面ナデ. D. 赤色粒. E. 明橙褐色. F. 完形. G. 体部外面黒斑あり. H. 床面直上.
14	坏	A. 口縁部径 12.2. 器高 4.1. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面ナデ. D. 赤色粒、白色粒. E. 淡橙褐色. F. 1/3. H. 覆土中.
15	坏	A. 口縁部径 12.1. 器高 3.9. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面ナデ. D. 赤色粒. E. 明橙褐色. F. ほぼ完形. H. 覆土中.
16	坏	A. 口縁部径 12.0. 器高 3.6. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面ナデ. D. 赤色粒、白色粒. E. 淡橙褐色. F. 完形. H. 床面直上.

17	環	A. 口縁部径 12.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 淡褐色, F. 1/2, H. 覆土中。
18	環	A. 口縁部径 11.2, 器高 4.1, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, E. 明橙褐色, F. ほぼ完形, G. 体部外面磨滅, H. 床面付近。
19	環	A. 口縁部径 11.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 暗茶褐色, F. 1/4, H. 覆土中。
20	環	A. 口縁部径 12.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, 黒色粒, E. 暗褐色, F. 1/3弱, H. 覆土中。
21	土製支脚	B. 手捏ね, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 外面ケズリの後ナデ, D. 小石, 白色粒, E. 茶褐色, F. 破片, H. 覆土中。

### 第5号住居跡（第5図、図版2）

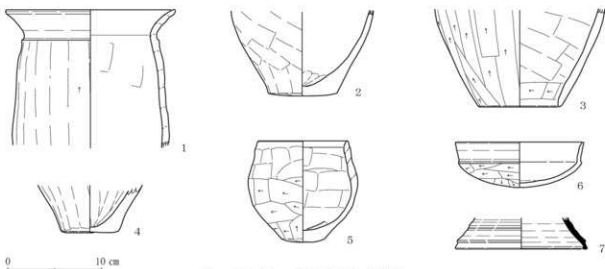
調査区の北西端に位置し、重複する第4号住居跡に住居の西側半分を切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が 4.58 m、東西方向は 2.12 m まで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 37cm ある。残存する各壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、3ヶ所検出されている。P6とP7は、おそらく住居の対角線上に配置されていると思われることから、4本支柱穴を構成するピットの一部と考えられる。形態は、円形と楕円形を呈し、床面からの深さはそれぞれ 45cm と 50cm ある。P8は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東コーナー部に位置する。平面形は、98cm × 95cm の円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは 70cm ある。

カマドは、東側壁の中央やや南側寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存長 90cm・最大幅 100cm ある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。内面は、全体的に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで若干傾斜している。袖は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築し、その先端部には長胴甕の破片を貼り付けて補強していたようである。

出土遺物は、住居の床面上や覆土中から土器が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第7図 第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径18.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面箇ナデ, D. 赤色粒, 角閃石, 小石, E. 明茶褐色, F. 1/4, H. カマド袖先端部補強。
2	甕	A. 底部径7.2, B. 粘土組織み上げ, C. 胴部外面ケズリ, 内面箇ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, 小石, E. 暗赤茶褐色, F. 1/2, H. カマド袖先端部補強。
3	大形甕	A. 底部径8.8, B. 粘土組織み上げ, C. 胴部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, 小石, E. 明茶褐色, F. 1/2, H. 覆土中。
4	甕	A. 底部径6.0, B. 粘土組織み上げ, C. 胴部外面ケズリ, 内面箇ナデ, D. 白色粒, 小石, E. 暗茶褐色, F. 1/2, G. 底部外面に木炭灰あり, H. 覆土中。
5	鉢	A. 口縁部径9.6, 器高10.7, 底部径4.6, B. 粘土組織み上げ, C. 外面ナデ後下半ケズリ, 内面箇ナデ, D. 片岩粒, 赤色粒, 白色粒, E. 茶褐色, F. 1/3, H. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径13.6, 器高4.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, E. 明橙褐色, F. 完形, H. 床面直上。
7	須恵器台付	A. 底部径14.0, B. ロクコ成形, C. 内外面回転ナデ, D. 白色粒, E. 淡灰色, F. 台端部1/8, H. 覆土中。

第6号住居跡(第8図、図版2)

調査区の中央付近に位置し、重複する第7号住居跡を切り、第5号土坑に切られている。また、住居跡の北側壁の西側は、第10号住居跡と接している。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が4.90m、南北方向が5.02mある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で55cmある。各壁下には幅20cm・深さ10cm程度の壁溝が巡っているが、カマド右側の住居東側壁下には見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、6ヶ所検出されている。P1～P4は、住居のほぼ対角線上に配置されており、4本支柱穴と考えられる。形態は、長さ30cm前後の円形や楕円形を呈し、深さはP3が15cmと極端に浅いほかは、いずれも40cm～45cmある。P5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東コーナー部に位置する。90cm×60cmのコーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈している。床面からの深さは76cmあり、底面はローム層下の礫層に達している。この貯蔵穴(P5)内からは、多くの土器が落ち込んだような状態で出土している。

カマドは、東側壁のほぼ中央に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、残存長90cm・最大幅104cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。内面は、全体的に良く焼けて赤色化している。燃焼面(火床)は、住居の床面とほぼ同じ高さで、ほぼ水平に作られている。袖は、あまり風化していないローム土を主体とする黄褐色土で、地山掘り残しの可能性もある。

出土物は、カマドや貯蔵穴(P5)の内外及び住居中央部の床面付近から、土器が比較的多く出土している。住居周辺部の壁際に近い土器は、破片が主体でその出土層位も覆土中のものが多いことから、住居廃絶後の覆土埋没過程中に周辺から投棄されたものと考えられる。土器以外では、旧石器時代の削器(No1)が覆土中から1点出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

1	削器	A. 長さ8.6, 幅3.2, 厚さ0.5～0.7, 重さ16.6g, C. 縦長剥片を素材に、両側面を腹面側から細かな剝調整を施す, D. 硬質砂岩, F. 完形, H. 覆土中。
2	甕	A. 口縁部径17.5, 器高37.4, 底部径6.4, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面箇ナデ, D. 石英, 結晶片岩粒, 細礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 貯蔵穴(P5)内。
3	甕	A. 口縁部径16.4, 器高30.2, 底部径6.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面箇ナデ, D. 石英, 礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 床面直上。



第8図 第6・7号住居跡

第6・7号住居跡土層説明

<第6号住居跡>

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、徳土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

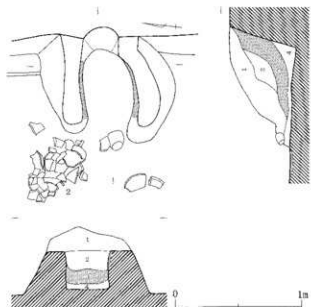
第2層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

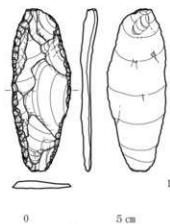
<第7号住居跡>

第4層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）



第9図 第6号住居跡カマド



第10図 第6号住居跡  
出土遺物(1)

第6号住居跡カマド土層説明

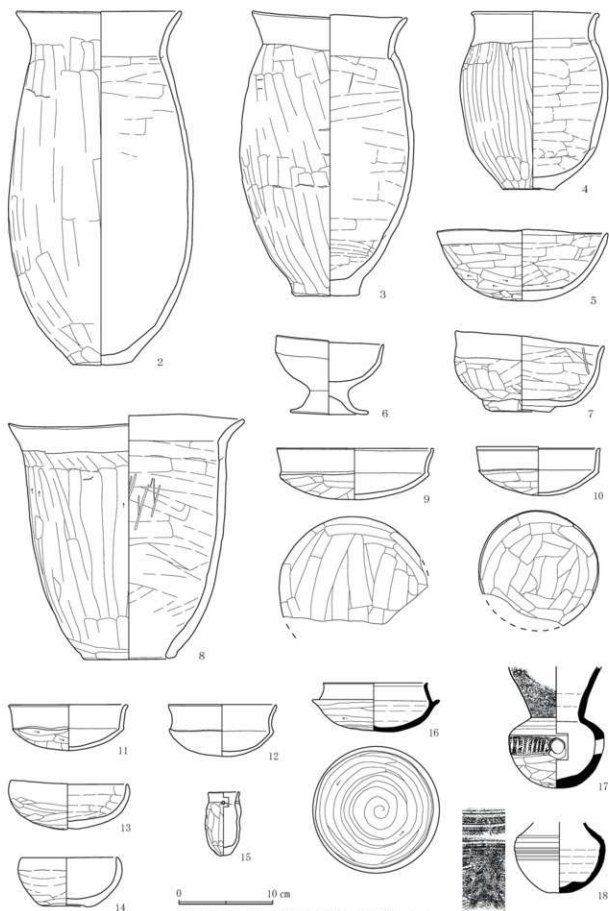
第1層: 黒褐色土層 (ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む、粘性、しまりともない)

第2層: 黄褐色土層 (ロームブロックを多量に、焼土粒子を微量含む、粘性、しまりともない)

第3層: 暗赤褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子を多量含む、粘性、しまりともない)

第4層: 黒褐色土層 (炭化粒子を多量に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む、粘性、しまりともない)

4	小形鉢	A. 口縁部径13.5、器高18.8、底部径5.5、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面踏ナデ、D. 雲母、角閃石、軽石、細砂、E. 淡褐色、F. 完形、H. 貯蔵穴(P5)内。
5	大形鉢	A. 口縁部径18.2、器高7.5、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面踏ナデ、D. 石英、角閃石、礫、E. 橙色、F. 完形、H. 床面付近。
6	高坏	A. 口縁部径11.3、器高8.1、脚端部径8.3、B. 粘土組織み上げ、C. 内外面とも観察不能。、D. 細砂、E. 橙色、F. 3/4、H. 覆土中。
7	大形鉢	A. 口縁部径15.7、器高8.0、底部径6.3、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面踏ナデ、D. 石英、結晶片岩、礫、E. 淡赤褐色、F. 完形、H. 床面直上。
8	大形甕	A. 口縁部径25.0、器高25.9、底部径9.8、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 石英、雲母、礫、E. 橙色、F. ほぼ完形、H. 貯蔵穴(P5)内。
9	坏	A. 口縁部径16.5、器高5.4、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 雲母、細砂、E. 橙色、F. 2/3、H. 床面直上。
10	坏	A. 口縁部径13.0、器高4.9、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 雲母、細砂、E. 橙色、F. ほぼ完形、H. 床面付近。
11	坏	A. 口縁部径12.4、器高4.8、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 石英、チャート、結晶片岩、E. 橙色、F. ほぼ完形、H. 床面付近。
12	坏	A. 口縁部径11.3、器高5.4、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 細砂、E. 橙色、F. 3/4、H. 覆土中。
13	坏	A. 口縁部径12.5、器高5.2、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 石英、雲母、礫、E. 淡褐色、F. ほぼ完形、H. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径10.1、器高5.1、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面踏ナデ、D. 角閃石、礫、E. 淡褐色、F. 2/3、H. 覆土中。
15	ミョウア	A. 口縁部径3.2、器高6.9、底部径1.4、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ、D. 石英、雲母、細砂、E. 淡褐色、F. 完形、G. 頸部に焼成前の穿孔あり、H. 覆土中。
16	須恵器 坏身	A. 口縁部径10.9、器高5.0、B. ロクロ成形、C. 口縁部内外面回転ナデ、体部外面回転踏ナデ、内面回転ナデ、D. 石英、雲母、結晶片岩、細砂、E. 浅黄色、F. 完形、H. 覆土中。
17	須恵器 甕	A. 残存高12.9、B. ロクロ成形、C. 内外面回転ナデの後、体部下半手持ち削削り、頭部外面に櫛歯状文、体部中位外面に櫛歯状工具による連続刺突文を施す、D. 雲母、長石、細砂、E. 淡灰白色、F. 口縁部欠損、H. 床面付近。
18	須恵器 甕	A. 残存高7.5、B. ロクロ成形、C. 体部内外面回転ナデ、体部上端に波状文の痕跡あり、D. 石英、細砂、E. 灰白色、F. 1/5、G. 外面に自然釉、H. 床面付近。



第11图 第6号住居跡出土遺物(2)

### 第7号住居跡（第8図、図版2）

調査区の中央付近に位置し、重複する第6号住居跡に住居跡の北側半分を切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、方形か長方形を呈していたと思われる。規模は、南西～北東方向が3.6m、南東～北西方向は2.17mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高15cmある。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、残存する部分内でP7～P9の3ヶ所が検出されているが、いずれも性格は不明である。この中でP7は、55cm×50cmの円形ぎみの形態で、深さは23cmあり、中から土器片が多く出土している。

出土遺物は、P7内や覆土中から土器が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代中期と考えられる。

### 第8号住居跡（第12図、図版2）

調査区の中央部に位置し、住居跡の北西側で第9号住居跡を、南東側で第10号住居跡と第11号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。本住居跡は、当初の住居より西側を80cm～90cm広げた拡張住居で、その際にカマドを東側壁から北側壁に作り替えている。

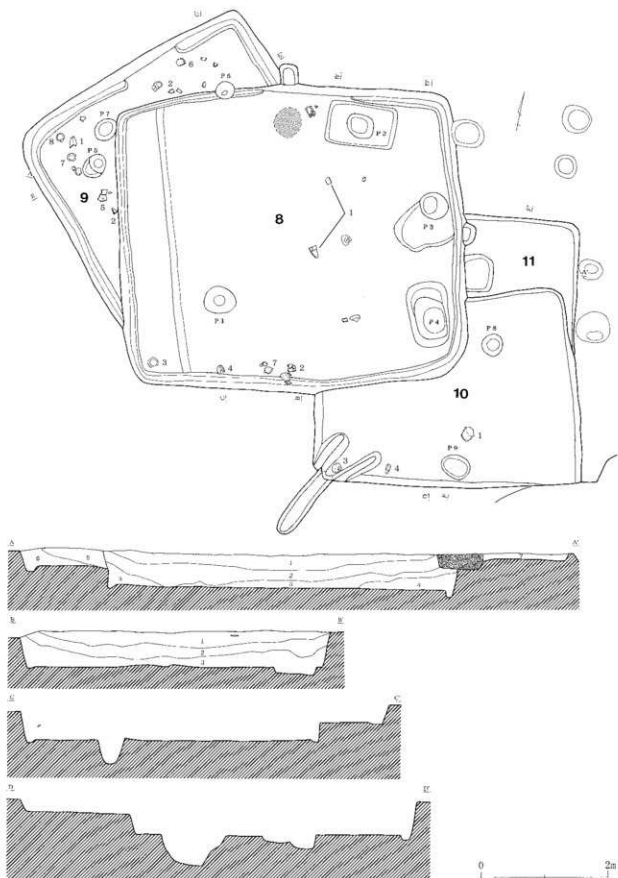
平面形は、コーナ部がやや丸みを持ち、南北両壁が若干張る東西方向に長い長方形を呈している。規模は、南北方向が4.80m、東西方向が5.40mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、床面からの深さは最高55cmある。各壁下には、幅15cm・深さ10cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、当初の床面の上に拡張後の床面がもう一面貼られている。ピットは、4ヶ所検出されている。この中で、P2は拡張後の北カマドに伴う貯蔵穴で、P4は当初の旧東カマドに伴う貯蔵穴である。いずれもカマドの右側に位置し、類似した形態と規模で、二段に掘り込まれている。床面からの深さはいずれも50cm程度である。P3は、旧東カマドの掘り方で、上面に顕著な貼床は施されていない。

カマドは、拡張時に東側壁から北側壁に作り替えられている。住居廃絶に伴う北カマドは、すでに崩壊して袖や天井部等の本体の痕跡は見られず、焼けて赤色化した燃焼面（火床）の痕跡と壁外に延びる煙道部の一部が残存していただけである。

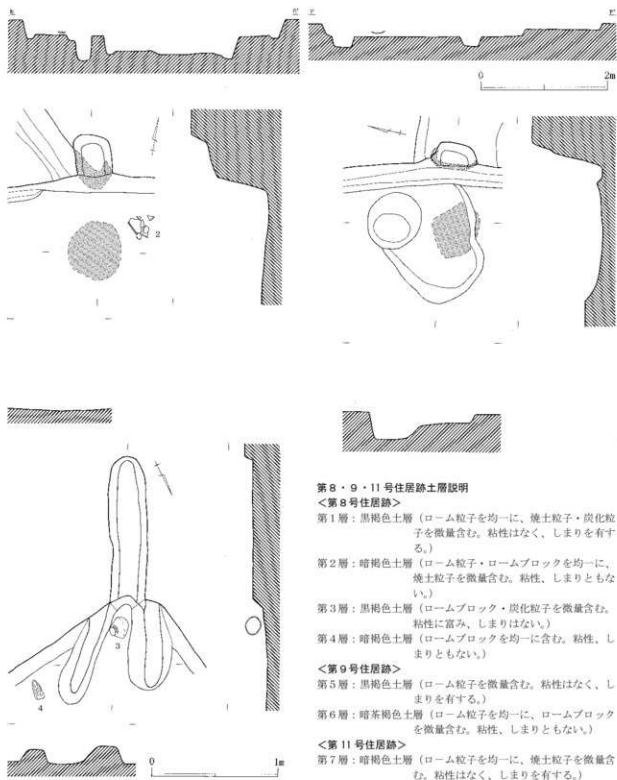
出土遺物は、住居中央部や壁際の床面上及び覆土中から、土器が少量出土している。これらの土器の中には、北関東の北部地域に見られるような内面にミガキを施し黒色処理した鉢（No2）や坏（No3）があり、注目される。土器以外では、北カマド手前の住居中央付近の床面上から、土製の管玉・切子玉・小玉が多数まとまって出土している（No11～No59）。これらは、その玉類の組み合わせから見て、古墳石室内の被葬者の装飾品として出土する例が多い石製の管玉や切子玉とガラス製の小玉を模倣したものと思われる。この類似した形態の玉類における土製と石製という材質の差は、本竪穴式住居跡の居住者と古墳被葬者との社会的な身分表象の一つを表すものであろう。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。





第 12 图 第 8·9·10·11 号住居跡 (1)



**第8・9・11号住居跡土層説明**

**<第8号住居跡>**

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第3層：黒褐色土層（ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

**<第9号住居跡>**

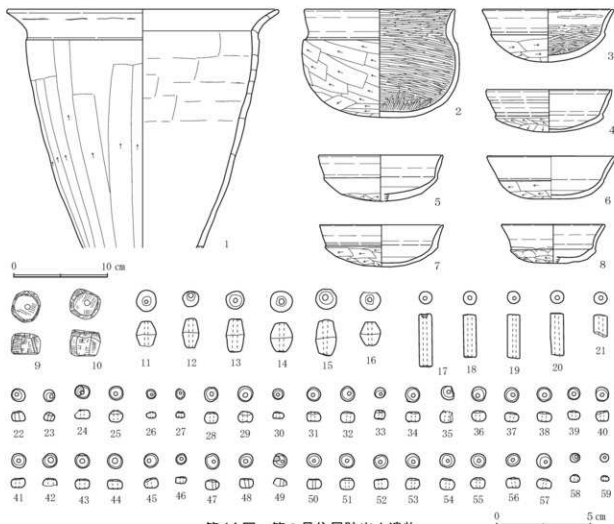
第5層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第6層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）

**<第11号住居跡>**

第7層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第13図 第8・9・10・11号住居跡（2）



第14図 第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物観察表

1	大形甕	A. 口縁部径 28.8, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデの後ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 片岩粒, 赤色粒, 白色粒, E. 淡茶褐色, F. 1/4, G. 胴部外面黒底あり, H. 床面直上。
2	大形鉢	A. 口縁部径 16.0, 器高 11.5, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ミガキ, D. 片岩粒, 赤色粒, 白色粒, E. 黒褐色, F. ほぼ完成, G. 内面黒色処理, H. 覆土中。
3	杯	A. 口縁部径 14.0, 器高 5.6, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ミガキ, D. 片岩粒, 赤色粒, E. 暗褐色, F. 2/3, G. 内面黒色処理, H. 床面直上。
4	杯	A. 口縁部径 13.2, 器高 4.5, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 白色粒, E. 暗茶褐色, F. 3/4, H. 覆土中。
5	杯	A. 口縁部径 13.2, 残存高 4.9, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, D. 片岩粒, 赤色粒, E. 淡茶褐色, F. 1/2弱, H. 旧貯蔵穴 (P4) 内。
6	杯	A. 口縁部径 13.6, 器高 4.6, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 片岩粒, 赤色粒, E. 暗茶褐色, F. 1/2, H. 旧貯蔵穴 (P4) 内。
7	杯	A. 口縁部径 13.0, 器高 4.4, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 橙褐色, F. ほぼ完成, H. 覆土中。
8	杯	A. 口縁部径 11.0, 器高 4.1, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, D. 片岩粒, 赤色粒, 白色粒, E. 淡茶褐色, F. 1/4, H. 覆土中。
9	石製玉	A. 直径 1.61, 高さ 1.05, 重さ 4.88g, C. 上下側面雑な研磨, D. 滑石, F. 完成, G. 穿孔は上下面に對して斜方向に穿たれている, H. 床面直上。
10	石製玉	A. 直径 1.59, 高さ 1.29, 重さ 5.79g, C. 上下側面雑な研磨, D. 滑石, F. 完成, G. 穿孔は上下面に對して斜方向に穿たれている, H. 床面直上。
11	土製切子玉	A. 最大径 1.11, 高さ 1.25, 重さ 1.47g, B. 手捏ね, C. ナデ, D. 土製, E. 黒褐色, F. 完成, G. 表面に面取りはない, 石製切子玉の模倣品, 穿孔は焼成前, H. 床面直上。
12	土製切子玉	A. 最大径 0.88, 高さ 1.55, 重さ 1.06g, B. 手捏ね, C. ナデ, D. 土製, E. 黒褐色, F. 完成, G. 表面に面取りはない, 石製切子玉の模倣品, 穿孔は焼成前, H. 床面直上。

13	土製切子玉	A. 最大径1.00、高さ1.70、重さ1.61g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 暗褐色。F. 完形。G. 表面に面取りはない。石製切子玉の模倣品。穿孔は焼成前。H. 床面直上。
14	土製切子玉	A. 最大径1.12、高さ1.51、重さ2.14g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 表面に面取りはない。石製切子玉の模倣品。穿孔は焼成前。H. 床面直上。
15	土製切子玉	A. 最大径1.09、高さ1.89、重さ2.04g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 表面に面取りはない。石製切子玉の模倣品。穿孔は焼成前。H. 床面直上。
16	土製切子玉	A. 最大径1.08、高さ1.21、重さ1.22g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 表面に面取りはない。石製切子玉の模倣品。穿孔は焼成前。H. 床面直上。
17	土製管玉	A. 直径0.68、高さ2.76、重さ1.83g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 暗褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。石製管玉の模倣品。H. 床面直上。
18	土製管玉	A. 直径0.65、高さ2.20、重さ1.24g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。石製管玉の模倣品。H. 床面直上。
19	土製管玉	A. 直径0.65、高さ2.22、重さ1.33g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。石製管玉の模倣品。H. 床面直上。
20	土製管玉	A. 直径0.69、高さ2.15、重さ1.45g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。石製管玉の模倣品。H. 床面直上。
21	土製管玉	A. 直径0.71、高さ1.05、重さ0.63g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 1/2。G. 穿孔は焼成前。石製管玉の模倣品。H. 床面直上。
22	土製小玉	A. 直径0.71、高さ0.50、重さ0.28g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
23	土製小玉	A. 直径0.62、高さ0.45、重さ0.16g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
24	土製小玉	A. 直径0.72、高さ0.49、重さ0.28g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 褐色。F. ほぼ完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
25	土製小玉	A. 直径0.71、高さ0.61、重さ0.37g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
26	土製小玉	A. 直径0.49、高さ0.31、重さ0.11g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
27	土製小玉	A. 直径0.55、高さ0.31、重さ0.10g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 灰褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
28	土製小玉	A. 直径0.75、高さ0.60、重さ0.36g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
29	土製小玉	A. 直径0.80、高さ0.54、重さ0.35g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
30	土製小玉	A. 直径0.59、高さ0.38、重さ0.14g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
31	土製小玉	A. 直径0.72、高さ0.50、重さ0.29g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
32	土製小玉	A. 直径0.80、高さ0.57、重さ0.34g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
33	土製小玉	A. 直径0.58、高さ0.43、重さ0.17g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
34	土製小玉	A. 直径0.75、高さ0.51、重さ0.33g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 灰褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
35	土製小玉	A. 直径0.71、高さ0.61、重さ0.29g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
36	土製小玉	A. 直径0.79、高さ0.56、重さ0.36g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
37	土製小玉	A. 直径0.77、高さ0.49、重さ0.31g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
38	土製小玉	A. 直径0.75、高さ0.50、重さ0.34g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
39	土製小玉	A. 直径0.62、高さ0.42、重さ0.24g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
40	土製小玉	A. 直径0.74、高さ0.53、重さ0.31g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
41	土製小玉	A. 直径0.79、高さ0.49、重さ0.33g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
42	土製小玉	A. 直径0.79、高さ0.31、重さ0.19g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
43	土製小玉	A. 直径0.79、高さ0.59、重さ0.34g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
44	土製小玉	A. 直径0.80、高さ0.50、重さ0.33g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
45	土製小玉	A. 直径0.75、高さ0.55、重さ0.29g。B. 手捏ね。穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。

46	土製小玉	A. 直径0.58、高さ0.35、重さ0.14g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
47	土製小玉	A. 直径0.80、高さ0.51、重さ0.34g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 灰褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
48	土製小玉	A. 直径0.71、高さ0.50、重さ0.32g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 灰褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
49	土製小玉	A. 直径0.70、高さ0.41、重さ0.20g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 褐色。F. 1/2。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
50	土製小玉	A. 直径0.79、高さ0.51、重さ0.34g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
51	土製小玉	A. 直径0.78、高さ0.60、重さ0.37g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 灰褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
52	土製小玉	A. 直径0.72、高さ0.54、重さ0.33g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
53	土製小玉	A. 直径0.72、高さ0.58、重さ0.37g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
54	土製小玉	A. 直径0.79、高さ0.59、重さ0.39g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 灰褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
55	土製小玉	A. 直径0.75、高さ0.59、重さ0.33g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
56	土製小玉	A. 直径0.72、高さ0.52、重さ0.32g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 灰褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
57	土製小玉	A. 直径0.79、高さ0.52、重さ0.34g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 灰褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
58	土製小玉	A. 直径0.49、高さ0.39、重さ0.10g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 黒褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。
59	土製小玉	A. 直径0.42、高さ0.29、重さ0.05g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 土製。E. 褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。ガラス製小玉の模倣品。H. 床面直上。

### 第9号住居跡（第12図、図版2）

調査区の中央部に位置し、重複する第8号住居跡に住居跡の大半を切られている。

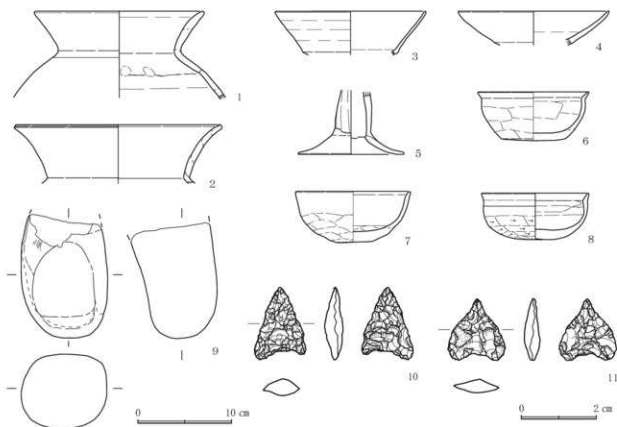
平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、北東～南西方向が4.13m、北西～南東方向は3.40mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で25cmある。残存する各壁下には、幅20cm・深さ5cm～10cm程度の壁溝が巡っているが、北西側壁の中央付近は1ヶ所途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を、平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、残存する部分から、P5～P7の3ヶ所が検出されている。P5とP6は、住居の対角線上に配置される4本主柱穴の一部と考えられる。平面形は30cm前後の楕円形を呈し、床面からの深さはいずれも40cm前後ある。

出土遺物は、床面付近から土器が比較的多く出土している。土器以外では、自然石を利用した砥石の破片（No9）と、縄文時代の石鏝が2点（No10・11）覆土中から出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代中期と考えられる。

第9号住居跡出土土物観察表

1	壺	A. 口縁部径18.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒。E. 淡黄褐色。F. 口縁部1/3。H. 床面付近。
2	壺	A. 口縁部径22.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 淡褐色。F. 口縁部1/6。H. 覆土中。
3	高坏	A. 口縁部径16.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 淡茶褐色。F. 口縁部1/4。H. 床面付近。
4	高坏	A. 口縁部径16.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. 口縁部1/5。H. 覆土中。
5	高坏	A. 脚端部径11.2。B. 粘土組織み上げ。C. 脚部外面ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明褐色。F. 脚部のみ。H. 床面直上。



第15図 第9号住居跡出土遺物

6	坏	A. 口縁部径11.8、器高5.2、底部径6.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡黄褐色。F. 2/3。G. 底部外面に黒斑あり。H. 床面付近。
7	坏	A. 口縁部径12.2、器高5.4、底部径3.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒。E. 茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
8	坏	A. 口縁部径11.4、器高4.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明橙褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
9	砥石	A. 残存長13.0、幅9.1、厚さ8.7、重さ1520g。C. 全体に良く磨かれている。D. 斑晶質安山岩。F. 端部欠損。H. 覆土中。
10	石鏃	A. 長さ1.9、幅1.4、厚さ0.5、重さ0.79g。C. 両面剝離調整。D. 黒曜石。F. 完形。G. 凹基無茎鏃。H. 覆土中。
11	石鏃	A. 長さ1.65、幅1.5、厚さ0.4、重さ0.65g。C. 両面剝離調整。D. 黒曜石。F. 完形。G. 凹基無茎鏃。H. 覆土中。

### 第10号住居跡（第12図、図版2）

調査区の中央部に位置し、重複する第8号住居跡に切られ、第11号住居跡を切っている。また、住居跡南側壁の東側の一部は、第6号住居跡と接している。

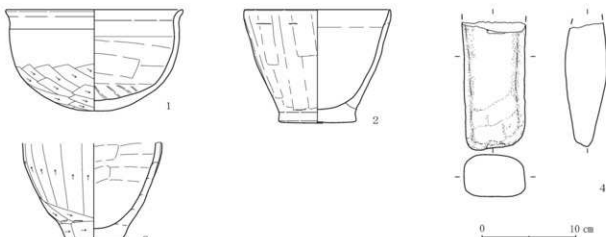
平面形は、コーナー部が丸みをもつ長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が4.11m、南北方向が2.93mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、P8とP9の2ヶ所が検出されているが、いずれもその性格は不明である。

カマドは、住居南西コーナー部に付設されている。規模は、全長198cm、最大幅80cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。内面は、比較的良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面と同じ高さで、ほぼ水平に作られている。袖は、

ロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、燃焼面より10cm程度段をもって高くなり、住居外に110cm程度水平に延びて立ち上がっている。カマド内からは、甕の下半が横になった状態で出土しているが、燃焼部のかなり奥壁に近い位置であることから、支脚として転用されたものではないと思われる。

出土遺物は、住居跡の床面上や覆土中とカマド内から、土器が少量出土している。土器以外では、自然石を利用した砥石が1点出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第16図 第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物観察表

1	大形鉢	A. 口縁部径18.8、器高10.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 暗茶褐色。F. 1/2。H. 床面直上。
2	鉢	A. 口縁部径15.4、器高12.0、底部径8.2。B. 粘土組織み上げ。C. 外面ケズリの後ナデ。内面ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 1/2弱。H. 覆土中。
3	甕	A. 残存高10.2、底部径5.8。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 暗茶褐色。F. 胴部下半分のみ。H. カマド内。
4	砥石	A. 残存長13.5、幅6.8、厚さ4.5、重さ670g。B. 自然石を利用。C. 上下両側面とも良く磨かれている。D. 閃緑岩。F. 2/3。G. 一部被熱により赤色化。H. 覆土中。

### 第11号住居跡（第12図、図版2）

調査区の中央部に位置する。住居跡の大半を、重複する第8号住居跡と第10号住居跡に切られており、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向は2.00mまで、東西方向は1.80mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で11cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、古墳時代中期～後期と考えられるが、詳細は不明である。

### 第12号住居跡（第17図、図版3）

調査区の北東側寄りに位置し、重複する第13・14・17号住居跡を切り、住居跡の北西コーナー部の上面を攪乱土坑に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が4.00m、南北方向が3.88mある。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で42cmある。壁溝は、カマド右側の住居南東コーナー部付近以外は、各壁下を巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、中央部は比較的堅緻であるが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、P1～P8の8ヶ所が検出されている。P1～P4は、住居のほぼ対角線上に配置されており、4本主柱穴と考えられる。形態は、20cm～25cm程度の円形や楕円形を呈し、深さは20cm～30cmある。P6は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東コーナー部に位置する。上面は105cm×75cmのコーナー部の丸み強い不整形長方形を呈し、中央部が直径40cmの円形のピット状に深くなっている。床面からの深さは60cmある。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央の位置に、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長103cm・最大幅114cmある。燃焼部は、住居の壁を20cm程度掘り込んでいるが、大部分は住居内に位置する。内面は、比較的良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さと思われる。袖は、ロームブロックを多量に含む黄褐色土（第6層）を芯にして、その上に粘性の強い暗茶褐色土（第5層）を盛り上げて構築している。カマド内からは、No4とNo6完形の長胴甕が2個体ほぼ横に並んで出土しており、その出土状態から本カマドの土器の掛け方は、2個並置式であったと考えられる。燃焼面の中央付近から支脚に使用された長さ20cm弱の棒状の川原石が出土しているが、本来は左側の甕の下にあったものが、カマド天井部等の崩壊に伴って、甕と一緒に動いたものと思われる。

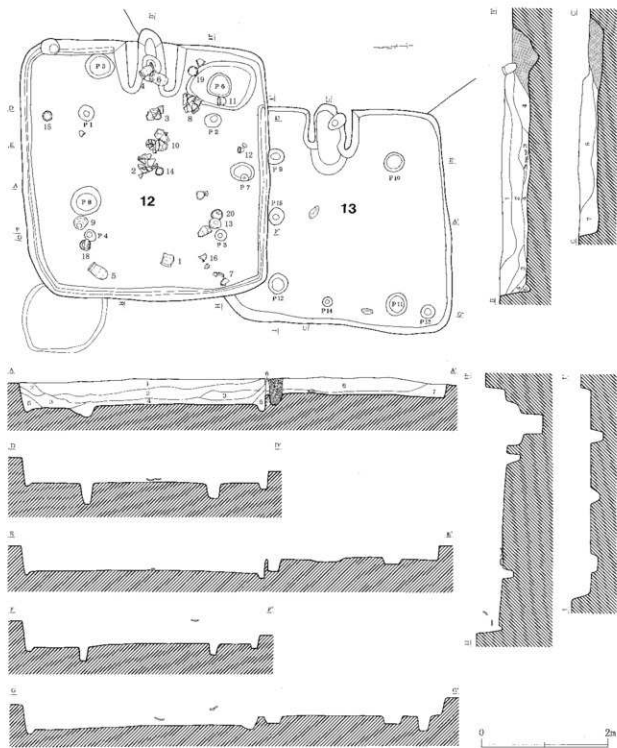
出土遺物は、カマドや貯蔵穴（P6）の内外や住居中央部から西側の床面上から、完形に近い土器が多く出土している。これらの土器は、その出土状態から見て、本住居で使用していたものを住居の廃絶に伴って、そのまま遺棄したものと思われる。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第12号住居跡出土土器観察表

1	甕	A. 口縁部径20.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面窪ナゲ。D. 赤色粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 口縁部1/3。G. 外面に黒斑あり。H. 覆土中。
2	甕	A. 口縁部径16.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面窪ナゲ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. 上半のみ。H. 床面直上。
3	甕	A. 口縁部径16.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面窪ナゲ。D. 片岩粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 上半のみ。H. 床面直上。
4	甕	A. 口縁部径15.0。器高25.2。底部径6.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面窪ナゲ。D. 片岩粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 完形。G. 内外面に黒斑あり。H. カマド内。
5	甕	A. 口縁部径14.8。器高29.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面窪ナゲ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 淡茶褐色。F. 完形。H. 床面付近。
6	甕	A. 口縁部径15.4。器高26.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面窪ナゲ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. 完形。H. カマド内。
7	甕	A. 口縁部径14.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面窪ナゲ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 暗橙褐色。F. 口縁部1/3。H. 覆土中。
8	大形甕	A. 口縁部径21.6。器高22.9。底部径9.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面窪ナゲ。D. 片岩粒、白色粒。E. 暗褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。

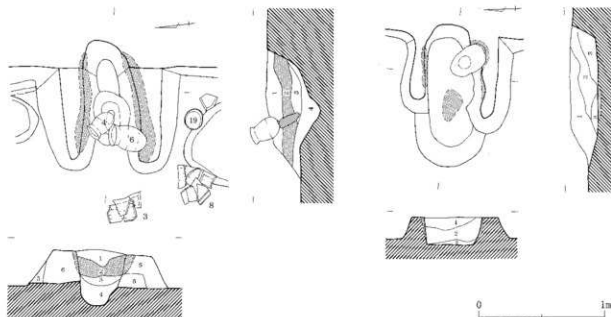




第17図 第12・13号住居跡

第12・13号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）



第 18 図 第 12・13号住居跡カマド

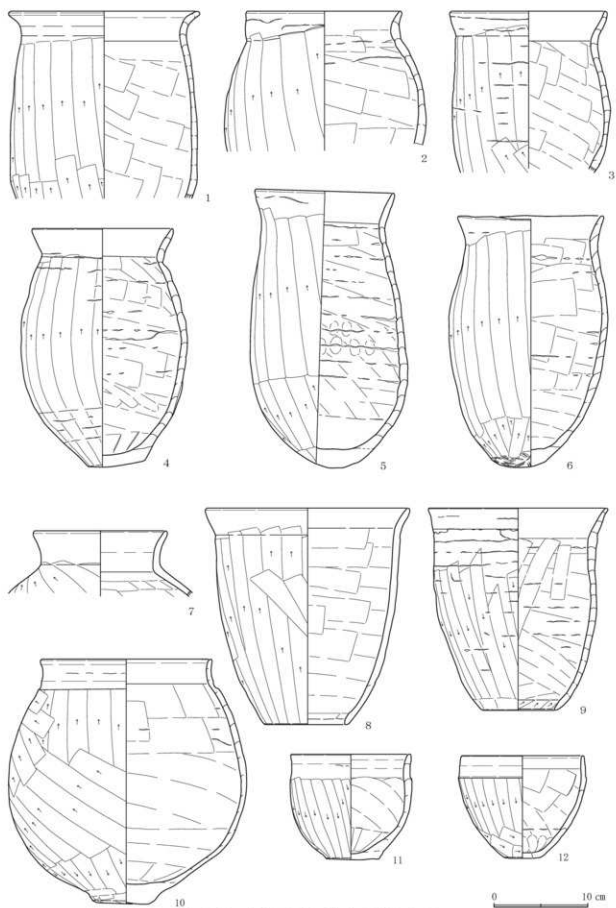
第 12 号住居跡カマド土層説明

- 第 1 層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む、粘性、しまりともない。）  
 第 2 層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む、粘性、しまりともない。）  
 第 3 層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子・ロームブロックを微量含む、粘性、しまりともない。）  
 第 4 層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む、粘性、しまりともない。）  
 第 5 層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む、粘性に富み、しまりを有する。）  
 第 6 層：黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

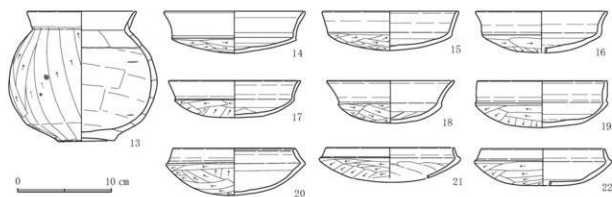
第 13 号住居跡カマド土層説明

- 第 1 層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む、粘性、しまりともない。）  
 第 2 層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む、粘性、しまりともない。）  
 第 3 層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む、粘性、しまりともない。）

9	大形甕	A. 口縁部径 19.0、器高 21.4、底部径 8.1、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデの後ケズリ、内面鏡ナデ、D. 片岩粒、白色粒、E. 茶褐色、F. 完形、H. 床面直上。
10	甕	A. 口縁部径 18.2、器高 25.9、底部径 6.5、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面鏡ナデ、D. 片岩粒、赤色粒、白色粒、E. 暗褐色、F. ほぼ完形、G. 底部外面に黒斑あり、H. 床面直上。
11	小形甕	A. 口縁部径 12.8、器高 11.2、底部径 5.7、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面鏡ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 暗褐色、F. 完形、H. 貯蔵穴（P6）内。
12	小形甕	A. 口縁部径 13.0、器高 10.9、底部径 3.8、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面鏡ナデ、D. 白色粒、E. 淡茶褐色、F. 3/4、G. 外面に黒斑あり、H. 床面付近。
13	小形甕	A. 口縁部径 11.6、器高 13.8、底部径 6.1、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面鏡ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 暗褐色、F. ほぼ完形、G. 胴部外面に一部布目圧痕あり、H. 床面直上。
14	坏	A. 口縁部径 15.0、器高 4.5、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 明橙褐色、F. 完形、H. 床面直上。
15	坏	A. 口縁部径 14.4、器高 4.1、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 明茶褐色、F. 完形、H. 床面付近。
16	坏	A. 口縁部径 14.0、器高 4.4、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 茶褐色、F. 口縁部 1/4、H. 床面付近。
17	坏	A. 口縁部径 14.0、器高 3.9、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 白色粒、E. 明茶褐色、F. 口縁部 1/4、H. 覆土中。
18	坏	A. 口縁部径 13.6、器高 4.5、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 淡茶褐色、F. 完形、H. 床面付近。
19	坏	A. 口縁部径 13.8、器高 5.0、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 淡茶褐色、F. ほぼ完形、H. 床面付近。
20	坏	A. 口縁部径 13.0、器高 5.0、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 淡橙褐色、F. ほぼ完形、H. 床面直上。
21	坏	A. 口縁部径 13.8、残存高 3.2、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 白色粒、E. 暗茶褐色、F. 口縁部 1/4、H. 覆土中。
22	坏	A. 口縁部径 13.6、器高 4.0、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 暗茶褐色、F. 口縁部 1/4、H. 覆土中。



第 19 图 第 12 号住居跡出土遺物 (1)



第20図 第12号住居跡出土遺物(2)

### 第13号住居跡(第17図、図版4)

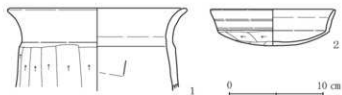
調査区の北東側寄りに位置し、重複する第12号住居跡に住居北側の一部を切られ、第14・17号住居跡を切っている。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みを帯び若干平行四辺形状に歪んだ方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が3.45m、南北方向は3.57mまで測れる。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で28cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、住居跡内から、P9～P15の7ヶ所が検出されているが、P15は後世の攪乱である。この中でP1～P4は、住居の平面形と相似的な配置をとることから、4本主柱穴の可能性が考えられる。いずれも直径30cm程度の円形を呈し、床面からの深さは10cm～20cm程度で比較的浅い。

カマドは、住居東側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長111cm・最大幅88cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁とほぼ一致している。内面は、良く焼けて赤色化している。燃焼面(火床)は、住居の床面より6cm程度低く、ほぼ平坦で水平に作られている。袖は、あまり風化していないローム土を主体とする黄褐色土で、地山掘り残しの可能性もある。

出土遺物は、住居中央部と西側壁際の床面付近から、長さ20cm～25cmの自然石が出土した他は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代後期と考えられるが、重複する第12号住居跡の出土土器との時間差は微妙である。



第21図 第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土土物観察表

1	甕	A. 口縁部径19.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 口縁部1/4。H. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径13.2。器高3.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒。E. 淡橙褐色。F. 1/2。H. 覆土中。

### 第 14 号住居跡 (第 23 図、図版 4)

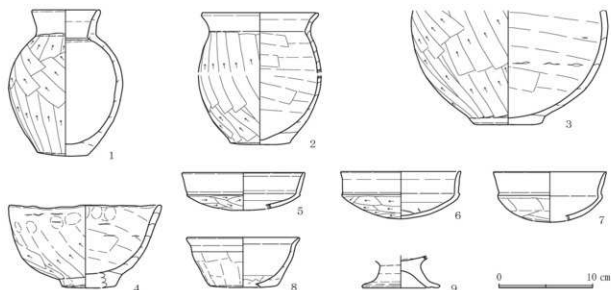
調査区の北東側寄りに位置し、重複する第 12・13 号住居跡に住居西側の一部を切られ、第 17 号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、北東～南西方向が 4.66 m、北西～南東方向が 5.05 m である。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 34 cm である。壁溝は、各壁下に見られるが、部分的に途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、P 1～P 9 の 9 カ所が検出されている。この中で P 1～P 3 は、住居のほぼ対角線上に配置されていることから、4 本主柱穴を構成するピットの可能性が考えられる。P 6 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。上面は、125 cm × 90 cm の丸みの強い隅丸長方形ぎみの形態で、内部にピット状の掘り込みが 2 ヶ所ある。床面からの深さは 55 cm である。

カマドは、住居北東側壁の中央付近に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。燃焼部は住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。燃焼面(火床)は、住居の床面と同じ高さで、ほぼ水平に作られている。袖は、ローム粒子を多量に含む黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。

出土遺物は、貯蔵穴(P 6)内とその周辺の床面付近から、完形に近い土器や扁平な片岩系の川原石が複数出土している。

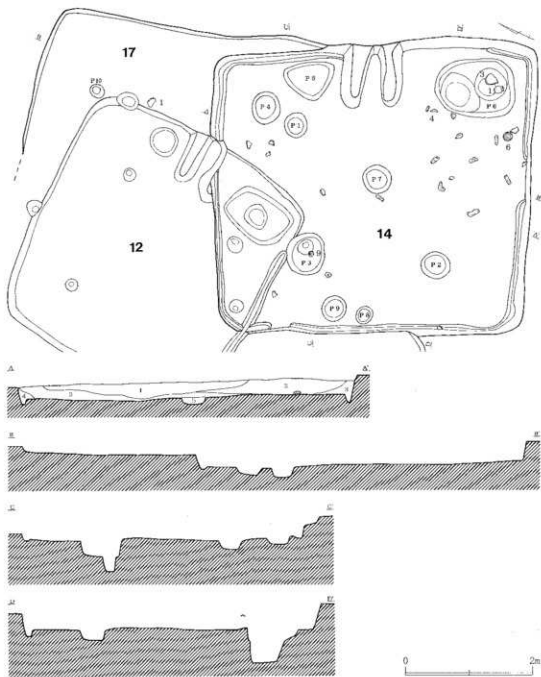
本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第 22 図 第 14 号住居跡出土遺物

#### 第 14 号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A. 口縁部径 7.4、器高 15.5、底部径 5.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 完形。G. 胴部外面黒斑あり。H. 貯蔵穴(P 6)上面。
2	小形甕	A. 口縁部径 12.4、推定高 14.0、底部径 6.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。



第23図 第14・17号住居跡

第14号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

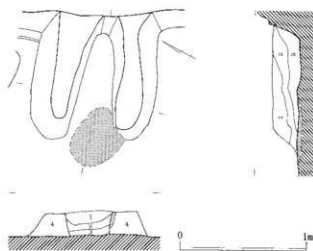
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）

第5層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

3	壺	A. 底部径7.3, B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 胴部下半のみ。G. 底部外面黒斑あり。H. 貯蔵穴（P6）上面。
4	鉢	A. 口縁部径16.2, 器高8.8, 底部径6.7, B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ケズリの後ナデ、内面窪ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。



#### 第14号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。粘性、しまりともない）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない）

第4層：黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第24図 第14号住居跡カマド

5	坪	A. 口縁径13.0, 残存高3.8, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 明茶褐色, F. 口縁部1/4弱, G. 体部外面黒斑あり, H. 覆土。
6	坪	A. 口縁径12.6, 器高5.0, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 白色粒, E. 淡黄褐色, F. 完形, G. 体部外面黒斑あり, H. 床面付近。
7	坪	A. 口縁径12.0, 残存高5.3, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 明燈褐色, F. 1/2, G. 体部外面黒斑あり, H. 覆土。
8	坪	A. 口縁径12.0, 残存高5.3, 底部径7.0, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ, 内面ナデ, 底部外面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 茶褐色, F. 1/4, H. 覆土。
9	高坪	A. 脚端径8.2, B. 粘土紐積み上げ, C. 脚部内外面ヨコナデ, D. 赤色粒, E. 茶褐色, F. 脚部のみ, H. 主柱穴(P3)上面。

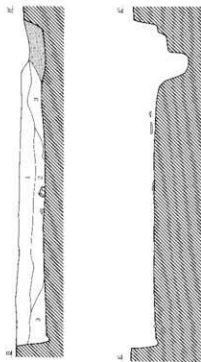
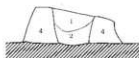
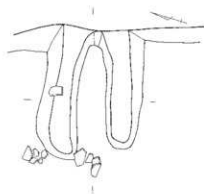
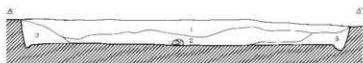
#### 第15号住居跡（第25図、図版4）

調査区の北側に位置し、重複する第16・22・24号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が5.05m、南北方向が5.10mある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で48cmある。壁溝は、住居東側壁以外の各壁下に巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、6カ所検出されている。P1～P4は、4本主柱穴と考えられるもので、住居のほぼ対角線上に配置されている。P6は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東コーナー部に位置する。上面は、88cm×85cmの丸みを持つ方形ぎみの形態で、西側が楕円形のピット状に2段に深くなっている。床面からの深さは54cmある。

カマドは、東側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。燃焼面（火床）は、住居床面よりも若干低く、奥壁に向かってやや傾斜して作られている。袖は、茶褐色粘土とロームブロックを均一に含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。左側袖の先端付近には土器の破片が多く見られるが、袖先端の補強に使われていたものではないと思われる。

出土遺物は、住居東側半分の床面上から、比較的多くの土器が散乱したような状態で出土している。これらの土器は、その出土状態から見て、住居で日常的に使用していたものを、住居の廃絶とともにそのまま遺棄したと考えられる。土器以外では、住居の南西コーナー



#### 第15号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

#### 第15号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

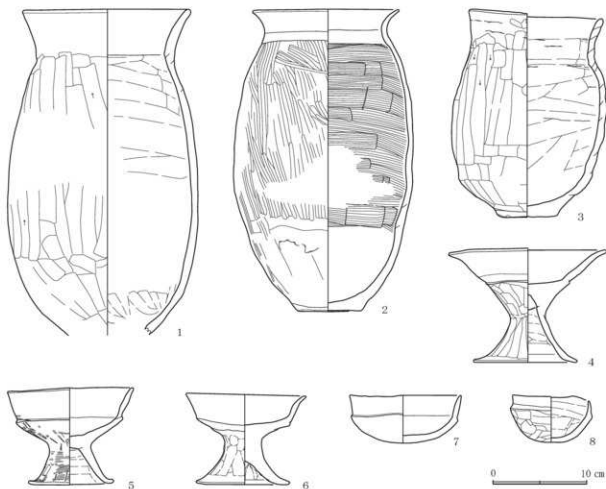
第2層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

第4層：暗褐色土層（茶褐色粘土・ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第25図 第15号住居跡





第 26 図 第 15 号住居跡出土遺物

部に寄った壁際の床面付近から、長さ 10cm 前後の棒状の自然石が、7 個台形に配列されたような状態で出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第 15 号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 17.7, 残存高 34.4, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 石英, 結晶片岩, 角閃石, 礫, E. 赤褐色, F. 2/3, H. 床面付近。
2	甕	A. 口縁部径 15.5, 器高 31.9, 底部径 6.6, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデ付け, 内面板目状工具によるナデ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 橙色, F. 3/4, H. 床面直上。
3	甕	A. 口縁部径 14.3, 器高 22.1, 底部径 6.1, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 石英, 礫, E. 淡赤褐色, F. ほぼ完形, H. 覆土中。
4	高坏	A. 口縁部径 16.7, 器高 12.1, 脚端部径 10.8, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 坏部外面ケズリ, 内面ナデ, 脚部外面ケズリ, 内面笠ナデ, 脚端部内外面ヨコナデ, D. 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 床面直上。
5	高坏	A. 口縁部径 13.4, 器高 10.2, 脚端部径 9.1, B. 粘土粗積み上げ, C. 外面ミガキ, 坏部内面笠ナデ, D. 角閃石, 長石, 細礫, E. 淡赤褐色, F. 1/3, G. 外面及び坏部内面赤彩, H. 床面直上。
6	高坏	A. 口縁部径 12.7, 器高 9.7, 脚端部径 10.1, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 脚部外面ケズリの後ナデ, 内面ナデ, 脚端部内外面ヨコナデ, D. 雲母, 細礫, E. 橙色, F. 2/3, H. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径 11.7, 器高 5.0, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 雲母, 細礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 床面付近。
8	坏	A. 口縁部径 8.0, 器高 5.0, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 石英, 細礫, E. 橙色, F. 口縁部一部欠損, H. 床面直上。

### 第16号住居跡（第28図、図版4）

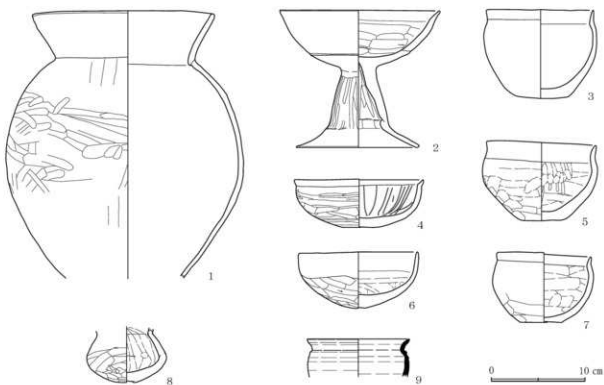
調査区の北側に位置し、重複する第15号住居跡に住居跡の南西側壁を切られ、住居中央部を後世の攪乱土坑に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.86m、北西～南東方向が5.00mある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で43cmある。壁溝は、残存する各壁下を巡っているが、北東側壁や南東側壁で一部途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、8カ所検出されている。この中でP6は、カマド右側の住居東コーナー部付近に位置することから、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるものと類似している。95cm×90cmの円形で、床面からの深さは35cmある。

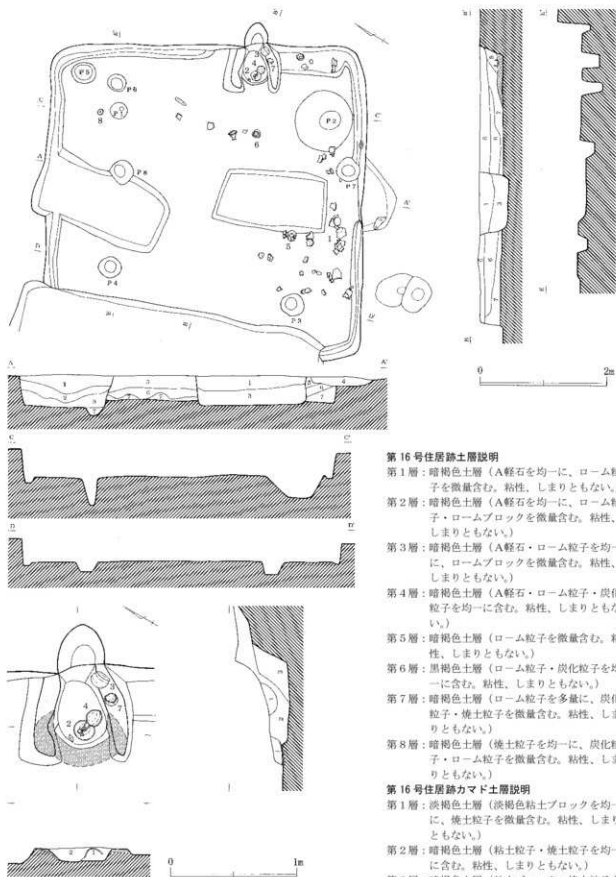
カマドは、北東側壁の中央やや南側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。燃焼面（火床）は、住居床面よりも若干低く水平に作られている。焚口付近は比較的良く焼けて赤色化している。支脚は、燃焼面の中央付近に台付鉢を伏せた転用支脚が見られる。袖は、白色粘土ブロックを多量に含む暗黄白色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、住居壁外に30cmほど延びて掘平されている。

出土遺物は、カマドの内外やその周辺の床面付近から、本住居で使用されていたと思われる土器の破片が多く出土している。また、住居南東側の南側コーナー部に近い覆土中から出土した多くの土器片は、住居廃絶後に周辺から投げ込まれたものであろう。土器以外では、覆土中から砥石の破片が1点出土している（写真図版18、No10）。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第27図 第16号住居跡出土遺物



#### 第16号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第2層：暗褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第3層：暗褐色土層（A軽石・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第4層：暗褐色土層（A軽石・ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）  
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第6層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）  
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第8層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

#### 第16号住居跡カマド土層説明

- 第1層：淡褐色土層（淡褐色粘土ブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第2層：暗褐色土層（粘土粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）  
 第3層：暗褐色土層（粘土ブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

第28図 第16号住居跡

第16号住居跡出土土物観察表

1	炭	A. 口縁部径19.2, 残存高28.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部内外面ナデ, D. 石英, 礫, E. 淡褐色, F. 底部欠損, H. 覆土中。
2	高坏	A. 口縁部径16.9, 器高14.5, 脚端部径13.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ナデ, 脚部外面ミガキ, 内面絞目, 脚端部内外面ヨコナデ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. カマド支脚。
3	鉢	A. 口縁部径11.3, 器高9.4, 底部径5.5, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 雲母, 細礫, E. 淡褐色, F. 1/2, H. カマド上。
4	坏	A. 口縁部径13.8, 器高5.1, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリの後ナデ, 内面ナデ, D. 石英, 長石, 細礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, G. 内面に放射状暗文を施す, H. カマド内。
5	鉢	A. 口縁部径11.5, 器高8.5, 底部径4.5, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, D. 雲母, 礫, E. 淡赤褐色, F. 3/4, H. 床面付近。
6	坏	A. 口縁部径12.5, 器高6.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 淡褐色, F. ほぼ完形, H. 床面付近。
7	鉢	A. 口縁部径10.0, 器高7.5, 底部径4.3, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 淡赤褐色, F. ほぼ完形, H. カマド上。
8	小形直口壺	A. 残存高5.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデの後下半ケズリ, 内面指ナデ, D. 石英, 雲母, 角閃石, 細礫, E. 橙色, F. 口縁部欠損, H. 床面直上。
9	須恵器埴	A. 口縁部径10.8, B. ロクロ成形, C. 内外面回転ナデ, D. 白色粒, E. 暗灰色, F. 口縁部1/5, H. 覆土中。
10	柱状磁石(図版18)	A. 長さ8.2, 幅3.55, 厚さ1.95, 重さ72.94g, B. 削り出し, C. 5面に擦痕, D. 凝灰岩, F. 一部欠損, H. 覆土中。

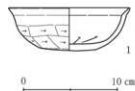
第17号住居跡(第23図)

調査区の北東側寄りに位置し、重複する第12・14号住居跡に住居跡の大半を切られ、住居跡の西側はすでに掘平されている。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向は4.15mまで、東西方向は2.40mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で10cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。ピットは、P10の1ヶ所が検出されているが、本住居跡に伴うものか明確ではない。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土したただである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係及び覆土の状態や出土土器から、古墳時代中期と考えられる。



第29図 第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土土物観察表

1	坏	A. 口縁部径12.8, 器高4.5, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 暗褐色, F. 3/4, G. 胴部外面黒斑あり, H. 床面付近。
---	---	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

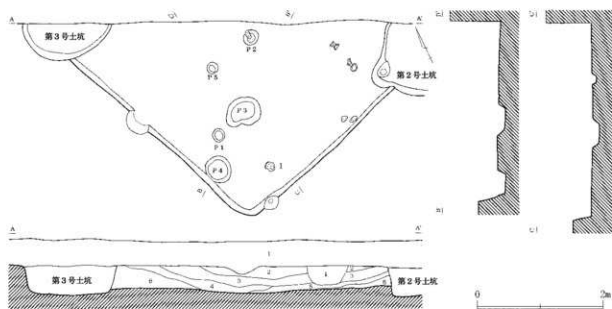
第18号住居跡(第30図、図版5)

調査区の北東端に位置し、重複する第2・3号土坑に切られている。住居跡の北東側半分は調査区外のため、遺構の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出されて部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ方形か長方形を呈するものと思われる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で32cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、P1~P5の5ヶ所が検出されているが、その性格が分かるものはない。

出土遺物は、住居跡の床面上や覆土中から、土器が少量出土したただである。

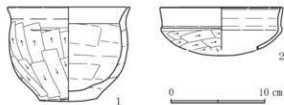
本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代後期と考えられる。



第30図 第18号住居跡

第18号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりもない。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりもない。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性、しまりもない。）  
 第4層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性、しまりもない。）  
 第5層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘性、しまりもない。）  
 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性、しまりもない。）



第31図 第18号住居跡出土遺物

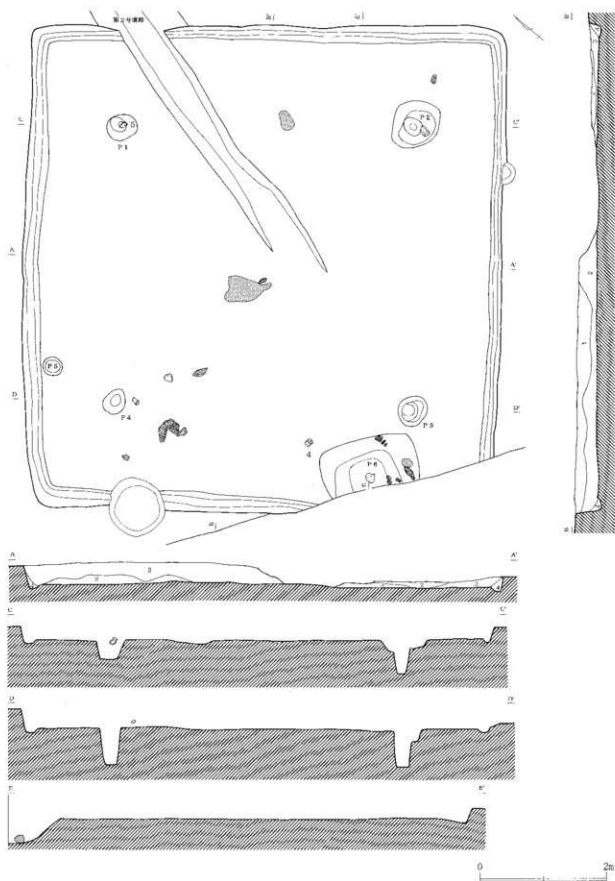
第18号住居跡出土物観察表

1	鉢	A. 口縁部径13.0、器高10.0、底部径6.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. 1/2。H. 床面直上。
2	坏	A. 口縁部径13.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 茶褐色。F. 口縁部1/4。H. 覆土中。

第19号住居跡（第32図、図版5）

調査区の東端に位置し、重複する第2号溝跡に住居中央部の一部を切られている。平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、北東～南西方向が7.70 m、北西～南東方向が7.63 mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で38 cmある。各壁下には、幅20 cm・深さ7 cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、6カ所検出されている。P1～P4は、4本主柱穴と考えられるもので、住居のほぼ対角線上に配置されている。形態は、長さ45 cm～70 cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは26 cm～60 cmある。P6は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居の南側コーナ一部付近に位置する。幅1.55 mの長方形み形態で、床面からの深さは46 cmある。

炉は、住居の中央部に位置する。掘り込みを伴わない床面が焼けただけの地床炉で、良く



第 32 图 第 19 号住居跡

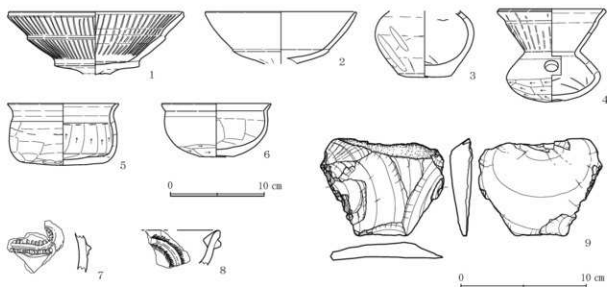
### 第19号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（白色粒子を多量に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）  
 第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）

焼けて不定形に赤色化している。主柱穴P1・P2間にも、床面が小規模に焼けている部分が見られるが、中央部の炉に比べてあまり焼けておらず、副炉的なものと思われる。

出土遺物は、床面上や主柱穴P1内から土器が少数出土しただけである。また、覆土中からは縄文時代中期の勝坂式土器の破片や剥片石器が出土している。本住居跡の床面上には、炭化材が少数見られ、火災にあった焼失住居の可能性が考えられる。火災により床面が焼けて広範囲に赤色化するような大火災ではなかったかもしれないが、出土土器の少なさから、焼失後に炭化材等は土器などととも片付けられた可能性もある。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代中期と考えられる。



第33図 第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡出土遺物観察表

1	有段高坏	A. 口縁部径 18.6, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面丁寧なナデの後放射状暗文。D. 赤色粒、白色粒、E. 暗茶褐色。F. 坏部 1/3, G. 坏部外面黒斑あり。H. 覆土中。
2	高坏	A. 口縁部径 16.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. 坏部 1/3, H. 覆土中。
3	小形甕	A. 底部径 4.8, B. 粘土組織み上げ。C. 胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒。E. 暗茶褐色。F. 胴部 1/2, G. 胴部外面黒斑あり。H. 覆土中。
4	ハソウ	A. 口縁部径 11.6, 器高 9.9, 底部径 1.9, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後外面暗文、胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡黄褐色。F. 完形。G. 胴部焼成前
5	坏	A. 口縁部径 11.8, 器高 6.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ケズリ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 1/2, H. 主柱穴(P1)上面。
6	坏	A. 口縁部径 11.6, 器高 5.6, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下縁ケズリ、内面踏ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗茶褐色。F. 1/4, H. 覆土中。
7	深鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 隆帯の両側に連続爪形文。D. 赤色粒、白色粒。E. 褐色。F. 胴部破片。G. 勝坂式土器。H. 覆土中。
8	深鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 隆帯の両側に連続刺突文。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡赤褐色。F. 口縁部破片。G. 勝坂式土器。H. 覆土中。
9	剥片石器	A. 長さ 7.7, 幅 9.8, 厚さ 1.2, 重さ 105.8g, C. 一部に礫皮を持つ剥片で、腹面側の側縁に一部雑な調整を施す。D. 黒色頁岩。F. 完形。H. 覆土中。

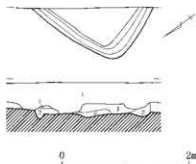
### 第20号住居跡（第34図、図版5）

調査区の東端に位置する。調査区内で検出されたのは、住居跡の西側コーナー部付近だけであるため、遺構の全容は不明である。

平面形は、方形か長方形と思われる。規模は、北東～南西方向は1.60 mまで、北西～南東方向は1.15 mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で15cm程度ある。壁下には、幅20cm前後・深さ5cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、壁際のためかやや軟弱である。

出土遺物は、覆土中から土器片が数片出土しただけである。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代後期と考えられる。



第34図 第20号住居跡

#### 第20号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）  
第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

### 第21号住居跡（第35図、図版5）

調査区の東側に位置し、重複する第31号住居跡を切っている。

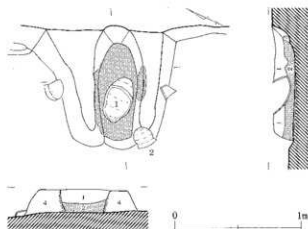
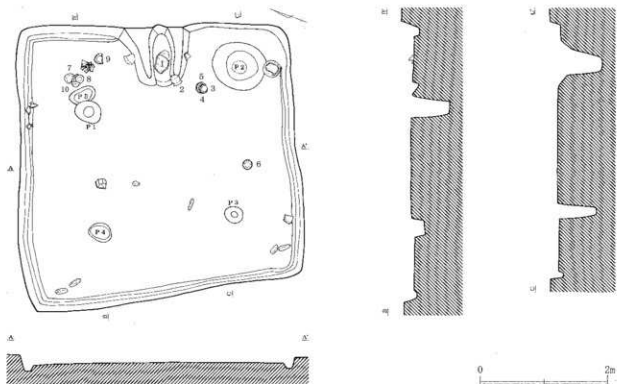
平面形は、住居の南西側壁がやや開いたやや不整の方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.95 m～4.42 m、北西～南東方向が4.47 mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で23cmある。壁溝は、各壁下を巡っているが、カマド右側の住居東側コーナー部付近には見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、5ヶ所検出されている。P1・P3・P4は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、4本主柱穴を構成するものと考えられる。30cm～40cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは20cm～60cmある。P2は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。86cm×74cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは66cmある。

カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長98cm・最大幅114cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。内面は、全体に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面よりも5cm程度低く、ほぼ水平に作られている。支脚は見られない。袖は、ロームブロックと茶褐色粘土ブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。カマド内からは長胴甕が1個体出土しており、その出土状態から本カマドの土器の掛け方は1個掛けであったと思われる。

出土遺物は、カマドや貯蔵穴（P2）の周辺及び壁際周辺部の床面上から、使用時の状態のままに遺棄されたと思われる土器が多く出土している。特にカマド周辺では、カマド右側の床面上に坏蓋型と坏身型の土器器坏が正位で3枚重ねられ、左側の床面上に坏蓋型と坏身型の土器器坏が逆位で4枚重ねられて出土している。土器以外では、住居西側と南側のコーナー部の床面上から、それぞれ長さ20cm程度の棒状の片岩系川原石が2個ずつ出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。





**第21号住居跡カマド土層説明**

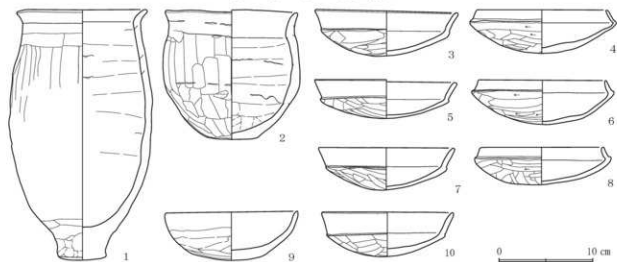
第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第2層：暗褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第35図 第21号住居跡**



**第36図 第21号住居跡出土遺物**

第 21 号住居跡出土土物観察表

1	甕	A. 口縁部径 13.8. 器高 26.4. 底部径 5.1. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 軽石. 細礫. E. 淡褐色. F. 3/4. H. カマド内.
2	鉢	A. 口縁部径 14.0. 器高 13.6. 底部径 5.3. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 雲母. 角閃石. 礫. E. 淡褐色. F. 完形. H. 床面直上.
3	坏	A. 口縁部径 14.8. 器高 5.0. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 雲母. 細礫. E. 淡褐色. F. ほぼ完形. H. 床面直上.
4	坏	A. 口縁部径 13.6. 器高 4.7. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 軽石. 細礫. E. 淡褐色. F. 完形. H. 床面直上.
5	坏	A. 口縁部径 15.0. 器高 4.1. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 細礫. E. 褐色. F. 完形. H. 床面直上.
6	坏	A. 口縁部径 13.5. 器高 4.7. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 雲母. 細礫. E. 淡褐色. F. 完形. H. 床面直上.
7	坏	A. 口縁部径 14.1. 器高 4.5. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 雲母. 細礫. E. 褐色. F. 完形. H. 床面直上.
8	坏	A. 口縁部径 12.8. 器高 4.0. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 雲母. 細礫. E. 淡褐色. F. 完形. H. 床面直上.
9	坏	A. 口縁部径 14.0. 器高 5.2. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面指ナデの後下半ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 雲母. 軽石. 細礫. E. 淡褐色. F. ほぼ完形. H. 床面直上.
10	坏	A. 口縁部径 13.7. 器高 4.7. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 雲母. 角閃石. 細礫. E. 褐色. F. 完形. H. 床面直上.

第 22 号住居跡 (第 37 図、図版 6)

調査区の北側に位置し、重複する第 15 号住居跡に切られ、第 24 号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ方形を呈している。規模は、東西方向が 3.78 m、南北方向が 3.64 m ある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 36cm ある。壁溝は、各壁下を巡っているが、一部途切れている。床面は、ロームブロックを多量含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、P 1～P 4 の 4ヶ所が検出されている。この中の P 1 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド左側の住居南西側コーナー部に位置する。53cm × 45cm の丸みの強い長方形ぎみの形態で、床面からの深さは 55cm ある。

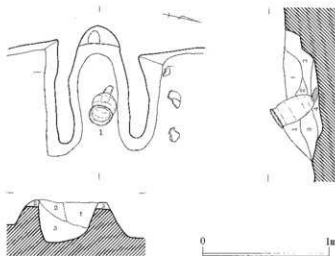
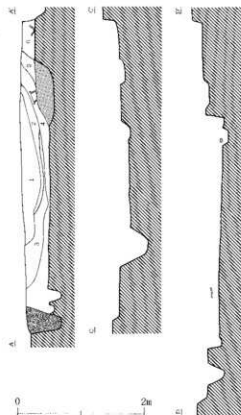
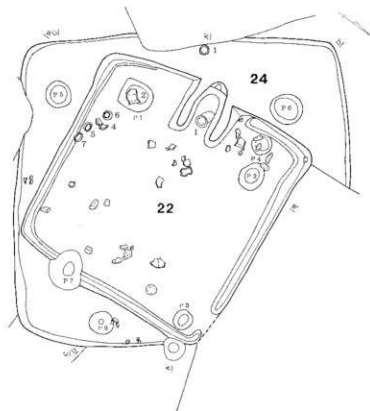
カマドは、住居西側壁のほぼ中央に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長 101cm・最大幅 93cm ある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。燃焼面（火床）は、住居の床面よりも 10cm 程度低く、若干傾斜して作られている。燃焼部中央の若干右側寄りに、長さ 20cm 弱の棒状の片岩系川原石を利用した支脚が 1 個据えられている。袖は、ローム土を主体とする黄褐色土で、地山掘り残しの可能性がある。カマド内からは長胴甕が 1 個出土しており、その出土状態から本カマドの土器の掛け方は 1 個掛けであったと思われる。

出土遺物は、土器と自然石が見られるが、土器は覆土中のものが多く、自然石はカマド右側の西側コーナー部や東側コーナー部の床面上から、棒状の片岩系川原石が複数出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第 22 号住居跡出土土物観察表

1	甕	A. 口縁部径 17.8. 器高 32.3. 底部径 6.2. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 礫. E. 褐色. F. ほぼ完形. H. カマド内.
2	甕	A. 口縁部径 19.8. 残存高 20.3. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 石英. 細礫. E. 淡褐色. F. 口縁部胴部破片. H. 貯蔵穴 (P 1) 上面.
3	甕	A. 残存高 9.2. 底部径 7.3. B. 粘土組織み上げ. C. 胴部内外面ナデ. 底部外面木葉痕. D. 石英. 雲母. 細礫. E. 灰褐色. F. 底部破片. H. 覆土中.
4	坏	A. 口縁部径 15.0. 器高 4.8. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面ナデ. D. 角閃石. 細礫. E. 淡褐色. F. 3/4. H. 覆土中.



#### 第22・24号住居跡土層説明

##### <第22号住居跡>

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第2層：黒褐色土層（炭化粒子・炭化材を多量に含む。粘性、しまりともない。）
- 第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：暗褐色土層（淡褐色粘土粒子を多量に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

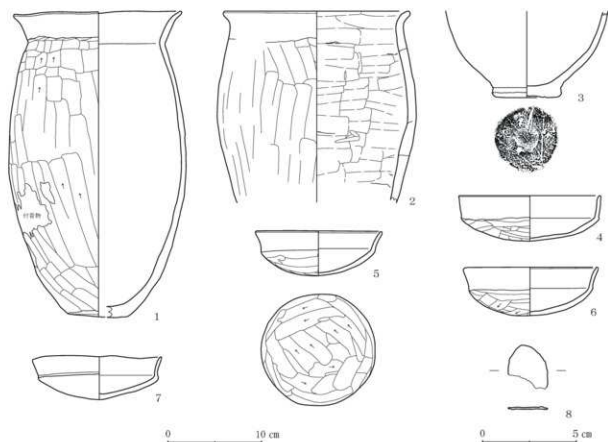
##### <第24号住居跡>

- 第6層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

##### 第22号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）
- 第2層：明茶褐色土層（明茶褐色粘土ブロック。）
- 第3層：暗褐色土層（焼土粒子を多量に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：明茶褐色土層（明茶褐色粘土ブロックを多量含む。粘性なく、しまりを有する。）

第37図 第22・24号住居跡



第 38 図 第 22 号住居跡出土遺物

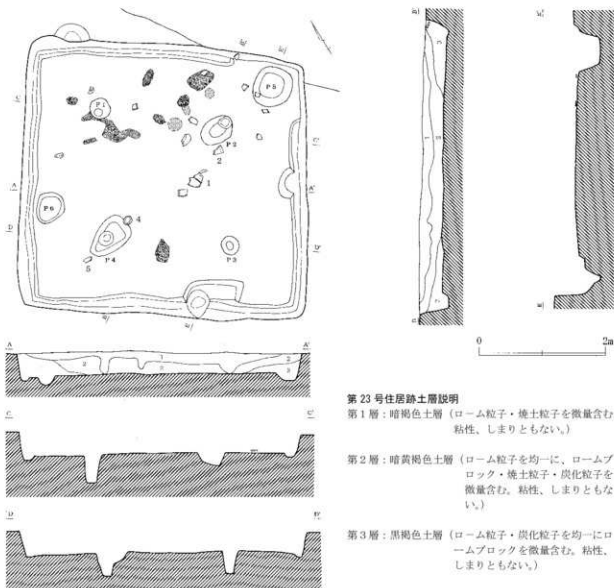
5	坏	A. 口縁部径 13.4、器高 4.8、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母、角閃石。E. 橙色。F. 完形。H. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径 14.2、器高 5.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母、角閃石、礫。E. 橙色。F. 完形。H. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径 13.6、器高 4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母、細礫。E. 橙色。F. 完形。H. 覆土中。
8	鉄製品	A. 長さ 2.3、幅 2.1、厚さ 0.2。F. 破片。H. 覆土中。

### 第 23 号住居跡 (第 39 図、図版 6)

調査区中央部の北側寄りに位置し、重複する第 24 号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、北東～南西方向が 4.24 m、北西～南東方向が 4.60 m である。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 38 cm である。壁溝は、各壁下を巡っているが、東側コーナー部で途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的強く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、6ヶ所検出されている。P 1～P 4 は、住居の対角線上に配置されていることから 4 本主柱穴と考えられる。床面からの深さは、いずれも 40 cm 程度である。P 5 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居南東側コーナー部に位置する。65 cm × 60 cm の円形ぎみの形態で、床面からの深さは 34 cm である。

炉は、住居中央部から北東側に寄った、主柱穴 P 1 と P 2 の間に位置する。床面が焼けただけの地床炉で、直径 20 cm の円形に焼けて赤色化している。



#### 第23号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一にロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）

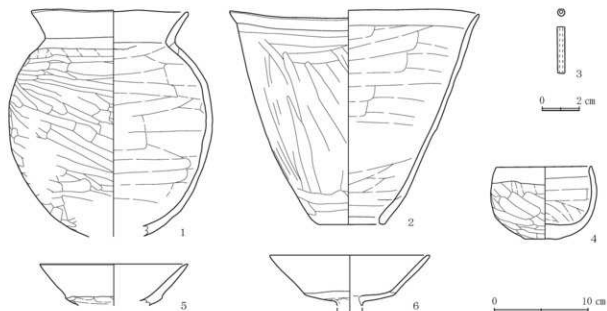
第39図 第23号住居跡

出土遺物は、住居の床面上や覆土中から土器の破片が出土しただけである。本住居跡の床面上には、炭化材が多く見られ、火災にあった焼失住居の可能性が考えられる。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代中期と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径16.6, 残存高23.6, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面箇ナデ, D. 石英、雲母、礫, E. 淡橙色, F. 1/2, H. 床面付近。
2	大形瓶	A. 口縁部径26.4, 器高22.6, 底部径6.8, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面箇ナデ, D. 石英、雲母、細礫, E. 淡橙色, F. 3/4, H. 床面付近。
3	石製管玉	A. 長さ2.46, 直径0.38, 重さ0.66g, C. 表面は丁寧な研磨, D. グリーンタフ, E. オリーブ灰色, F. 完形, H. 床面直上。
4	鉢	A. 口縁部径10.0, 器高7.6, 底部径3.6, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面上半箇ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, D. 雲母、礫, E. 橙色, F. 2/3, H. 床面付近。
5	高坏	A. 口縁部径15.6, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 坏部外面箇ナデ, D. 雲母、礫, E. 明赤褐色, F. 坏部1/2, H. 覆土中。
6	高坏	A. 口縁部径17.0, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 坏部外面箇ナデ, D. 石英、雲母、礫, E. 明赤褐色, F. 坏部のみ, H. 覆土中。



第40図 第23号住居跡出土遺物

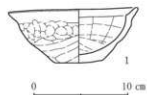
第24号住居跡（第37図、図版6）

調査区中央部の北側寄りに位置し、住居跡の大半を重複する第15・22・23号住居跡と第1号土坑に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ比較的整った方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.94 m、北西～南東方向が5.30 mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で25 cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、P5～P8の4ヶ所が検出されているが、その性格は不明である。

出土遺物は、住居南西側壁際の床面上から、No 1完形の坏が1個体出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器から、古墳時代中期と考えられる。



第41図 第24号住居跡出土遺物

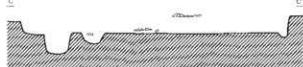
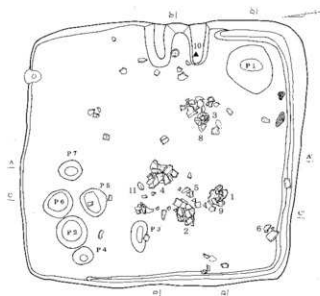
第24号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口縁部径13.7、器高5.7、底部径5.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。体部外面指押えの後下半径ナゲ、内面径ナゲ。D. 石英、結晶片岩、軽石、礫。E. 淡褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
---	---	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------

第25号住居跡（第42図、図版6）

調査区の北東側に位置し、重複する第31号住居跡を切っている。また、住居の南西側コーナー付近は、第14号住居跡と接している。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ方形を呈している。規模は、東西方向が4.06 m、南北方向が4.30 mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で28 cmある。壁溝は、東西両壁下の南側と南側壁下を巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く縮まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、7ヶ所検出されている。この中のP1は、いわ



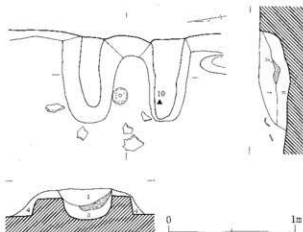
#### 第25号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量に、焼土ブロック・ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）



#### 第25号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第2層：暗赤褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第4層：明茶褐色土層（明茶褐色粘土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第42図 第25号住居跡

ゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。75cm × 70cm の楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは50cmある。

カマドは、住居東側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。燃烧部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。燃烧面（火床）は、住居の床面とほぼ



第 43 図 第 25 号住居跡出土遺物



同じ高さで若干傾斜して作られている。燃焼部中央のやや左寄りの位置には、高坏の坏部が伏せた状態で出土しており、おそらく転用支脚として利用されていたものと考えられる。その支脚の位置からすると、本カマドの土器の据え方は、2個並置式であったと思われる。袖は、地山掘り残しの可能性があるローム土を主体とする黄褐色土を基部の芯にして、その上に明茶褐色粘土を盛り上げて構築している。右側の袖盛土（第4層）内からは、No10の小形の手捏土器が1個体出土している。

出土遺物は、住居の覆土中から、比較的多くの土器が破片になって出土している。特に中央部の覆土中にまとまって出土した土器は、住居廃絶後の覆土埋没過程で、周辺から一括投棄されたものと思われる。土器以外では、覆土中から時期不明の羽口の破片（図版21 No13）や砥石（図版21 No14）、縄文時代の片加工石器（No12）などが出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

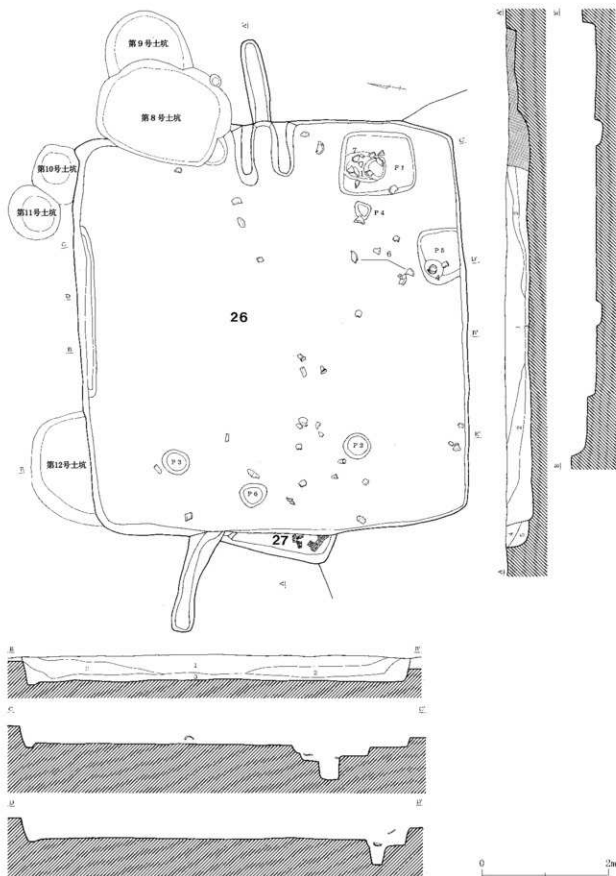
第25号住居跡出土土物観察表

1	甕	A. 口縁部径17.5, 器高32.6, 底部径7.6, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 雲母, 軽石, 細礫, E. 橙色, F. 3/4, H. 覆土中。
2	甕	A. 口縁部径18.2, 残存高30.3, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 淡橙色, F. 3/4, H. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径13.1, 器高21.3, 底部径7.2, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 淡橙色, F. ほぼ完形, H. 覆土中。
4	甕	A. 口縁部径21.2, 残存高27.3, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 淡橙色, F. 1/2, H. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径13.2, 器高4.9, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 雲母, 細礫, E. 淡黄褐色, F. 1/2, G. 内面油塗付着, H. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径14.0, 器高4.8, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 角閃石, 細礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 床面直上。
7	坏	A. 口縁部径14.3, 器高5.0, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 赤褐色, F. 1/2, H. 覆土中。
8	坏	A. 口縁部径14.4, 器高5.4, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 明褐色, F. ほぼ完形, H. 覆土中。
9	小形甕	A. 口縁部径8.4, 器高8.1, 底部径3.7, B. 粘土細積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鏡ナデ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 黄褐色, F. 2/3, H. 覆土中。
10	手捏土器	A. 口縁部径3.0, 器高2.2, B. 手捏ね, C. 外面指押え, 内面ナデ, D. 細礫, E. 赤褐色, F. ほぼ完形, H. カマド袖内。
11	須恵器 壺	A. 残存高6.4, B. ロクロ成形, C. 口頸部内外面回転ナデの後, 頸部外面に柳掻波状文を施す, D. 砂粒, E. 灰色, F. 口頸部破片, H. 覆土中。
12	片加工 石器	A. 長さ11.4, 幅5.8, 厚さ3.65, 重さ256.8g, C. 礫皮をもつ剥片を素材に, 腹面側を主体に周縁に加工を施す, D. 頁岩, F. 完形, H. 覆土中。
13	羽口 (図版21)	A. 残存長12.3, 残存幅10.5, B. 手捏ね, C. 表面ナデ, D. 雲母, 細礫, E. にぶい橙色, F. 破片, H. 覆土中。
14	柱状砥石 (図版21)	A. 長さ5.1, 幅4.0, 厚さ2.3, 重さ55g, B. 削り出し, C. 各面ともよく磨れている, D. 砂岩, F. 一部欠損, H. 覆土中。

## 第26号住居跡（第44図、図版6）

調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第27・28号住居跡と第8・10・12・13号土坑を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ比較的整った長方形を呈している。規模は、東西方向が6.52m、南北方向が6.20mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で41cmある。壁溝は、住居北側壁の中央付近に、一部見られるだけである。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、6ヶ所検出されている。この中のP1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー



第44图 第26·27号住居跡

第26・27号住居跡土層説明

<第26号住居跡>

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

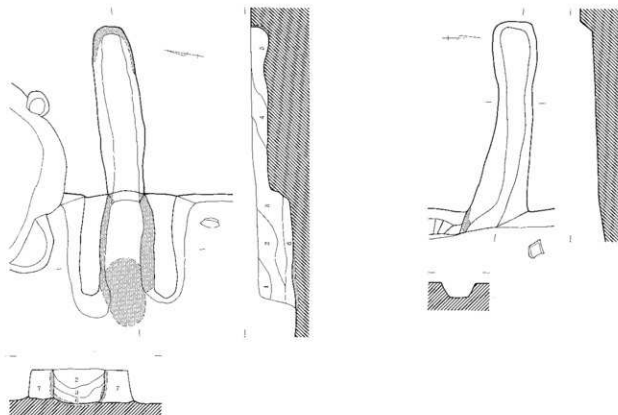
第2層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

<第27号住居跡>

第4層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

第5層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）



第45図 第26・27号住居跡カマド

第26号住居跡カマド土層説明

第1層：淡褐色土層（淡褐色粘土ブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：淡褐色土層（淡褐色粘土粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第5層：褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第6層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）

第7層：淡褐色粘土層（淡褐色粘土を主体とする。粘性に富み、しまりを有する。）

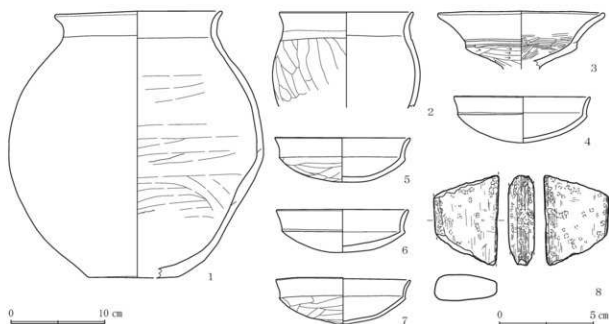
部に位置する。上半部は118cm×100cmの隅丸長方形の形態で、下半は直径35cmのビット状に2段に深くなっている。床面からの深さは53cmある。P2～P4は、いずれも浅いものであるが、住居の対角線上に概ね配置されていることから、4本主柱穴を構成するビットの可能性はある。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁に対して直角に付設されている。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。内面は、全体的に良く焼けている。燃焼面（火床）は、住居の床面と同じ高さで水平に作られている。袖は、淡い褐色粘土

を住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、燃焼面から15cm程度段を持って立ち上がり、住居の壁外に130cmほど水平に延びて立ち上がっている。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が多く出土しているが、本住居跡に明確に伴うものは、貯蔵穴（P1）内やその周辺の床面上から出土した、少量の土器だけである。土器以外では、覆土中から自然石を利用した砥石の破片（No 8）が1点出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第46図 第26号住居跡出土遺物

第26号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径17.や、器高28.1、底部径9.5、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面観察不能、内面笠ナデ。D. 石英、結晶片岩、礫。E. 橙色。F. 1/4、H. 貯蔵穴（P1）上面。
2	小形甕	A. 口縁部径14.0、残存高10.3、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 雲母、礫。E. 明赤褐色。F. 破片。H. 覆土中。
3	高坏	A. 口縁部径17.7、残存高6.2、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリ、内面ミガキ。D. 石英、結晶片岩、礫。E. 淡橙色。F. 坏部破片。H. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径14.3、器高4.9、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 雲母、細礫。E. 橙色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
5	坏	A. 口縁部径14.3、器高4.7、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 石英、雲母、細礫。E. 橙色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径14.0、器高4.5、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 雲母、チャート、角閃石、礫。E. 明褐色。F. 3/4、H. 貯蔵穴（P1）上面。
7	坏	A. 口縁部径14.2、器高4.9、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 雲母、細礫。E. 橙色。F. 3/4、H. 覆土中。
8	砥石	A. 残存長4.7、幅3.4、厚さ1.4、重さ22.4g。B. 自然石を利用。C. 表裏面は良く磨かれている。D. 砂岩。F. 両端欠損。H. 覆土中。

第27号住居跡（第44図、図版6）

調査区中央部の東側寄りに位置する。住居跡の大半を重複する第26号住居跡に切られ、第28号住居跡を切っている。残存しているのは、カマド煙道部と住居西側壁の一部だけで

あるため、遺構の全容は不明である。

カマドは、住居西側壁に付設されている。残存しているのは煙道部だけであるため、カマドの形態は不明である。煙道部は、住居の壁外に160cmほど水平に延びて立ち上がっている。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。住居南西側コーナ一部分の床面上からは、複数の炭化材が検出されており、本住居跡は火災によって焼失した可能性も考えられる。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器から、古墳時代後期と考えられる。

## 第28号住居跡（第47図、図版7）

調査区中央部の東端に位置し、重複する第26・27号住居跡に切られ、第6・7号土坑を切っている第13号土坑を切っている。住居跡の南東側は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、北東～南西方向が7.73m、北西～南東方向は7.15mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

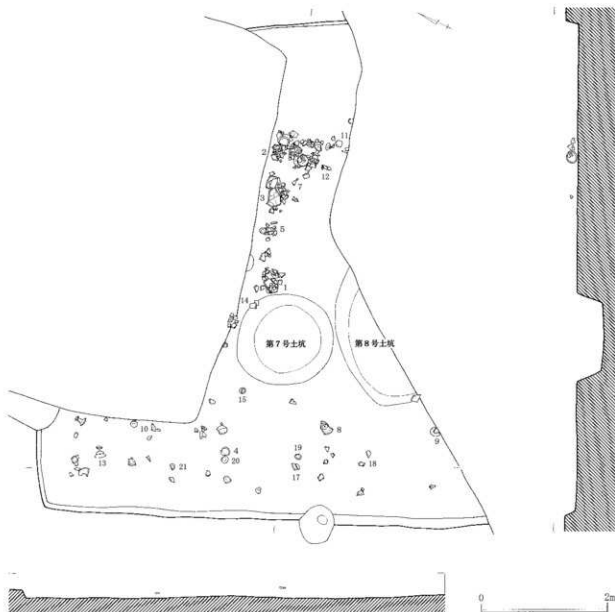
住居の中央部付近に、床面の一部が焼けて赤色化した部が見られるが、その大半を第26号住居跡に切られているため、炉として機能していたものかどうかは不明である。

出土遺物は、住居中央部から南西側壁際の周辺部にかけて、土器の破片が多く出土している。これらの土器の中で、住居中央部のものは出土層位が床面に近く、土器の原形を留めて破片になっているものが多いことから、住居廃絶時に比較的近い時期のものと考えられるが、南西側壁際の周辺部の多くの土器片は、出土層位が覆土中に近く、破片になって散乱したような出土状態のため、住居廃絶後の覆土中に周辺から投棄されたものと思われる。この他には、覆土中から土製の玉(No16)1点と、縄文時代中期の加曾利E3式土器の破片(No22)が出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代中期と考えられる。

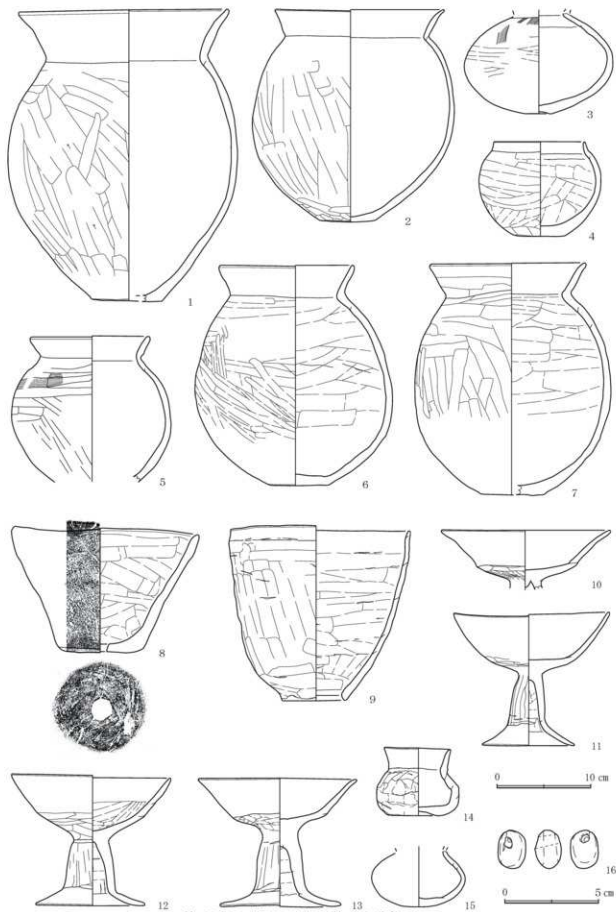
第28号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径22.2、器高30.9、底部径7.4、B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、礫。E. 淡褐色。F. 3/4、H. 床面直上。
2	甕	A. 口縁部径17.8、器高22.4、底部径6.0、B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 雲母、礫。E. 淡褐色。F. 1/2、H. 床面付近。
3	中形直口甕	A. 残存高10.5、底部径2.6、B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下平ケズリ、内面ナデ。D. 雲母、細礫。E. 明赤褐色。F. 2/3、H. 床面付近。
4	小形甕	A. 口縁部径9.6、器高10.0、底部径5.2、B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面笠ナデ。底部外面ケズリ。D. 雲母、細礫。E. 明赤褐色。F. 3/4、H. 床面直上。
5	甕	A. 口縁部径12.7、残存高15.5、B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母、細礫。E. 淡黄褐色。F. 口縁部から胴部破片。H. 床面直上。
6	甕	A. 口縁部径14.2、器高23.4、底部径6.3、B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 雲母、礫。E. 淡褐色。F. 3/4、H. 床面付近。
7	甕	A. 口縁部径16.5、器高24.5、底部径6.6、B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 石英、雲母、礫。E. 淡黄褐色。F. 2/3、H. 床面付近。
8	小形甕	A. 口縁部径20.0、器高13.4、底部径9.0、B. 粘土紐積み上げ。C. 体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 石英、雲母、礫。E. 淡褐色。F. 2/3、H. 覆土中。
9	甕	A. 口縁部径18.9、器高18.5、底部径6.7、B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面笠ナデ。D. 雲母、細礫。E. 褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。

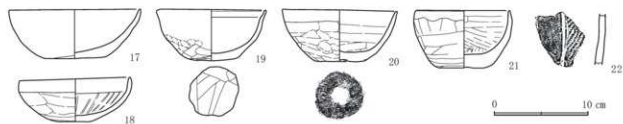


第47図 第28号住居跡

10	高坪	A. 口縁部径17.9, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 坏部外面鑑ナデ, D. 雲母, 細磯, E. 淡赤褐色, F. 坏部2/3, H. 覆土中。
11	高坪	A. 口縁部径16.4, 器高14.2, 脚端部径9.7, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 坏部外面ケズリ, 脚柱部外面鑑ナデ, 脚端部内外面ヨコナデ, D. 石英, 雲母, 細磯, E. 橙色, F. 3/4, H. 床面直上。
12	高坪	A. 口縁部径16.6, 器高13.9, 脚端部径11.8, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 坏部外面ケズリ, 脚柱部外面鑑ナデ, 脚端部内外面ヨコナデ, D. 雲母, 細磯, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 床面付近。
13	高坪	A. 口縁部径16.8, 器高13.6, 脚端部径12.7, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 坏部外面鑑ナデ, 脚柱部外面鑑ナデ, 脚端部内外面ヨコナデ, D. 石英, 雲母, 細磯, E. 淡赤褐色, F. ほぼ完形, H. 床面直上。
14	小形直口壺	A. 口縁部径7.0, 器高7.1, 底部径5.6, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部内外面鑑ナデ, 底部外面ケズリ, D. 石英, 雲母, 細磯, E. 淡褐色, F. 完形, H. 床面付近。
15	小形直口壺	A. 残存高5.9, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, D. 雲母, 細磯, E. 淡褐色, F. 2/3, H. 床面付近。
16	土玉	A. 長さ2.0, 幅1.5, 厚さ1.45, 重さ4.47g, B. 手裡ね, C. ナデ, D. 砂粒, E. 明褐色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, H. 床面直上。
17	坏	A. 口縁部径13.8, 器高5.2, 底部径6.5, B. 粘土紐積み上げ, C. 体部内外面ナデ, D. 石英, 雲母, 磯, E. 淡褐色, F. 2/3, H. 覆土中。



第48图 第28号住居跡出土遺物(1)



第49図 第28号住居跡出土遺物(2)

18	坏	A. 口縁部径11.6, 器高4.7, 底部径3.3, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面隠ナデ, 内面ナデの後放射状暗文, 底部外面ケズリ, D. 石英, 雲母, 細織, E. 淡赤褐色, F. 3/4, H. 覆土中。
19	坏	A. 口縁部径11.7, 器高5.4, 底部径5.0, B. 粘土粗積み上げ, C. 体部外面ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, 底部外面ケズリ, D. 石英, 雲母, 細織, E. 淡褐色, F. 1/2, H. 覆土中。
20	坏	A. 口縁部径12.2, 器高6.5, 底部径5.2, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部内外面隠ナデ, 内面ナデ, D. 雲母, 細織, E. 褐色, F. 3/4, H. 床面付近。
21	坏	A. 口縁部径9.8, 器高6.1, 底部径4.6, B. 粘土粗積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部内外面隠ナデ, 内面ナデ, D. 石英, 雲母, 細織, E. 褐色, F. 2/3, H. 床面付近。
22	深鉢	B. 粘土粗積み上げ, C. 沈線により無文部と施文部を区画, 無文部ミガキ, 施文部RL縦転がし, D. 石英, 角閃石, 細織, E. 明褐色, F. 刷部破片, G. 加曾利EⅢ式土器, H. 覆土中。

### 第29号住居跡(第50図、図版7)

調査区中央部の南側寄りに位置する。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

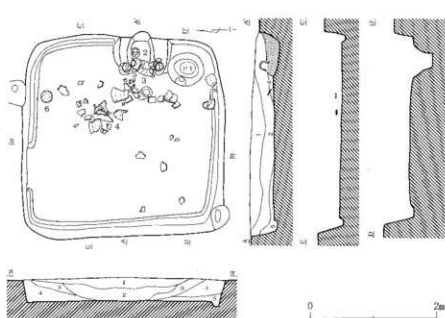
平面形は、コーナー部の丸みが強い比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が3.22m、南北方向が3.25mある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で39cmである。壁溝は、各壁下に見られるが、カマド右側の住居南東側コーナー部と、北側壁の中央付近で一部途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、1ヶ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。形態は、59cm×52cmの楕円形を呈し、床面からの深さは30cmある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りの位置に、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長70cm・最大幅93cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。内面は、全体に良く焼けて赤色化している。燃焼面(火床)は、住居の床面より5cm程度低く、煙道部に向かって緩やかに傾斜させている。燃焼面の中央付近には、甕の下半を伏せた支脚が据えられている。この甕の下半を転用した支脚には、その南側にさらに甕の下半を半分にした土器破片を貼り付け補強している。この支脚の燃焼部内での位置が、中央より左側に寄っていることから、本カマドの土器の掛け方が2個並置式であったことが分かる。袖は、淡褐色粘土を主体とする暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。両袖の先端部には、長胴甕を床面上に伏せ、その上に長胴甕と小形甕を入れ子状に連結させたものを掛けて、カマド焚口部の補強にしていたようである。

出土遺物は、住居中央部からカマドや貯蔵穴(P1)周辺の床面付近から、多くの土器が破片になって散乱したような状態で出土している。これらは、煮沸具の甕が主体で、坏類等の供膳器がほとんど見られないのが、本住居跡出土土器の特徴である。土器以外では、覆土中から土玉(No 9)が1点出土している。

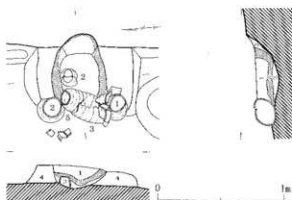
本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。





#### 第29号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第4層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



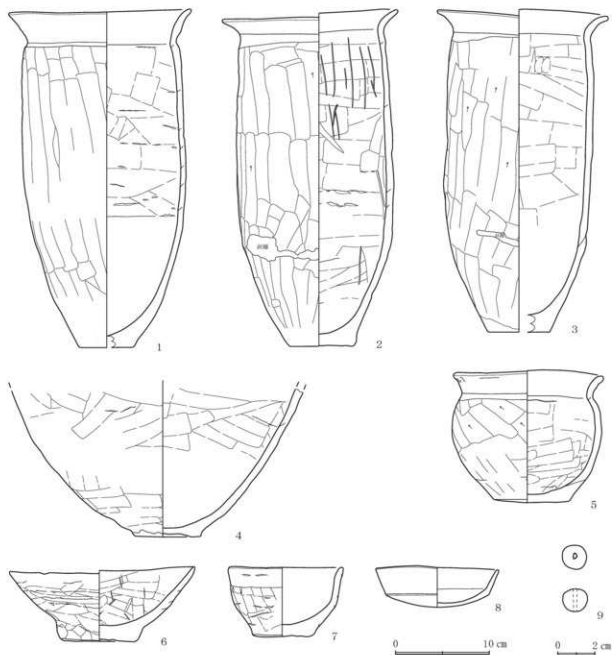
#### 第29号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）
- 第3層：黒褐色土層（炭化粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：暗褐色土層（淡褐色粘土を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第50図 第29号住居跡

#### 第29号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径19.3、器高36.1、底部径5.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箇ナデ。D. 石英、結晶片岩、礫。E. 橙色。F. 2/3。H. カマド袖先端部補強。
2	甕	A. 口縁部径18.6、器高35.6、底部径6.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箇ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、礫。E. 淡橙色。F. ほぼ完形。H. カマド袖先端部補強。
3	甕	A. 口縁部径18.0、器高34.1、底部径6.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箇ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、礫。E. 橙色。F. 4/5。H. カマド焚口天井部補強。
4	甕	A. 残存高16.0、底部径7.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部内外面箇ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、礫。E. 橙色。F. 胴部下半のみ。H. 床面付近。
5	小形甕	A. 口縁部径15.9、器高14.0、底部径7.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 石英、雲母、結晶片岩、礫。E. 淡褐色。F. 4/5。H. カマド焚口天井部補強。
6	大形鉢	A. 口縁部径19.6、器高8.0、底部径8.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 体部外面箇ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、軽石。E. 明褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
7	鉢	A. 口縁部径12.2、器高7.4、底部径6.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面箇ナデ、内面観察不能。D. 石英、結晶片岩、礫。E. 淡橙色。F. 1/2。H. 覆土中。
8	坪	A. 口縁部径13.0、器高4.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 礫。E. 橙色。F. 1/2。H. 覆土中。
9	土玉	A. 幅1.29、高さ1.19、重さ2.07g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 砂粒。E. 明赤褐色。F. 完形。G. 穿孔は焼成前。H. 床面直上。



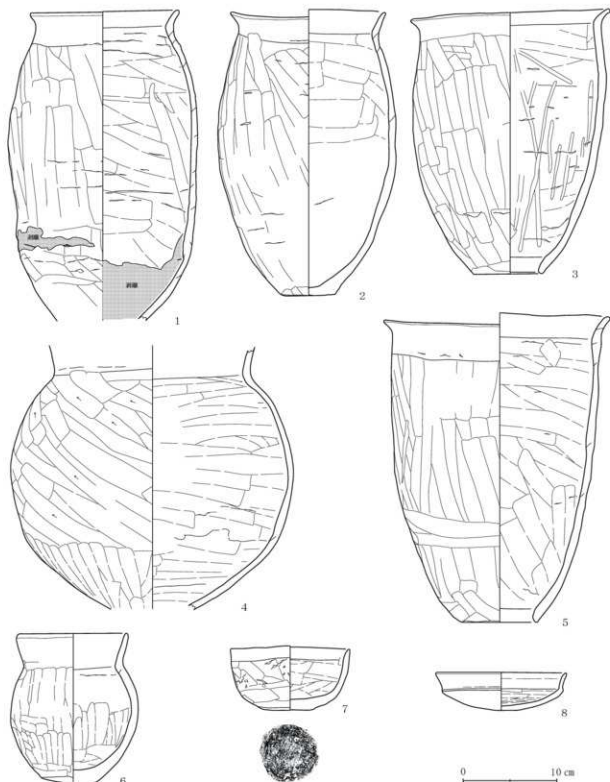
第51図 第29号住居跡出土遺物

### 第30号住居跡（第53図、図版7）

調査区の北東端に位置し、重複する第31号住居跡を切っている。住居跡の北側は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ方形か長方形を呈しているものと思われる。規模は、北西から南東方向が5.41 m、南西～北東方向は1.73 mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で50cmある。壁溝は、東側コーナー部以外は、検出された各壁下を巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、P1とP2の2ヶ所が検出されている。P1は、その位置から4本支柱穴を構成するピットの可能性が考えられる。形態は、40

cm × 20cm の楕円形を呈し、床面からの深さは 50cm 程度ある。P 2 は、おそらく貯蔵穴と呼ばれているもので、住居の南側コーナー部に位置している。上半は、90cm × 85cm の方形ぎみの形態で、北東端が直径 70cm の円形を呈するピット状になって 2 段に深くなっている。床面からの深さは、54cm ある。



第 52 図 第 30 号住居跡出土遺物

カマドは、調査区内では検出されていないが、貯蔵穴（P2）が住居南側コーナー部にあることから、おそらく調査区外の住居南東側壁に付設されているものと思われる。

出土遺物は、貯蔵穴（P2）内やその周辺の床面上から、完形に近い土器が多く出土している。住居西側コーナー部付近から出土した土器は、出土層位が覆土中であることから、住居廃絶後の覆土埋没過程で周辺から投棄されたものであろう。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第30号住居跡出土土物観察表

1	甕	A. 口縁部径15.7, 残存高32.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ, D. 結晶片岩, 礫, E. 淡褐色, F. 底部欠損, H. 床面付近。
2	甕	A. 口縁部径16.4, 器高30.2, 底部径5.7, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 淡褐色, F. 4/5, H. 床面直上。
3	大形甕	A. 口縁部径21.0, 器高28.6, 底部径7.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 淡褐色, F. 4/5, H. 床面直上。
4	甕	A. 残存高26.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリの後下半部ナゲ, 内面鑑ナゲ, D. 石英, 結晶片岩, 軽石, 礫, E. 淡褐色, F. 胴部のみ, H. 覆土中。
5	大形甕	A. 口縁部径23.8, 器高32.7, 底部径8.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 褐色, F. ほぼ完形, H. 床面付近。
6	小形甕	A. 口縁部径11.8, 器高15.8, 底部径5.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ナゲ, 胴部外面鑑ナゲ, 内面指ナゲ, D. 結晶片岩, 礫, E. 淡褐色, F. 4/5, H. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径12.6, 器高6.8, 底部径5.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体胴外面ケズリ, 内面鑑ナゲ, 底部外面ケズリ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 淡黄褐色, F. 完形, H. 床面直上。
8	坏	A. 口縁部径13.8, 器高4.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 褐色, F. 完形, H. 床面付近。

### 第31号住居跡（第53図、図版7）

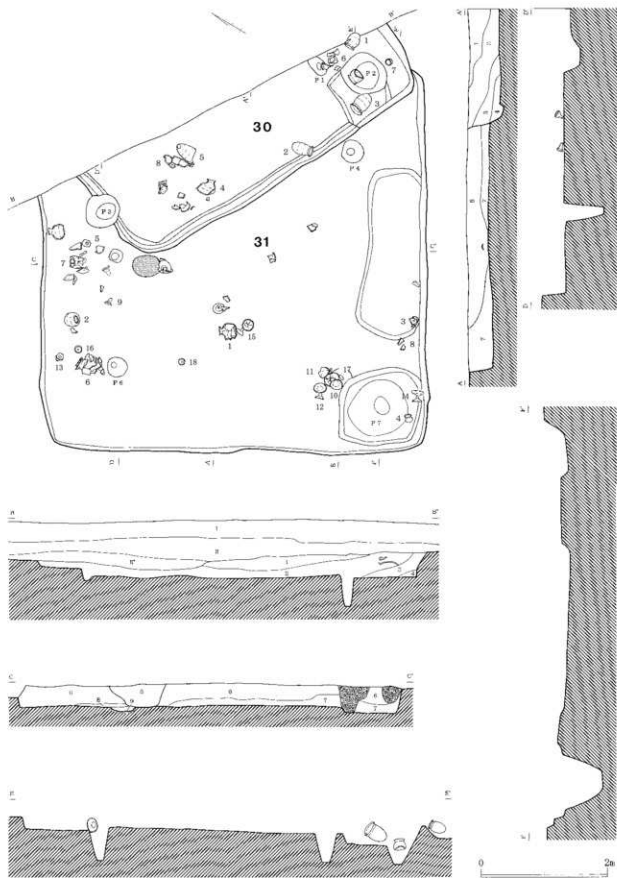
調査区の北東端に位置し、住居跡の北東側を第30号住居跡に、西側コーナー部を第25号住居跡に、南側コーナー部を第21号住居跡に切られている。

平面形は、比較的整った方形を呈している。規模は、北西～南東方向が6.24m、北東～南西方向が6.10mある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で40cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、P4～P7の4ヶ所が検出されている。P4～P6は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、4本主柱穴と考えられる。形態は、直径35cm前後の円形を呈し、床面からの深さは46cm～63cmある。P7は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居の南側コーナー部に位置している。形態は、上面が130cm×120cmの方形ぎみで、中心が95cm×90cmの円形の土坑状に2段に深くなっている。床面からの深さは、80cmある。

炉は、住居中央部から北西側に寄った位置にある。住居の床面を42cm×34cmの楕円形形状に5cm程度掘り窪めた地皿炉で、比較的良く焼けて赤色化している。

出土遺物は、住居中央部や壁際の床面上から、比較的多くの完形に近い土器が出土している。これらの土器は、その出土状態から見て、本住居で使用していたものを住居の廃絶に伴ってそのまま遺棄したと考えられる。特に本住居跡では、高坏が多く出土しているのが特徴的である。また、炉の南東側の覆土中からは、被熱痕のある大きな自然石の上に、中世の片口鉢の大形破片が被さった状態で出土しているが、これは土層観察の結果からも、住居覆土中に掘り込まれた中世の土坑状の落ち込み（第5層）に伴うものである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代中期と考えられる。



第 53 图 第 30・31 号住居跡

第30・31号住居跡土層説明

<第30号住居跡>

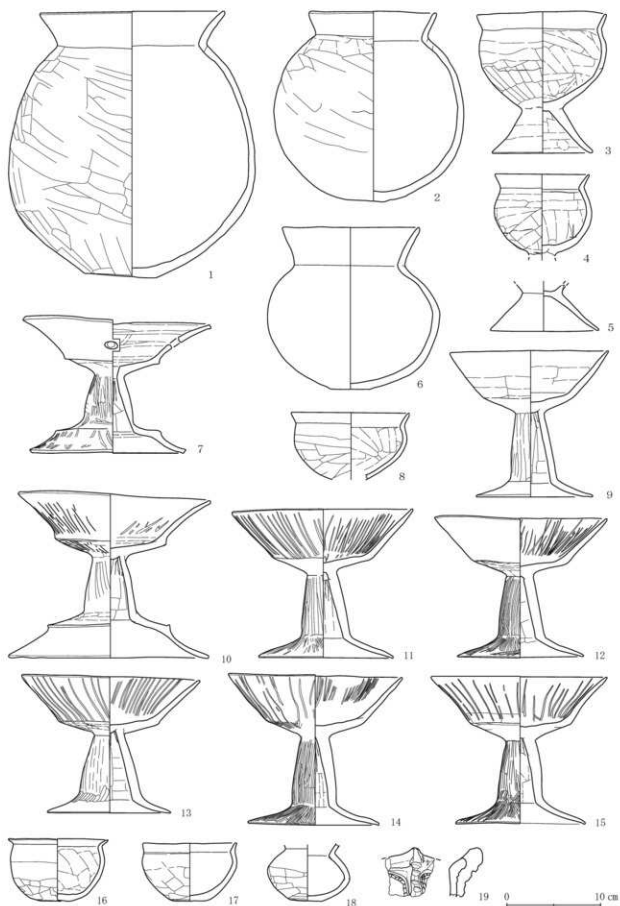
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第3層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第4層：淡褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）

<第31号住居跡>

- 第5層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第8層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第9層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

第31号住居跡出土遺物観察表

1	燧	A. 口縁部径19.4、器高28.3、底部径7.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、結晶片岩、礫。E. 淡褐色。F. 2/3。H. 床面直上。
2	燧	A. 口縁部径13.5、器高20.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半分皿ナデ、内面皿ナデ。D. 石英、礫。E. 灰黄褐色。F. 5/6。H. 床面直上。
3	台付鉢	A. 口縁部径13.7、器高15.0、台端部径10.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半分ナデ、内面ナデ。D. 石英、軽石、細礫。E. 淡褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
4	台付鉢	A. 口縁部径10.0、残存8.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ、内面ナデ。D. 雲母、細礫。E. 明褐色。F. 台部欠損。H. 貯蔵穴（P7）上面。
5	台付鉢	A. 台端部径11.5。B. 粘土組織み上げ。C. 台部外面ミガキ、内面皿ナデ。D. 雲母、細礫。E. 褐色。F. 台部のみ。H. 床面直上。
6	燧	A. 口縁部径14.4、器高17.0、底部径4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 内外面とも観察不能。D. 石英、結晶片岩、礫。E. 淡褐色。F. 4/5。H. 床面直上。
7	高杯形器台	A. 口縁部径20.0、器高14.5、台端部径16.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坯部内外面皿ナデ。脚柱部外面ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、細礫。E. 明赤褐色。F. 4/5。G. 口縁部に焼成前穿孔4ヵ所。脚部外面に暗文を施す。H. 床面付近。
8	鉢	A. 口縁部径12.5、残存高7.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 雲母、細礫。E. 赤褐色。F. 2/3。H. 覆土中。
9	高杯	A. 口縁部径16.8、器高15.5、脚端部径12.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坯部外面皿ナデ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、細礫。E. 明褐色。F. 3/4。H. 床面付近。
10	有段高杯	A. 口縁部径20.4、器高17.5、脚端部径21.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚柱部外面ミガキ、内面ケズリ、脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、細礫。E. 明赤褐色。F. ほぼ完形。G. 暗文を施す。H. 床面直上。
11	高杯	A. 口縁部径19.1、器高15.8、脚端部径14.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坯部外面皿ナデ。脚部外面ミガキ、内面皿ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、細礫。E. 褐色。G. 口縁部内外面と脚部外面に暗文を施す。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
12	高杯	A. 口縁部径18.2、器高15.0、脚端部径13.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坯部外面皿ナデ。脚部外面ミガキ、内面皿ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、細礫。E. 褐色。G. 口縁部内外面と脚部外面に暗文を施す。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
13	高杯	A. 口縁部径18.8、器高14.1、脚端部径13.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坯部外面皿ナデ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、細礫。E. 明赤褐色。G. 口縁部内外面に暗文を施す。F. 2/3。H. 床面付近。
14	高杯	A. 口縁部径18.3、器高16.0、脚端部径14.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坯部外面皿ナデ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、細礫。E. 明赤褐色。G. 口縁部内外面と脚部外面に暗文を施す。F. ほぼ完形。H. 貯蔵穴（P7）上面。
15	高杯	A. 口縁部径18.6、器高15.6、脚端部径13.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坯部外面皿ナデ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、細礫。E. 褐色。G. 口縁部内外面と脚部外面に暗文を施す。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
16	杯	A. 口縁部径10.5、器高6.6、底部径3.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 雲母、チャート、礫。E. 淡褐色。F. 完形。H. 床面直上。
17	杯	A. 口縁部径9.9、器高6.1、底部径3.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 雲母、細礫。E. 明褐色。F. 1/2。H. 床面直上。
18	小形直口甕	A. 残存高6.0、底部径3.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 石英、雲母、細礫。E. 赤褐色。F. 胴部のみ。H. 床面直上。
19	深鉢	B. 粘土組織み上げ。C. キザミを施す隆帯区画の両側に押引文。D. 細礫。E. 淡黄褐色。F. 口縁部破片。G. 阿玉台式土器。H. 覆土中。



第 54 图 第 31 号住居跡出土遺物

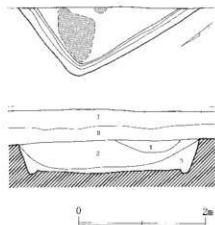
### 第32号住居跡（第55図、図版7）

調査区南側の東端に位置する。調査区内で検出されたのは、住居の北西側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向は2.10 mまで、東西方向は1.60 mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で45cmある。調査区内で検出された各壁下には、幅15cm・深さ5cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、壁際の周辺部のためかやや軟弱である。

出土遺物は、床面付近よりNo 1の甕とNo 2の坏が出土している。本住居跡の床面上には、多量の焼土ブロックの分布が見られることから、火災による焼失住居の可能性もある。

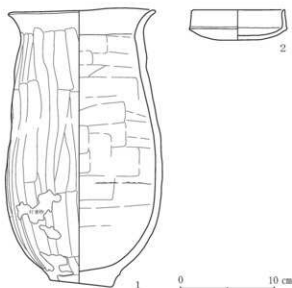
本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代後期と考えられる。



第55図 第32号住居跡

#### 第32号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第56図 第32号住居跡出土遺物

#### 第32号住居跡出土遺物観察表

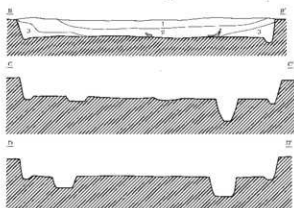
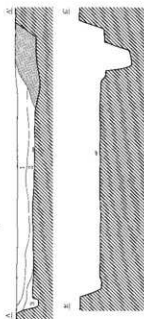
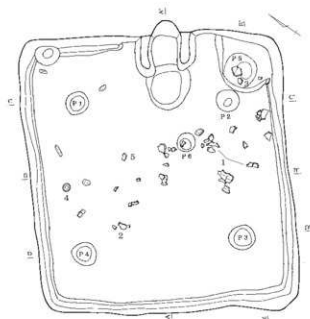
番号	遺物	説明
1	甕	A. 口縁部径15.5、器高29.3、底部径6.5。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面踏ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、礫。E. 褐色。F. 完形。H. 床面付近。
2	坏	A. 口縁部径9.9、器高3.2。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面踏ナデ。D. 雲母、細礫。E. 褐色。F. 1/2。H. 覆土中。

### 第33号住居跡（第57図、図版8）

調査区南側の西端に位置し、重複する第35号住居跡を切っている。

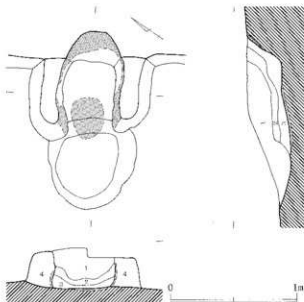
平面形は、コーナー部が丸みを持つ、若干並行四辺形状に歪んだ方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.34 m、北西～南東方向が4.14 mある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で30cmある。壁溝は、各壁下を巡っているが、カマド右側の住居東側コーナー部付近には見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に堅く縮まっている。ビットは、5ヶ所検出され





#### 第33号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富みしまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第3層：黒灰色土層（焼土粒子・ロームブロックを微量含む。粘性、しまりもない。）



#### 第33号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黒褐色土層（淡灰色砂を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりもない。）
- 第2層：淡灰褐色土層（淡灰色砂を多量に、焼土ブロックを微量含む。粘性、しまりもない。）
- 第3層：暗褐色土層（焼土粒子を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性、しまりもない。）
- 第4層：淡灰褐色土層（淡灰色砂を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

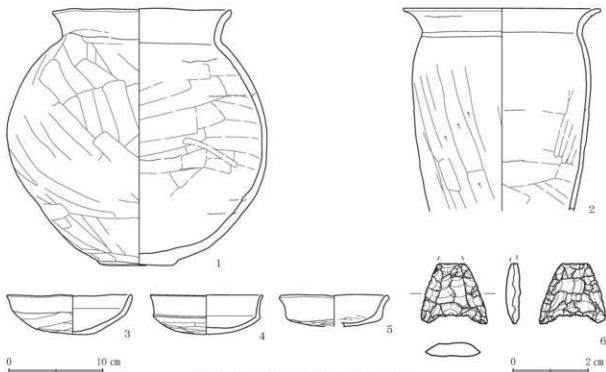
第57図 第33号住居跡

ている。P1～P4は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、4本支柱穴を構成するものと考えられる。いずれも直径40cm前後の円形ぎみの形態で、床面からの深さは10cm～32cmある。P5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。上半は80cm×80cmの丸みの強い方形ぎみの形態で、下半は直径50cm程度の円形状に深くなっている。床面からの深さは48cmある。

カマドは、住居北東側壁のほぼ中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長138cm・最大幅95cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁とほぼ一致している。内面は、比較的良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、焚口部を皿状に10cm程度掘り窪め、奥壁は、傾斜して煙道部に向かっている。袖は、淡灰褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。

出土遺物は、住居中央部の床面付近から、土器が多く破片になって出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第58図 第33号住居跡出土遺物

第33号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径18.9、器高27.2、底部径8.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面艶ナデ。D. 石英、雲母、礫。E. 橙色。F. 3/4。H. 床面直上。
2	甕	A. 口縁部径21.0、残存高21.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面艶ナデ。D. 石英、結晶片岩、礫。E. 橙色。F. 口縁部～胴部破片。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径13.2、器高4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面艶ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、細礫。E. 橙色。F. 4/5。H. 貯蔵穴（P5）上。
4	坏	A. 口縁部径11.8、器高4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母、細礫。E. 橙色。F. 完形。H. 床面直上。
5	坏	A. 口縁部径11.6、器高3.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、細礫。E. 橙色。F. 2/3。H. 床面付近。
6	石鏝	A. 残存長1.6、幅1.75、厚さ0.4、重さ1.02g。C. 両面剝離調整。D. チャート。F. 先端部欠損。G. 凹基無差礫。H. 覆土中。

### 第 34 号住居跡 (第 60 図、図版 8)

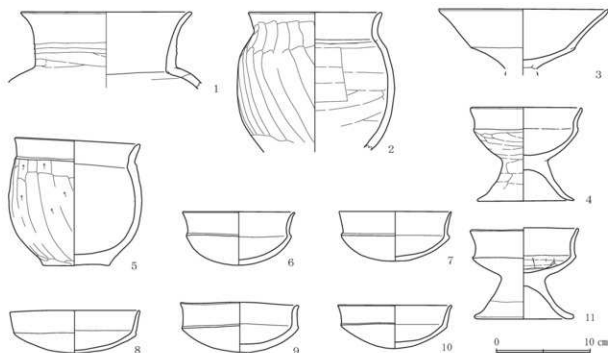
調査区南側の西端に位置し、重複する第 35 号住居跡を切っている。住居跡の北西側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向は 4.03 m まで、南北方向は 3.62 m まで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 45cm ある。壁溝は、調査区内で検出された各壁下を巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、3ヶ所検出されている。P1 は、その位置から 4 本主柱穴を構成するピットの可能性が考えられる。形態は、直径 40cm の円形を呈し、床面からの深さは 35cm ある。P2 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。上半は 90cm × 64cm の長方形ぎみの形態で、下半は 46cm × 37cm の楕円形状に深くなっている。床面からの深さは 58cm ある。

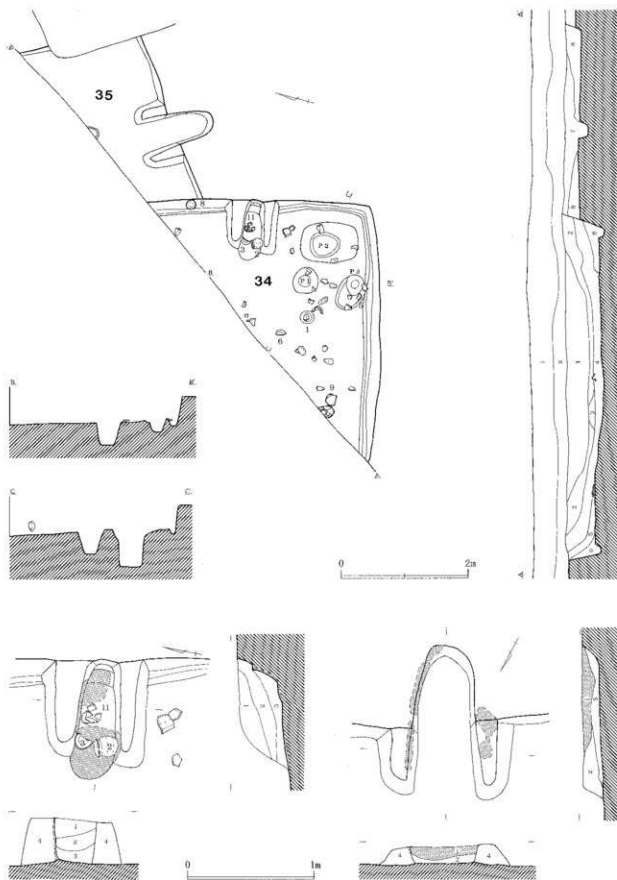
カマドは、住居東側壁に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長 80cm・最大幅 85cm ある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。内面は、比較的良く焼けて赤色化している。燃焼面(火床)は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。袖は、ロームブロックを多量含む暗黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。燃焼面中央付近のやや左側寄りの位置には、No11 の高環を伏せ、その上に甕の底部破片を乗せて支脚に転用している。

出土遺物は、住居の床面上や覆土中から、土器の破片が比較的多く出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第 59 図 第 34 号住居跡出土遺物



第60图 第34·35号住居跡

### 第34・35号住居跡土層説明

#### <第34号住居跡>

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土ブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：黒色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）

第5層：黒色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

第6層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

#### <第35号住居跡>

第7層：黒褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第8層：暗茶褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

### 第34号住居跡カマド土層説明

第1層：淡褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土ブロック・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：淡褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（焼土粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）

第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

### 第35号住居跡カマド土層説明

第1層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

### 第34号住居跡出土土物観察表

1	壺	A. 口縁部径18.1, B. 粘土総積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナゲ, 胴部内外面不明, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 明赤褐色, F. 口縁部破片, H. 床面直上。
2	小形甕	A. 口縁部径13.9, 残存高14.5, B. 粘土総積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナゲ, 体部外面ケズリ, 内面踏ナゲ, D. 石英, チャート, 礫, E. 橙色, F. 3/4, H. カマド内。
3	高坏	A. 口縁部径18.2, B. 粘土総積み上げ, C. 内外面観察不能, D. 細礫, E. 橙色, F. 坏部のみ, H. カマド内。
4	高坏	A. 口縁部径11.8, 器高9.9, 脚端部径10.2, B. 粘土総積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナゲ, 脚部内外面踏ナゲ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 橙色, F. 1/2, H. 覆土中。
5	小形甕	A. 口縁部径13.7, 器高13.5, 底部径7.0, B. 粘土総積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナゲ, 胴部外面ケズリ, 内面ナゲ, D. 石英, 礫, E. 橙色, F. 2/3, H. 床面付近。
6	坏	A. 口縁部径11.8, 器高5.7, B. 粘土総積み上げ, C. 観察不能, D. 石英, 礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 床面付近。
7	坏	A. 口縁部径11.8, 器高5.2, B. 粘土総積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナゲ, 体部外面ケズリ, 内面ナゲ, D. 雲母, 細礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 覆土中。
8	坏	A. 口縁部径13.8, 器高4.5, B. 粘土総積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナゲ, 体部外面ケズリ, 内面ナゲ, D. 石英, 礫, E. 橙色, F. 完形, H. 覆土中。
9	坏	A. 口縁部径12.5, 器高5.3, B. 粘土総積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナゲ, 体部外面ケズリ, 内面ナゲ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 床面直上。
10	坏	A. 口縁部径12.0, 器高4.6, B. 粘土総積み上げ, C. 観察不能, D. 細礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 覆土中。
11	高坏	A. 口縁部径11.4, 器高9.6, 脚端部径10.5, B. 粘土総積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナゲ, 坏部外面ケズリ, 脚部内外面踏ナゲ, 脚端部内外面ヨコナゲ, D. 雲母, 細礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. カマド支脚。

### 第35号住居跡（第60図、図版8）

調査区南側の西端に位置し、重複する第33・34号住居跡に切られている。住居跡の北西側の大半は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南東～北西方向は1.92 mまで、北東～南西方向は3.00 mまで測れる。壁は、直線のやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で25cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。

カマドは、住居南東側壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長118cm・最大幅106cmある。燃焼部は住居の壁を65cm程度掘り込んでおり、燃焼面（火床）

は住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。袖は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。

出土遺物は、住居の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、カマドの形態から、古墳時代後期と考えられる。



第 61 図 第 35 号住居跡  
出土遺物

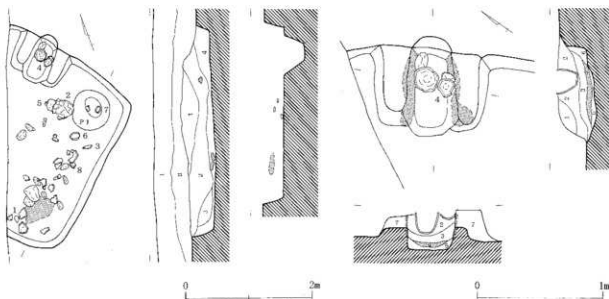
第 35 号住居跡出土遺物観察表

1	遺	A. 底部径 5.9, B. 粘土組織み上げ, C. 不明, D. 石英、雲母、角閃石、細礫, E. 橙色, F. 底部破片, H. 覆土中。
---	---	-------------------------------------------------------------------------

### 第 36 号住居跡 (第 62 図、図版 8)

調査区南側の西端に位置する。住居跡の西側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ比較的整った方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、北東～南西方向が 2.90 m、南東～北西方向は 2.35 m まで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは



第 62 図 第 36 号住居跡

#### 第 36 号住居跡土層説明

- 第 1 層: 暗褐色土層 (白色粒子を多量に、焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第 2 層: 暗褐色土層 (白色粒子・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第 3 層: 黒褐色土層 (焼土粒子を多量に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。)
- 第 4 層: 黒褐色土層 (ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。)

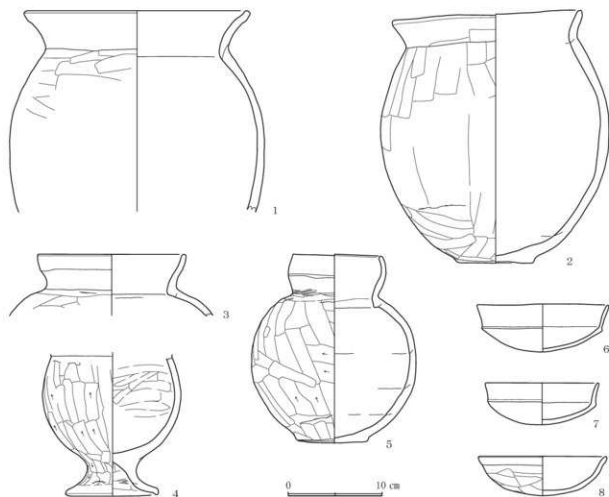
#### 第 36 号住居跡カマド土層説明

- 第 1 層: 暗褐色土層 (ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。)
- 第 2 層: 暗褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。)
- 第 3 層: 暗褐色土層 (ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。)
- 第 4 層: 暗赤褐色土層 (焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。)
- 第 5 層: 暗黄褐色土層 (ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。)
- 第 6 層: 黒褐色土層 (焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。)
- 第 7 層: 暗褐色土層 (ローム粒子を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。)

最高で37cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、1ヶ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居の東側コーナー部に位置している。形態は、63cm×60cmの円形ぎみの形態で、床面からの深さは32cmある。

カマドは、住居北東側壁に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長77cm・最大幅90cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。内面は、比較的良く焼けている。燃焼面（火床）は、カマド掘り方の底面に暗黄褐色土（第5層）を埋め戻して、住居の床面とほぼ同じ高さになっている。袖は、地山掘り残しの可能性があるローム土を主体とする黄褐色土を基部にして、その上に暗褐色土を盛り上げて構築している。煙道部は、住居壁外に8cmほど延びて削平されている。本カマドの土器の掛け方は、土器の出土状態から2個並置式であることが分かるが、左側の長胴甕に対して右側はNo.4の小形台付甕を据えている。また、左側の長胴甕の下には、比較的大きな自然石による支脚があるが、右側の小形台付甕の方には支脚は見られず、台も燃焼面に届いていない。

出土遺物は、カマドや貯蔵穴（P1）内及びその周辺の床面上から、完形に近い土器が出土している。住居南東側の壁際や南側コーナー部付近から出土した土器の大形破片や自然石と大量の焼土塊は、出土層位が覆土中で、住居中央に向かって傾斜していることから、住居



第 63 図 第 36 号住居跡出土遺物

廃絶後の覆土埋没過程中に、周辺から投棄されたものと考えられる。この他には、覆土中からモモの炭化種子（図版 27 No.9）が出土している。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第 36 号住居跡出土土物観察表

1	甕	A. 口縁部径 24.0、残存高 21.3、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ、D. 石英、結晶片岩、軽石、礫、E. 明赤褐色、F. 1/5、H. 覆土中。
2	甕	A. 口縁部径 20.0、器高 26.7、底部径 8.1、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ナデ、胴部外面ケズリ、内面笠ナデ、D. 石英、雲母、細礫、E. 褐色、F. 完形、H. 床面直上。
3	甕	A. 口縁部径 15.6、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ナデ、胴部外面ケズリ、内面笠ナデ、D. 石英、雲母、礫、E. 淡黄褐色、F. 口縁部～胴部上半破片、H. 覆土中。
4	台付甕	A. 残存高 15.0、台端部径 9.8、B. 粘土組織み上げ、C. 胴部～台部外面ケズリ、内面笠ナデ、台端部内外面ヨコナデ、D. 石英、雲母、礫、E. 明褐色、F. 1/2、H. カマド内。
5	壺	A. 口縁部径 9.4、器高 19.9、底部径 7.4、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ、D. 石英、雲母、結晶片岩、礫、E. 淡褐色、F. 完形、H. 床面直上。
6	坏	A. 口縁部径 14.0、器高 5.0、B. 粘土組織み上げ、C. 内外面とも観察不能、D. 石英、細礫、E. 褐色、F. ほぼ完形、H. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径 12.0、器高 4.4、B. 粘土組織み上げ、C. 内外面とも観察不能、D. 雲母、細礫、E. 褐色、F. 2/3、H. 貯蔵穴（P1）内。
8	坏	A. 口縁部径 13.6、器高 4.2、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ、D. 石英、雲母、細礫、E. 明褐色、F. 1/2、H. 覆土中。

### 第 37 号住居跡（第 64 図、図版 8）

調査区南側の西南端に位置する。住居跡の西側は調査区外に位置するが、本住居跡の北西側壁の一部は、近接する E 6 地点（恋河内 2008）で検出されている。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、北東～南西方向は 3.45 m まで、北西～南東方向は 6.06 m まで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 63 cm ある。調査区内で検出された北東側壁と南東側壁の壁下には、幅 20 cm・深さ 10 cm 程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、8ヶ所検出されているが、比較的浅いものが多い。この中の P 3 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置している。形態は、94 cm × 91 cm の隅丸方形を呈し、床面からの深さは 35 cm 程度ある。

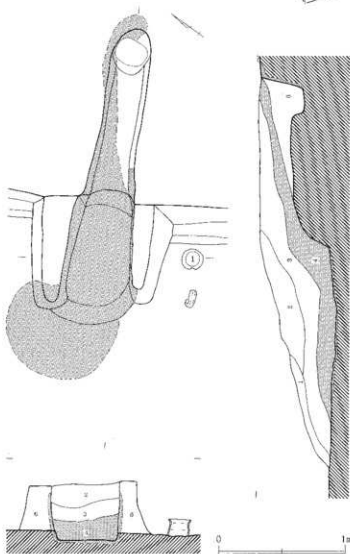
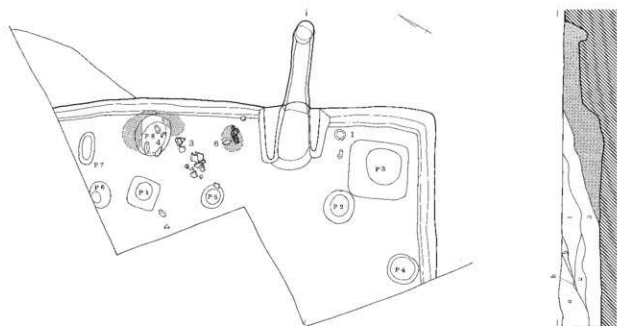
カマドは、住居北東側壁の東側コーナー部寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長 238 cm・最大幅 113 cm ある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居壁と一致している。内面は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面より若干低く、ほぼ水平に作られている。袖は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、住居の壁外に 130 cm ほど水平に延びて立ち上がっている。

出土遺物は、カマド右側の床面上から No 1 の長胴甕の上半が、正位に据えられた状態で出土している。おそらくこの甕は、器台等に転用されたものであろう。他の土器の大半は、住居廃絶後の覆土埋没過程中に、周辺から投棄されたものである。

本住居跡は、床面が部分的に焼けて赤色化している箇所や、少量ながら床面上から炭化材が出土していることから、火災によって焼失した可能性も考えられる。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。





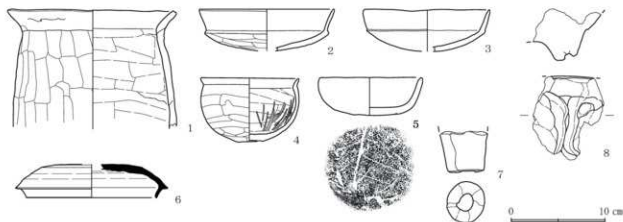
#### 第37号住居跡土層説明

- 第a層：黒褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第b層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・砂利を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、小石・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、小石・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

#### 第37号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：暗褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）
- 第6層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第64図 第37号住居跡



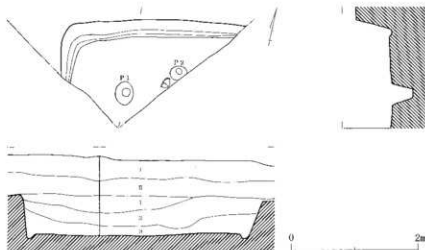
第 65 図 第 37 号住居跡出土遺物

第 37 号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 17.8、残存高 12.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面籠ナゲ。D. 石英、角閃石、軽石、礫。E. 橙色。F. 口縁部～胴部破片。H. 床面直上。
2	坏	A. 口縁部径 14.4、器高 4.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナゲ。体部外面ケズリ、内面ナゲ。D. 石英、雲母、細礫。E. 明赤褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径 15.6、器高 4.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面観察不能。D. 雲母、礫。E. 橙色。F. 3/4。H. 覆土中。
4	坏	A. 残存高 10.4、器高 6.8、底部径 2.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面籠ナゲ後暗文を施す。D. 雲母、細礫。E. 橙色。F. 4/5。H. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径 10.8、器高 4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面ナゲ。D. 石英、雲母、礫。E. 赤褐色。F. 2/3。H. 覆土中。
6	須臾器蓋	A. 口縁部径 13.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面回転ナゲ。天井部外面回転籠ケズリ。D. 石英、細礫。E. 黄灰色。F. 1/2。H. 覆土中。
7	羽口	A. 最大直径 5.0、残存高 4.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面ナゲ。D. 細礫。E. 淡橙色。F. 破片。H. 覆土中。
8	土製品	A. 残存長 8.8、残存幅 7.4、残存厚 5.5。B. 手捏ね。C. 表面未調整。D. 細礫。E. 橙色。F. 破片。H. 覆土中。

第 38 号住居跡 (第 66 図、図版 9)

調査区の南端に位置する。調査区内で検出されたのは、住居跡の北西側コーナー部分付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺構の遺存状態は、比較的良好である。



第 66 図 第 38 号住居跡

第 38 号住居跡土層説明

- 第 1 層: 黒褐色土層 (白色粒子を均一に、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。)
- 第 2 層: 暗褐色土層 (ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。)
- 第 3 層: 暗褐色土層 (ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。)

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つ方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向は1.66mまで、東西方向は2.93mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で62cmある。調査区内で検出された各壁下には、幅15cm・深さ6cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居壁際の周辺部のためやや軟弱である。ピットは、2ヶ所検出されている。この中でP1は、住居の対角線上に配置される4本主柱穴を構成するピットの可能性がある。形態は、38cm×29cmの楕円形を呈し、床面からの深さは34cmある。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代後期と考えられる。

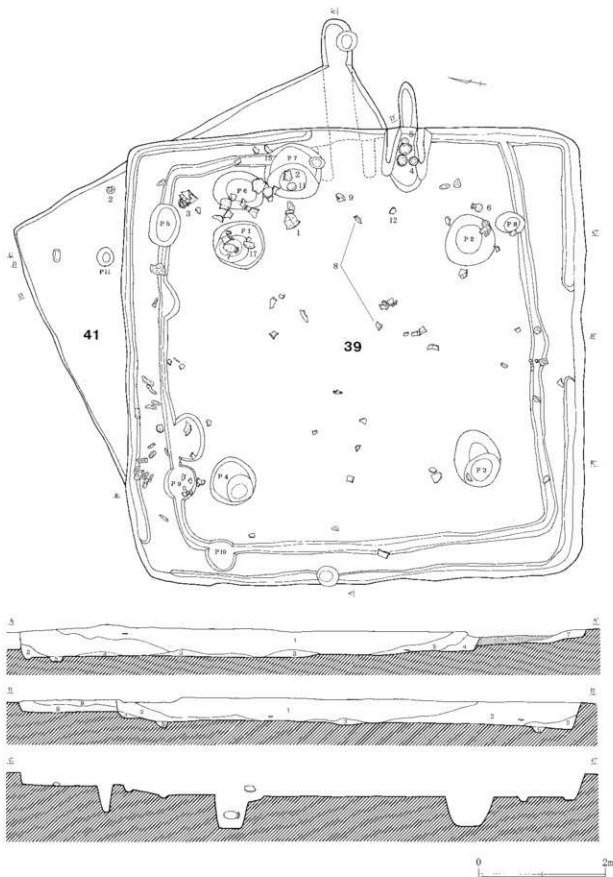
### 第39号住居跡（第67図、図版9）

調査区南側の西側寄りに位置し、重複する第40・41号住居跡を切っている。本住居跡は、住居の主軸を若干変更した入れ子状の重複が認められ、おそらく同一場所で建て替えられたものと思われる。

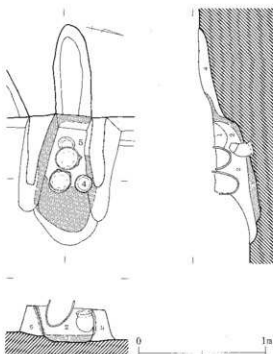
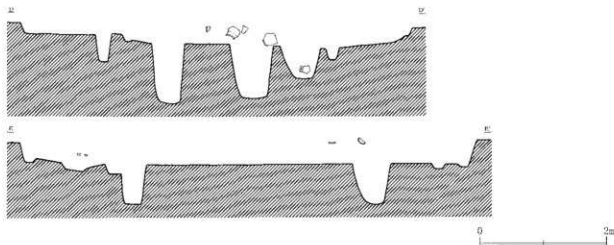
平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が7.03m、南北方向が7.16mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で40cmある。壁溝は、各壁下に見られるが、東側壁と南側壁の中央部及び北西コーナー部で途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、P1～P10の10ヶ所が検出されている。P1～P4は、4本主柱穴で、住居の対角線上に配置されている。形態は、いずれも長さ80cm前後の円形や楕円形を呈し、床面からの深さは45cm～65cmある。P1内からは、完形の小形甕が出土している。P7は、カマド左側の住居東側壁際に位置し、おそらく本住居跡の貯蔵穴と思われる。平面形は、86cm×85cmの隅丸方形ぎみで、西側が隅丸長方形ぎみに2段に深くなっている。床面からの深さは60cmあり、中から長胴甕の上半部と完形の坏が出土している。P5も、本住居跡の貯蔵穴の可能性があるもので、住居北東側コーナー部付近に位置している。65cm×48cmの隅丸長方形ぎみの形態で、床面からの深さは95cmある。

カマドは、住居東側壁の南側寄りに位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長175cm・最大幅76cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居壁と一致している。内面は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面より10cm程度低く、奥壁に向かってやや傾斜して作られている。袖は、淡黄褐色粘土ブロックを多量に含む淡黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、住居の壁外に72cmほど延びて削平されている。本カマドの土器の掛け方は、2個並置と2個縦置の併用による3個の土器がL字型に掛けられており、当地方ではあまり例を見ない非常に珍しい掛け方である。2個縦置の方が主であったようで、奥側の長胴甕の下だけに、小形甕を伏せてその上に甕の底部を重ねた転用支脚が据えられている。手前の2個並置の土器は、左側が長胴甕で右側が小形甕であるが、いずれの下にも支脚は見られない。

出土遺物は、カマド・貯蔵穴（P7）・P1内やその周辺の床面付近から、多くの土器が出土している。土器以外では、住居北側壁際のP5西側の床面上から30cm×25cm程度の扁平な台石が、同じく北側壁際西側の床面上から、長さ15cm前後の編物石風の棒状で扁平な片岩系川原石が、15個散乱したような状態で出土している。また、覆土中からモモの炭化種子が出土している。



第 67 図 第 39・41 号住居跡



第 68 図 第 39 号住居跡カマド

**第 39 号住居跡カマド土層説明**

- 第 1 層：淡黄褐色土層（淡黄褐色粘土ブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）  
 第 2 層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量に含む。粘性、しまりもない。）  
 第 3 層：赤褐色土層（焼土層。）  
 第 4 層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりもない。）  
 第 5 層：淡黄褐色土層（淡黄褐色粘土ブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

建て替え前の旧住居跡の痕跡は、各壁をほぼ途切れずに巡る壁溝と、カマド及び貯蔵穴（P 6）が認められる。それによると、住居の平面形はコーナー部が丸みをもつ比較的整った方形を呈し、規模は東西方向が 6.35 m、南北方向が 6.00 m ある。カマドは、東側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されていたようで、住居の壁外に 1.90 m ほど延びる煙道部の痕跡が見られる。P 6 が旧住居跡の貯蔵穴と思われる、旧カマドの左側に位置している。78cm × 58cm の隅丸長方形ぎみの形態で、床面からの深さは 83cm ある。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、新旧両住居跡とも古墳時代後期と考えられる。

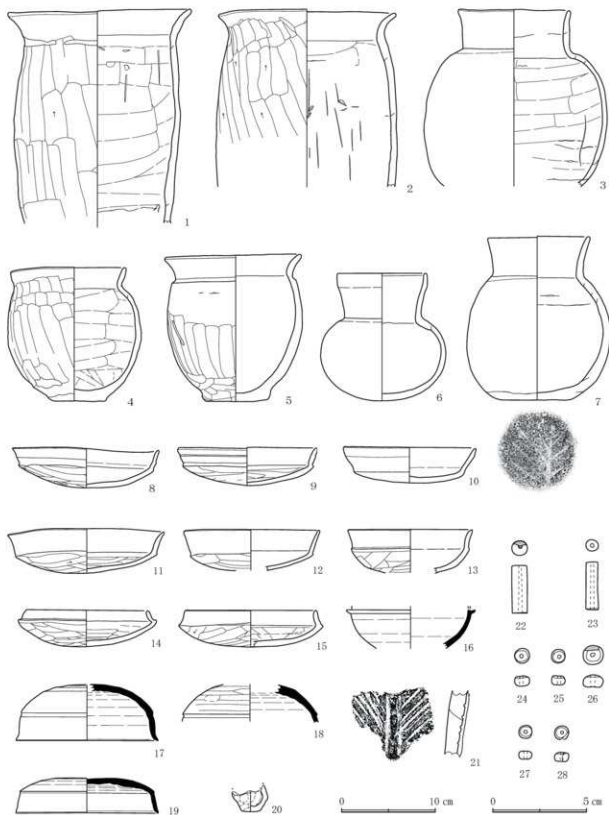
**第 39・41 号住居跡土層説明**

**<第 39 号住居跡>**

- 第 1 層：黒褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）  
 第 2 層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性、しまりもない。）  
 第 3 層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりもない。）  
 第 4 層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりもない。）  
 第 5 層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

**<第 41 号住居跡>**

- 第 6 層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりもない。）  
 第 7 層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・ロームブロックを微量含む。粘性、しまりもない。）  
 第 8 層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりもない。）  
 第 9 層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）



第 69 图 第 39 号住居跡出土遺物

第39号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径19.4, 残存高22.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 淡橙色, F. 口縁部~胴部, H. 床面直上。
2	甕	A. 口縁部径18.7, 残存高18.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 橙色, F. 口縁部~胴部, H. 貯蔵穴P7内。
3	甕	A. 口縁部径11.9, 残存高18.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 淡黄褐色, F. 口縁部~胴部, H. 床面付近。
4	小形甕	A. 口縁部径12.2, 器高14.2, 底部径5.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 石英, 礫, E. 橙色, F. 完形, H. カマド内。
5	小形甕	A. 口縁部径14.4, 器高15.6, 底部径7.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデの後ケズリ, 内面ナデ, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 明褐色, F. 完形, G. 内面に付着物あり, H. カマド支脚。
6	甕	A. 口縁部径9.4, 器高13.5, B. 粘土組織み上げ, C. 内外面とも観察不能, D. 石英, 礫, E. 橙色, F. 完形, G. 内面に付着物あり, H. 床面直上。
7	甕	A. 口縁部径10.9, 器高17.3, 底部径7.7, B. 粘土組織み上げ, C. 内外面とも観察不能, D. 石英, 結晶片岩, 礫, E. 淡褐色, F. ほぼ完形, G. 底部外面に木炭痕あり, H. 主柱穴P1内。
8	坏	A. 口縁部径15.4, 器高4.1, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 砂粒, E. 淡褐色, F. ほぼ完形, H. 覆土中。
9	坏	A. 口縁部径14.7, 器高4.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 雲母, 細礫, E. 橙色, F. 2/3, H. 床面付近。
10	坏	A. 口縁部径14.0, 器高3.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 角閃石, 細礫, E. 橙色, F. 3/4, H. 覆土中。
11	坏	A. 口縁部径16.5, 器高4.7, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 灰黄褐色, F. ほぼ完形, H. 貯蔵穴P7内。
12	坏	A. 口縁部径14.3, 器高4.4, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 細礫, E. 橙色, F. 1/2, H. 床面付近。
13	坏	A. 口縁部径13.2, 器高4.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 細礫, E. 明褐色, F. 1/3, H. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径12.8, 器高3.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 雲母, 細礫, E. 明褐色, F. 2/3, H. 覆土中。
15	坏	A. 口縁部径13.8, 器高3.9, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面笠ナデ, D. 雲母, 細礫, E. 黄灰色, F. 1/2, H. 床面付近。
16	須忠器 坏身	A. 残存高4.1, B. ロクロ成形, C. 体部外面回転部ケズリ, 内面回転ナデ, D. 細粒, E. 灰白色, F. 体部破片, H. 覆土中。
17	須忠器 坏蓋	A. 口縁部径15.0, 器高5.9, B. ロクロ成形, C. 口縁部回転ナデ, 天井部外面回転部ケズリ, 内面回転ナデ, D. 細粒, E. 灰白色, F. 1/2, H. 主柱穴P1上面。
18	須忠器 坏蓋	A. 残存高4.0, B. ロクロ成形, C. 天井部外面回転部ケズリ, 内面回転ナデ, D. 石英, 礫, E. 灰色, F. 1/2, H. 覆土中。
19	須忠器 坏蓋	A. 口縁部径15.0, 器高3.7, B. ロクロ成形, C. 口縁部内外面回転ナデ, 天井部外面回転部ケズリ, 内面回転ナデ, D. 細礫, E. 灰色, F. 1/4, H. 覆土中。
20	手捏土器	A. 残存高2.8, 底部径1.9, B. 手捏ね, C. 体部外面指押え, 内面指ナデ, D. 石英, 雲母, 角閃石, 細礫, E. 橙色, F. 口縁部欠損, H. 覆土中。
21	深鉢	B. 粘土組織み上げ, C. 縦位隆帯の両側を半裁竹管状工具による線形状沈澱文, D. 砂粒, E. 明赤褐色, F. 胴部破片, G. 曽利式土器, F. 覆土中。
22	石製管玉	A. 長さ2.49, 直径0.81, 重さ3.16g, C. 研磨, D. 碧玉, E. 暗緑灰色, F. ほぼ完形, H. 覆土中。
23	土製管玉	A. 長さ2.50, 直径0.61, 重さ1.29g, C. ナデ, D. 砂粒, E. 黒褐色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, 石製管玉の模倣品, H. 覆土中。
24	土製小玉	A. 直径0.80, 厚さ0.50, 重さ0.33g, C. ナデ, D. 砂粒, E. 黒色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, ガラス小玉の模倣品, H. 覆土中。
25	土製小玉	A. 直径0.72, 厚さ0.49, 重さ0.31g, C. ナデ, D. 砂粒, E. 黒色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, ガラス小玉の模倣品, H. 覆土中。
26	土製小玉	A. 直径1.05, 厚さ0.61, 重さ0.75g, C. ナデ, D. 砂粒, E. 黒褐色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, ガラス小玉の模倣品, H. 覆土中。
27	土製小玉	A. 直径0.70, 厚さ0.41, 重さ0.27g, C. ナデ, D. 砂粒, E. 黒色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, ガラス小玉の模倣品, H. 覆土中。
28	土製小玉	A. 直径0.75, 厚さ0.50, 重さ0.33g, C. ナデ, D. 砂粒, E. 黒色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, ガラス小玉の模倣品, H. 覆土中。

#### 第40号住居跡（第70図、図版9）

調査区南側の西側寄りに位置し、住居跡の西側半分を第39号住居跡に切られ、東側は第45号住居跡の一部を切っている。

平面形は、残存する部分から推測すると、比較的整った長方形であったと思われる。規模は、南東～北西方向が2.60m、南西～北東方向は2.90mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で38cmある。床面は、ロームブロックを多量含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、1ヶ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド左側の住居東側コーナー部に位置している。形態は、55cm×36cmの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは38cmある。

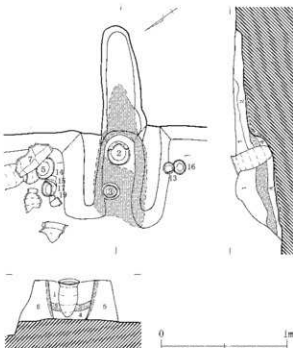
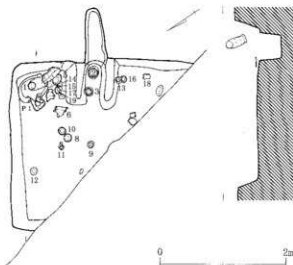
カマドは、住居南東側壁の中央やや北東側寄りに位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長156cm・最大幅85cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居壁と一致している。内面は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、奥壁に向かってやや傾斜して作られている。袖は、ロームブロックを均一に含む暗茶褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、住居の壁外に83cmほど伸びて削平されている。本カマドの土器の掛け方は、No2の長胴甕とNo3の小形の胴張甕が、接してはいないが縦に並んで出土していることから、2個縦置き式の可能性が考えられ、奥側のNo2の長胴甕の下には模倣坏を伏せた転用支脚が据えられている。

出土遺物は、カマドや貯蔵穴（P1）の内外及び住居中央部の床面上から、完形に近い土器が比較的多く出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

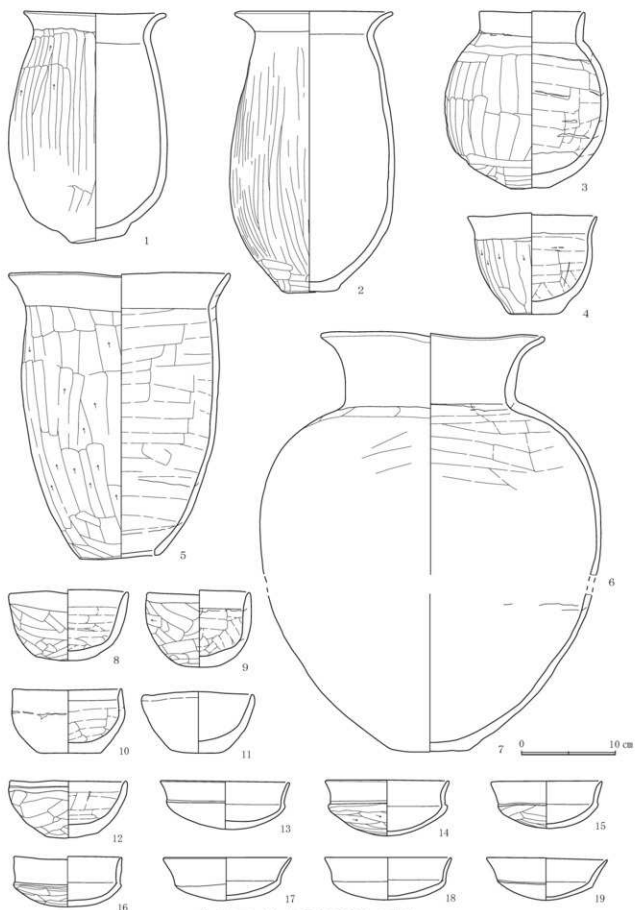
#### 第40号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりもない。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：暗褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：暗茶褐色土層（ロームブロック均一に含む。粘性はなく、しまりを有する）



第70図 第40号住居跡





第 71 図 第 40 号住居跡出土遺物

第 40 号住居跡出土土物観察表

1	甕	A. 口縁部径 15.0, 器高 24.5, 底部径 5.7, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 石英, 雲母, 角閃石, 軽石, 礫, E. 明赤褐色, F. 1/2, H. 貯蔵穴 P1 上面。
2	甕	A. 口縁部径 16.7, 器高 29.8, 底部径 6.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 石英, 雲母, 軽石, 礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. カマド内。
3	甕	A. 口縁部径 11.0, 器高 18.8, 底部径 4.3, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ナゲ, 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, 底部外面ケズリ, D. 石英, 結晶片岩, 礫, E. 淡褐色, F. 完形, H. カマド内。
4	小形甕	A. 口縁部径 13.6, 器高 10.7, 底部径 5.4, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 淡褐色, F. 3/4, H. 貯蔵穴 P1 内。
5	大形甕	A. 口縁部径 23.4, 器高 30.3, 底部径 8.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 石英, 雲母, 軽石, 礫, E. 淡黄褐色, F. 完形, H. 貯蔵穴 P1 内。
6	甕	A. 口縁部径 23.7, 残存高 25.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 淡褐色, F. 口縁部から胴部破片, H. 覆土中。
7	甕	A. 残存高 16.7, 底部径 8.4, B. 粘土組織み上げ, C. 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 淡褐色, F. 胴部から底部破片, H. 覆土中。
8	鉢	A. 口縁部径 12.7, 器高 7.5, 底部径 6.5, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面ナゲ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 角閃石, E. 褐色, F. 完形, H. 床面付近。
9	鉢	A. 口縁部径 11.0, 器高 8.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 角閃石, E. 淡黄褐色, F. 完形, H. 床面付近。
10	鉢	A. 口縁部径 11.6, 器高 6.6, 底部径 6.7, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部内外面ナゲ, D. 石英, 雲母, 礫, E. 褐色, F. 2/3, H. 床面付近。
11	鉢	A. 口縁部径 11.5, 器高 6.5, 底部径 5.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ナゲ, 胴部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 石英, 結晶片岩, 礫, E. 淡褐色, F. 完形, H. 床面付近。
12	鉢	A. 口縁部径 12.5, 器高 6.1, 底部径 5.4, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面ナゲ, 底部外面ケズリ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 角閃石, E. 淡褐色, F. 完形, H. 覆土中。
13	坏	A. 口縁部径 13.6, 器高 5.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナゲ, D. 雲母, 細礫, E. 褐色, F. 3/4, H. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径 13.0, 器高 5.9, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 雲母, 細礫, E. 褐色, F. 完形, H. 貯蔵穴 P1 上面。
15	坏	A. 口縁部径 11.8, 器高 5.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面塗ナゲ, D. 雲母, 細礫, E. 褐色, F. 完形, H. 貯蔵穴 P1 上面。
16	坏	A. 口縁部径 11.4, 器高 5.3, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナゲ, D. 雲母, 細礫, E. 褐色, F. 完形, H. 床面付近。
17	坏	A. 口縁部径 13.5, 器高 4.6, B. 粘土組織み上げ, C. 内外面観察不能, D. 雲母, 細礫, E. 褐色, F. 完形, H. 貯蔵穴 P1 上面。
18	坏	A. 口縁部径 13.3, 器高 4.5, B. 粘土組織み上げ, C. 内外面観察不能, D. 石英, 礫, E. 褐色, F. 3/4, H. 覆土中。
19	坏	A. 口縁部径 12.7, 器高 4.5, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナゲ, D. 角閃石, 軽石, 礫, E. 褐色, F. 完形, H. 貯蔵穴 P1 上面。

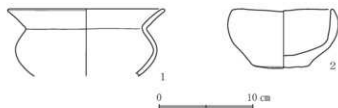
第 41 号住居跡 (第 67 図、図版 9)

調査区南側の西側寄りに位置し、重複する第 39 号住居跡に住居跡の大半を切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、比較的整った方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、北西～南東方向が 6.10 m、北東～南西方向は 4.28 m まで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 18cm ある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、壁際の周辺部のためかやや軟弱である。ピットは、1ヶ所検出されている。

出土遺物は、住居の床面上や覆土中から、土器が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土土器の様相から、古墳時代中期と考えられる。



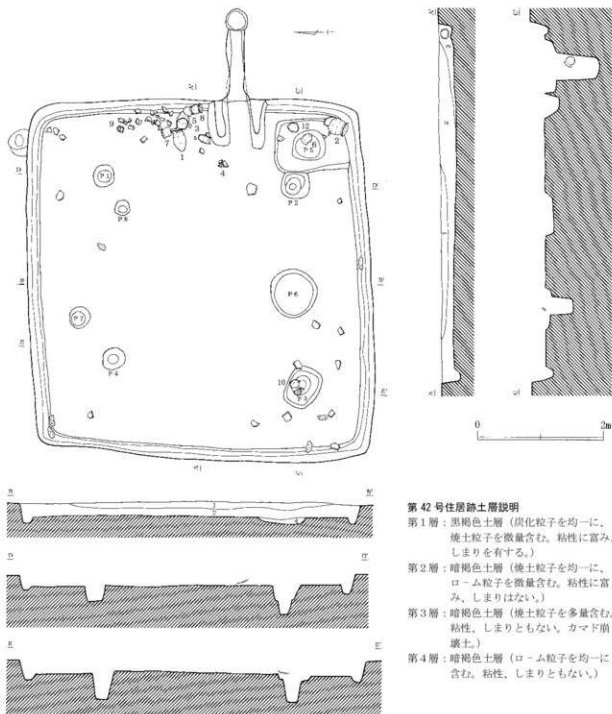
第 72 図 第 41 号住居跡出土遺物

第41号住居跡出土遺物観察表

1	鉢	A. 口縁部径16.6, 残存高7.1, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデの後下半ケズリ, 内面不明, D. 雲母, 軽石, 礫, E. 橙色, F. 口縁部~胴部破片, H. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径10.8, 器高6.3, 底部径5.9, B. 粘土組織み上げ, C. 内外面観察不能, D. 石英, 雲母, 細礫, E. 橙色, F. 4/5, H. 床面付近。

第42号住居跡(第73図、図版9)

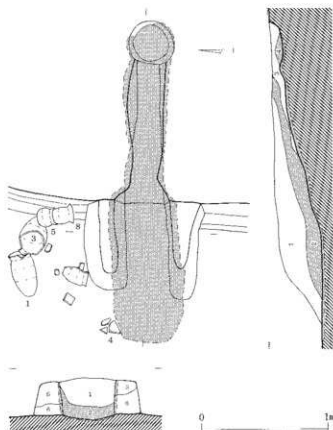
調査区の南側に位置し、重複する第43号住居跡を切っている。住居北東側コーナー部付近で、隣接する第1号掘立柱建物跡の柱穴と接している。



第73図 第42号住居跡

第42号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）  
 第3層：暗褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。カマド崩壊土。）  
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）



第74図 第42号住居跡カマド

#### 第42号住居跡カマド土層説明

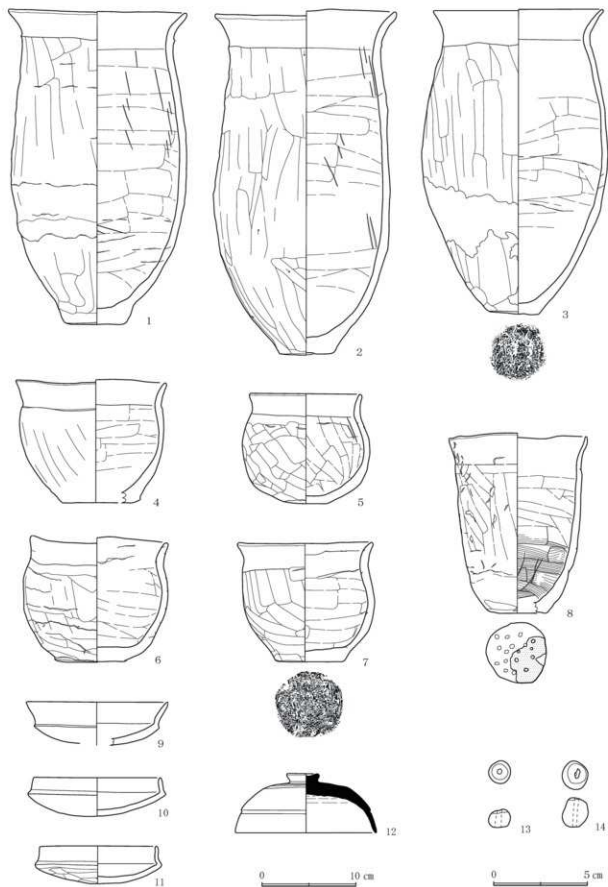
- 第1層：黒褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第3層：黒褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

平面形は、コーナー部が丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が5.65m、南北方向が5.48mある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。各壁下には、幅15cm・床面からの深さ10cm程度の壁溝が途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く縮まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、7ヶ所検出されている。P1～P4は、やや歪ながらほぼ丸いもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置している。上半は115cm×84cmの隅丸長方形の形態で、下半は52cm×48cmの円形状に2段になって深くになっている。床面からの深さは90cmあり、上面から長胴甕と坏が、中から完形の小形甕が出土している。

カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長218cm・最大幅94cmある。燃焼部は、住居内に位置するが、煙道部との境には段をもたない。内面は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。袖は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、燃焼面から段をもたず、住居の壁に一致した箇所から住居の壁外に140cmほど傾斜して延びて立ち上がっている。

出土遺物は、カマド左側の床面上や貯蔵穴（P5）の内外及び主柱穴P3内から、完形に近い土器が多く出土している。特にカマド左側では、No5の鉢の上にNo8の小形甕を乗せた状態で出土しており、日常的な土器の保管状況を窺うことができよう。土器以外では、住居北西側コーナー部や南西側コーナー部の床面付近から、長さ20cm弱の棒状の片岩系川原石が出土している。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第 75 图 第 42 号住居跡出土遺物

## 第 42 号住居跡出土土物観察表

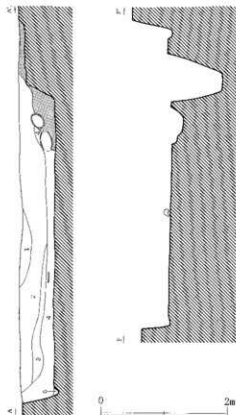
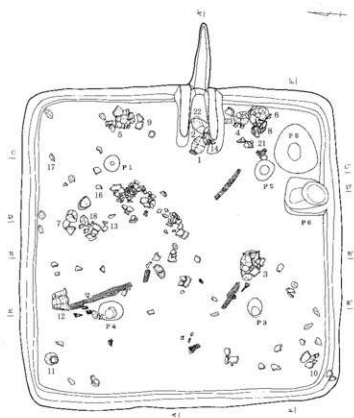
1	甕	A. 口縁径 18.8, 器高 33.4, 底部径 6.4, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, D. 石英, 結晶片岩, 礫, E. 橙色, F. ほぼ完形, H. 床面直上。
2	甕	A. 口縁径 19.2, 器高 36.5, 底部径 5.8, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 淡橙色, F. ほぼ完形, H. 貯蔵穴 P 5 上面。
3	甕	A. 口縁径 18.0, 器高 32.3, 底部径 5.2, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 淡橙色, G. 底部外面に木葉痕あり, F. ほぼ完形, H. 床面直上。
4	小形甕	A. 口縁径 15.7, 器高 13.0, 底部径 8.1, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, 底部外面ケズリ, D. 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 橙色, F. 1/2, H. 床面付近。
5	小形甕	A. 口縁径 11.6, 器高 11.6, 底部径 4.5, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, 底部外面ケズリ, D. 石英, 結晶片岩, 礫, E. 明赤褐色, F. 完形, H. 床面直上。
6	小形甕	A. 口縁径 14.6, 器高 13.4, 底部径 7.6, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, D. 石英, 結晶片岩, 軽石, 礫, E. 橙色, F. 完形, H. 貯蔵穴 P 5 内。
7	小形甕	A. 口縁径 14.3, 器高 12.6, 底部径 7.0, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫, E. 橙色, F. 完形, H. 床面付近。
8	小形甕	A. 口縁径 14.7, 器高 19.1, 底部径 6.3, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部内外面蓋ナデ, D. 石英, 結晶片岩, 礫, E. 橙色, G. 底部穿孔は多孔式, F. ほぼ完形, H. No 5 の小形甕の上に重なって出土。
9	坏	A. 口縁径 15.0, 器高 4.5, B. 粘土紐積み上げ, C. 内外面とも観察不能, D. 石英, 角閃石, 礫, E. 明赤褐色, F. 破片, H. 覆土中。
10	坏	A. 口縁径 13.5, 器高 4.1, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, D. 雲母, 細礫, E. 橙色, F. 3/4, H. 主柱穴 P 3 上面。
11	坏	A. 口縁径 12.3, 器高 4.0, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面蓋ナデ, D. 石英, 礫, E. 淡橙色, F. 2/3, H. 覆土中。
12	須臾器蓋	A. 口縁径 15.0, 器高 6.2, B. ロクロ成形, 撫み部貼り付け, C. 口縁部内外面回転ナデ, 天井部外面回転ケズリ, 内面回転ナデ, D. 砂粒, E. 灰白色, F. ほぼ完形, H. 貯蔵穴 P 5 上面。
13	土製小玉	A. 直径 1.21, 高さ 0.91, 重さ 1.33g, B. 手捏ね, C. ナデ, D. E. 暗褐色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, H. 覆土中。
14	土製小玉	A. 直径 1.52, 高さ 1.51, 重さ 3.32g, B. 手捏ね, C. ナデ, D. E. 明褐色, F. 完形, G. 穿孔は焼成前, H. 覆土中。

## 第 43 号住居跡 (第 76 図、図版 10)

調査区の南側に位置し、重複する第 42 号住居跡に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナ部が丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、東西方向が 5.00 m、南北方向が 5.02 m ある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 52cm ある。各壁下には、幅 15cm ~ 20cm・床面からの深さ 10cm 程度の壁溝が途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的強く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、6ヶ所検出されている。P 1 ~ P 4 は、4 本主柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。25cm ~ 35cm の円形や楕円形を呈し、床面からの深さは 40cm ~ 55cm ある。P 5 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナ部に位置している。76cm × 65cm の楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは 85cm ある。P 6 は、P 5 西側の南側壁際に位置する。70cm × 60cm の隅丸形状の浅い掘り込みの中に円形のピット状の掘り込みを伴うことから、入口施設の可能性も考えられる。

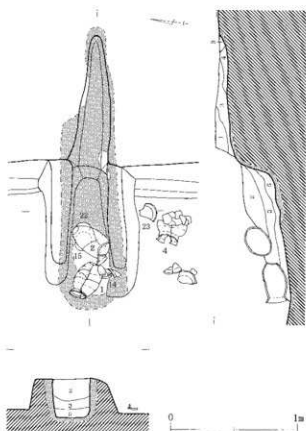
カマドは、住居東側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長 210cm・最大幅 78cm ある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居壁と一致している。内面は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面(火床)は、住居の床面とほぼ同じ高さで、奥壁に向かってやや傾斜して作られている。袖は、地山掘り残しの可能性があるローム土を主体とする黄褐色土である。煙道部は、住居の壁外に 106cm ほど延びて削平されている。本カマドの土器の掛け方は、長胴甕が前倒しになった状態で、2 個縦に並んで出土している。



**第43号住居跡土層説明**

- 第1層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第3層：黒褐色土層（炭化粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性しまりともない。）

第76図 第43号住居跡



第77図 第43号住居跡カマド

第43号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黒褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）
- 第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性、しまりともない。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：黒褐色土層（炭化粒子を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

ことから、2個縦置きの可能性が考えられる。奥側の壁の下には、No15の台付鉢を伏せて転用した支脚が見られる。

出土遺物は、カマド内や周辺の床面上から、完形に近い土器が上から押し潰されたような状態で多く出土している。住居中央部から北側の覆土中にまとまった土器破片や、南西コーナー付近の覆土中にまとまった土器破片は、本住居跡に伴うものではなく、住居廃絶後の覆土埋没過程に周辺から投棄されたものである。

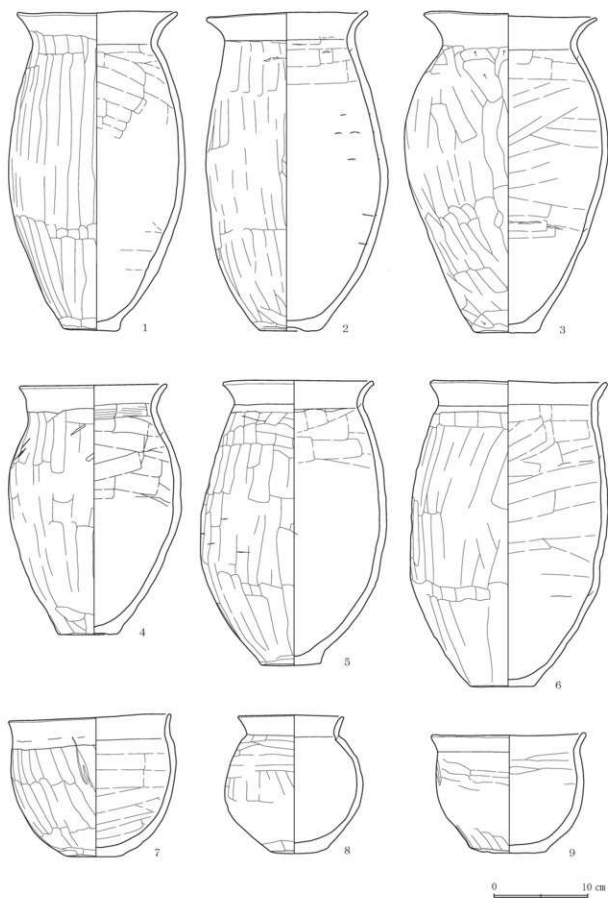
本住居跡の床面上には、複数の炭化材が出土していることから、火災により焼失した可能性も考えられる。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

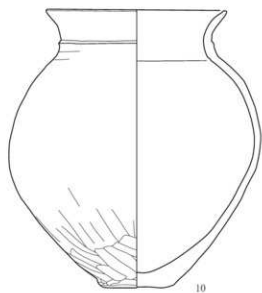
第43号住居跡出土土物観察表

1	甕	A. 口縁部径16.8、器高33.8、底部径5.8。B. 粘土雜積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面箇ナゲ。D. 石英、雲母、軽石、礫。E. 橙色。F. 完形。H. カマド内。
2	甕	A. 口縁部径17.0、器高33.7、底部径6.7。B. 粘土雜積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面箇ナゲ。D. 雲母、細礫。E. 明褐色。F. ほぼ完形。H. カマド内。
3	甕	A. 口縁部径18.3、器高34.0、底部径6.3。B. 粘土雜積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面箇ナゲ。D. 雲母、細礫。E. 橙色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
4	甕	A. 口縁部径15.6、器高26.4、底部径6.4。B. 粘土雜積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面箇ナゲ。D. 雲母、軽石、細礫。E. 橙色。F. 完形。H. 床面直上。
5	甕	A. 口縁部径15.8、器高30.2、底部径6.3。B. 粘土雜積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面箇ナゲ。D. 石英、雲母、軽石、礫。E. 淡橙色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
6	甕	A. 口縁部径18.7、器高32.2、底部径6.6。B. 粘土雜積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面箇ナゲ。D. 石英、雲母、軽石、礫。E. 橙色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
7	鉢	A. 口縁部径17.2、器高15.1、底部径5.8。B. 粘土雜積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面箇ナゲ。底外部面ケズリ。D. 石英、雲母、角閃石、礫。E. 明褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
8	小形甕	A. 口縁部径11.2、器高14.7、底部径5.9。B. 粘土雜積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面ケズリ、内面箇ナゲ。底外部面ケズリ。D. 雲母、細礫。E. 明赤褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。

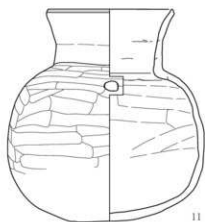




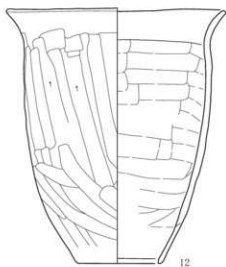
第78图 第43号住居跡出土遺物(1)



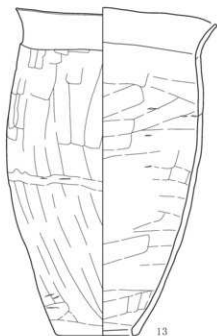
10



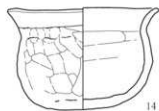
11



12



13



14



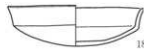
15



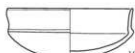
16



17



18



19



20



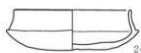
21



22



23



24



第79图 第43号住居跡出土遺物(2)

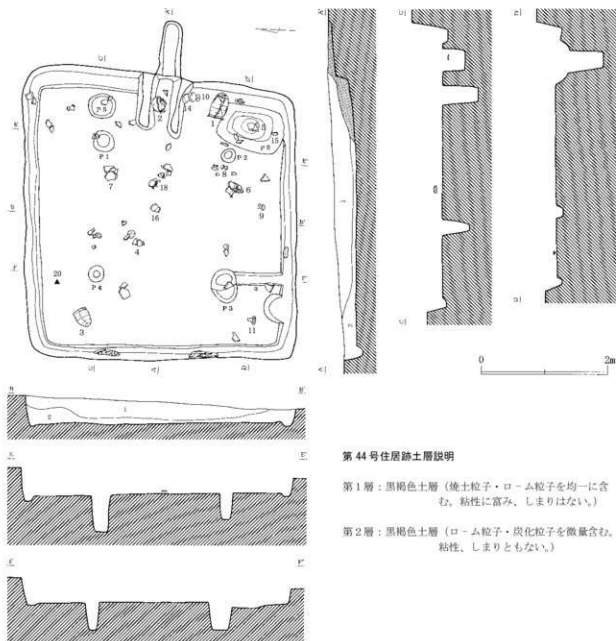
9	鉢	A. 口縁部径 16.3, 器高 12.7, 底部径 8.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナデ。D. 雲母, 軽石, 細礫。E. 淡黄褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
10	壺	A. 口縁部径 19.0, 器高 29.5, 底部径 7.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面ナデ。D. 石英, 雲母, 礫。E. 淡赤褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
11	壺	A. 口縁部径 13.2, 器高 22.6, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナデ, 底部外面ケズリ。D. 石英, 雲母, 軽石, 礫。E. 明赤褐色。F. 3/4。H. 床面付近。
12	大形甕	A. 口縁部径 23.1, 器高 27.0, 底部径 9.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナデ。D. 石英, 雲母, 結晶片岩, 礫。E. 褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
13	大形甕	A. 口縁部径 21.4, 器高 34.7, 底部径 8.7, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナデ。D. 石英, 結晶片岩, 礫。E. 褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
14	鉢	A. 口縁部径 15.9, 器高 10.7, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナデ, 底部外面ケズリ。D. 雲母, 軽石, 細礫。E. 淡褐色。F. ほぼ完形。H. カマド内。
15	台付鉢	A. 口縁部径 15.1, 器高 11.1, 台端部径 10.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ, 内面鑑ナデ。台'内外面鑑ナデ。D. 石英, 結晶片岩, 礫。E. 黄褐色。F. 3/4。H. カマド支脚。
16	坏	A. 口縁部径 15.2, 器高 4.5, B. 粘土組織み上げ。C. 内外面とも観察不能。D. 砂粒。E. 淡褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
17	坏	A. 口縁部径 14.9, 器高 4.2, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面ナデ。D. 雲母, 細礫。E. 褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
18	坏	A. 口縁部径 14.3, 器高 4.3, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面ナデ。D. 細礫。E. 褐色。F. 2/3。H. 覆土中。
19	坏	A. 口縁部径 13.4, 器高 5.2, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面ナデ。D. 細礫。E. 褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
20	坏	A. 口縁部径 13.6, 器高 4.5, B. 粘土組織み上げ。C. 内外面とも観察不能。D. 細礫。E. 褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
21	坏	A. 口縁部径 13.2, 器高 5.3, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面鑑ナデ。D. 石英, 細礫。E. 褐色。F. 1/2。H. 床面直上。
22	坏	A. 口縁部径 13.2, 器高 5.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面鑑ナデ。D. 細礫。E. 明黄褐色。F. 2/3。H. カマド内。
23	坏	A. 口縁部径 11.4, 器高 4.5, B. 粘土組織み上げ。C. 内外面とも観察不能。D. 礫。E. 褐色。F. 4/5。H. 覆土中。
24	坏	A. 口縁部径 12.4, 器高 4.3, B. 粘土組織み上げ。C. 内外面とも観察不能。D. 砂粒。E. 淡褐色。F. 1/2。H. 覆土中。

#### 第 44 号住居跡 (第 80 図、図版 10)

調査区の南端に位置する。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部が丸みを持ち、東側壁が若干歪んだ方形を呈している。規模は、東西方向が 4.12 m ~ 4.56 m、南北方向が 4.26 m である。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 45 cm である。壁溝は、各壁下を巡っているが、カマド右側の住居南東側コーナー部付近には見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、6ヶ所検出されている。P1 ~ P4 は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、4 本主柱穴と考えられる。直径 23 cm ~ 40 cm 前後の円形ぎみの形態で、床面からの深さは 40 cm ~ 55 cm である。P3 の南側には、壁溝と類似した形態の間仕切り溝が見られる。P6 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。上半は 100 cm × 70 cm の隅丸長方形ぎみの形態で、下半は 50 cm × 35 cm の楕円形状になって 2 段に深くなっている。床面からの深さは 76 cm である。中からは、土器が出土している。

カマドは、住居東側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長 184 cm × 最大幅 86 cm である。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居壁と一致している。内面は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面(火床)は、住居の床面とほぼ同じ高さで、ほぼ水平に作られている。中央付近のやや左側寄りの位置に、長胴甕が 1 個体出土しており、その下には幅 25 cm × 高さ 15 cm の円礫による石製支脚が据えられている。袖は、ロームブロックを均一に含む暗茶褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、住居の壁



#### 第44号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

第80図 第44号住居跡

外に86cmほど延びて削平されている。本カマドの土器の掛け方は、長胴甕が1個体しか出土していないが、石製支脚の位置からすると、2個並置式であった可能性も考えられる。

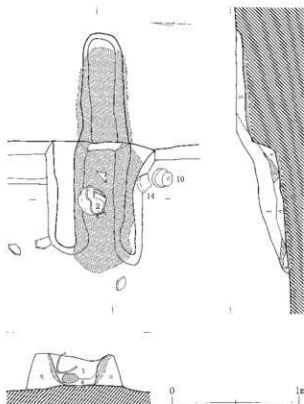
出土遺物は、カマドや貯蔵穴（P6）内及びその周辺や壁際の床面上から、土器が比較的多く出土している。土器以外では、住居北西側コーナー部付近の床面上から、石製紡錘車が1点出土している。

本住居跡は、床面上や西側壁に貼りついて炭化材が出土していることから、火災により焼失した可能性も考えられる。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

#### 第44号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径16.4、器高35.9、底部径5.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面木口状工具によるナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、小石。E. 茶褐色。F. 完形。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 床面直上。
---	---	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

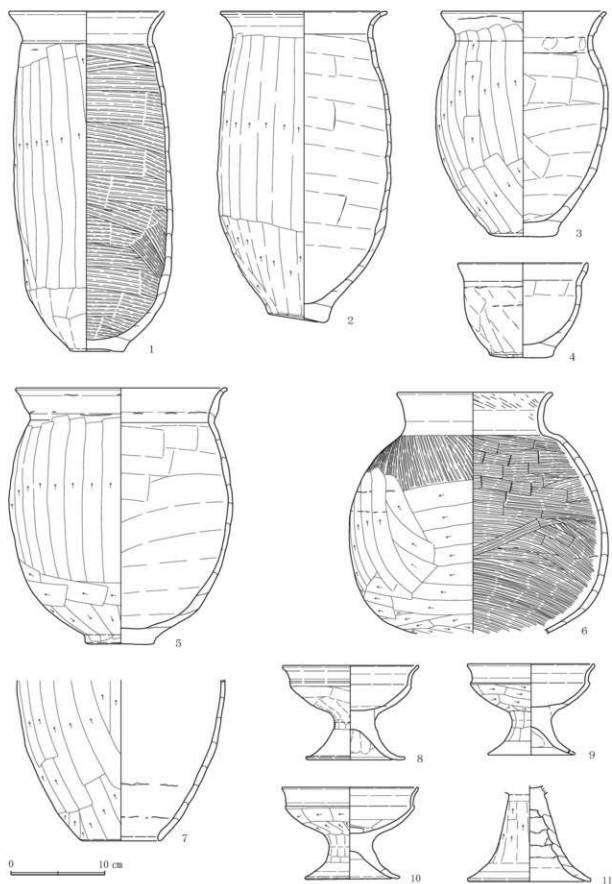


#### 第44号住居跡カマド土層説明

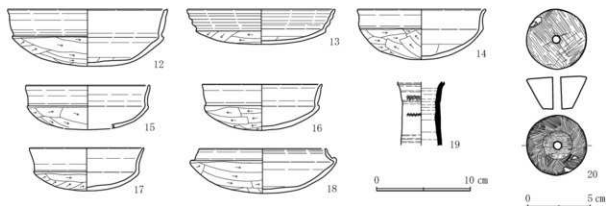
- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第4層：黒褐色土層（炭化粒子を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：暗赤褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第81図 第44号住居跡カマド

2	甕	A. 口縁部径17.7, 器高32.7, 底部径6.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒, 白色粒, 小石。E. 茶褐色。F. ほぼ完形。G. 外面粘土附着, 底部二次焼成により赤色化。H. カマド内。
3	甕	A. 口縁部径18.3, 器高34.0, 底部径6.3, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒, 白色粒, 小石。E. 暗茶褐色。F. 4/5, H. 床面付近。
4	鉢	A. 口縁部径13.8, 器高10.1, 底部径6.7, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒, 白色粒, 小石。E. 暗橙褐色。F. ほぼ完形。G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 床面直上。
5	甕	A. 口縁部径22.6, 器高27.2, 底部径7.3, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒, 白色粒, 小石。E. 暗橙褐色。F. 2/3, G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 貯蔵穴P6内。
6	壺	A. 口縁部径16.5, 残存高25.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面木口状工具によるナゲの後ケズリ, 内面木口状工具によるナゲ。D. 赤色粒, 白色粒, 小石。E. 明茶褐色。F. 1/2, H. 床面直上。
7	大形瓶	A. 残存高17.0, 底部径8.0, B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ, 内面ナゲ。D. 赤色粒, 白色粒。E. 淡橙褐色。F. 1/4, G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 床面直上。
8	高坏	A. 口縁部径14.4, 器高10.0, 脚端部径10.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリ, 内面ナゲ。脚部外面ケズリ, 内面指ナゲ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒, 白色粒, 小石。E. 淡橙褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
9	高坏	A. 口縁部径13.5, 器高9.5, 脚端部径9.2, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリ, 内面ナゲ。脚部外面ケズリ, 内面指ナゲ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒, 白色粒, 小石。E. 淡橙褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
10	高坏	A. 口縁部径14.5, 器高9.7, 脚端部径10.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ。脚部外面ケズリ, 内面指ナゲ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒, 白色粒。E. 明橙褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
11	高坏	A. 残存高10.1, 脚端部径13.0, B. 粘土組織み上げ。C. 脚部外面ケズリ, 内面ナゲ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒, 白色粒, 片岩粒。E. 淡橙褐色。F. 脚部のみ。H. 床面直上。
12	坏	A. 口縁部径16.9, 器高6.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ。D. 赤色粒, 白色粒。E. 明茶褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
13	坏	A. 口縁部径15.6, 器高3.7, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ。D. 赤色粒。E. 明茶褐色。F. 1/3, G. 外面に黒炭あり。H. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径13.6, 器高5.3, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ, 内面鑑ナゲ。D. 赤色粒, 白色粒。E. 暗橙褐色。F. 3/4, G. 器表面は二次焼成を受けて荒れている。H. 覆土中。



第 82 图 第 44 号住居跡出土遺物 (1)



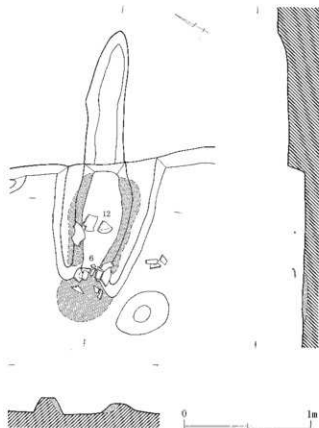
第 83 図 第 44 号住居跡出土遺物 (2)

15	環	A. 口縁部径 13.2, 器高 4.6, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面隈ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 淡茶褐色, F. 1/3, H. 貯蔵穴 P 6 上面。
16	環	A. 口縁部径 12.7, 器高 4.9, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面隈ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 暗褐色, F. 1/2, G. 外面に黒斑あり, H. 床面直上。
17	環	A. 口縁部径 12.2, 器高 4.5, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面隈ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 暗褐色, F. 1/3, G. 器表面は二次焼成を受けて荒れている, H. 覆土中。
18	環	A. 口縁部径 13.6, 器高 4.7, B. 粘土紐積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面隈ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 暗褐色, F. 3/4 強, G. 外面に黒斑あり, H. 床面直上。
19	須恵器 長頸壺	A. 残存高 6.8, B. ロックロ成形, C. 頸部内外面回転ナデの後, 外面に縞描波状文を施す, D. 白色粒, E. 暗灰色, F. 頸部 1/8, H. 覆土中。
20	石製 紡錘車	A. 上面径 4.75, 下面径 2.35, 高さ 2.55, 重さ 73.9g, C. 上下面・側面とも研磨, D. 滑石, F. 完形, H. 床面直上。

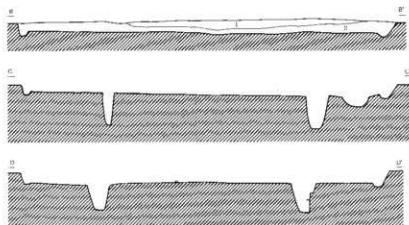
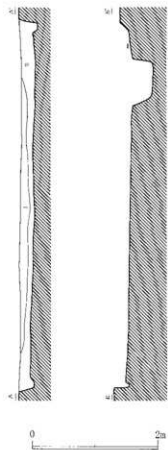
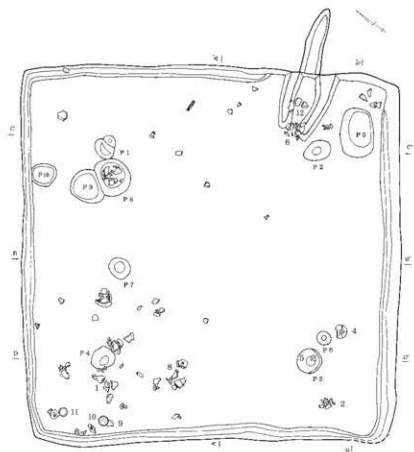
#### 第 45 号住居跡 (第 85 図、図版 10)

調査区の南側の西側寄りに位置する。住居跡の南側コーナー部の一部を、重複する第 40 号住居跡に切られている。

平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、北東～南西方向が 6.07 m、北西～南東方向が 6.16 m である。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で 22cm である。壁溝は、各壁下を巡っているが、カマド右側の住居東側コーナー部付近には見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、10ヶ所検出されている。P 1～P 4 は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、4本支柱穴と考えられる。長さ 40cm 前後の円形や楕円形を呈し、床面からの深さは 40cm～54cm である。P 3 内からは、高坏の脚部が出土している。P 5 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置



第 84 図 第 45 号住居跡カマド



#### 第45号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第85図 第45号住居跡

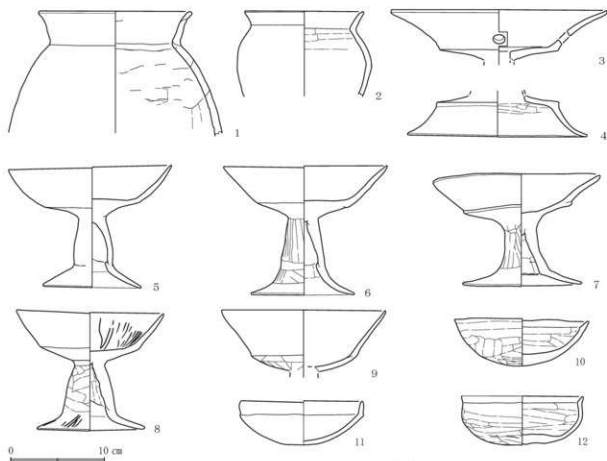
する。76cm × 55cmの隅丸長方形ぎみの形態で、床面からの深さは35cmある。

カマドは、住居北東側壁の東側コーナー部寄りに位置し、壁に対して若干斜めに付設されている。規模は、全長205cm・最大幅86cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居壁と一致している。内面は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。支脚は、見られない。袖は、地山掘り残しの可能性があるローム土を主体とする黄褐色土である。煙道部は、住居の壁外に104cmほど延びて削平されている。



出土遺物は、カマドや貯蔵穴（P5）内外及びその周辺や住居中央部の床面付近ら、土器の破片が多く出土している。住居西側コーナー部付近や南側コーナー部付近の土器は、出土層位が覆土中であることから、住居廃絶後の覆土埋没過程中に周辺から投棄されたものと考えられる。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代中期と考えられる。



第 86 図 第 45 号住居跡出土遺物

第 45 号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 16.2, 残存高 13.1. B. 粘土紐積み上げ. C. 内外面とも観察不能. D. 石英、雲母、結晶片岩、礫. E. 暗褐色. F. 1/2. H. 覆土中.
2	小形甕	A. 口縁部径 12.6, 残存高 9.0. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部内外面ナデ. D. 石英、雲母、細礫. E. 橙色. F. 破片. H. 覆土中.
3	高坪形器台	A. 口縁部径 22.8, 残存高 5.4. B. 粘土紐積み上げ. C. 内外面観察不能. D. 石英、雲母、結晶片岩、礫. E. 橙色. F. 破片. G. 坯部内孔は焼成前. H. 覆土中.
4	有段高坪	A. 残存高 4.4, 脚端部径 19.0. B. 粘土紐積み上げ. C. 脚端部内外面ナデ. D. 雲母、結晶片岩. E. 橙色. F. 破片. H. 床面付近.
5	高坪	A. 口縁部径 17.2, 器高 13.0, 脚端部径 10.4. B. 粘土紐積み上げ. C. 内外面とも観察不能. D. 雲母、細礫. E. 橙色. F. 1/3. H. 主柱穴 P3 内.
6	高坪	A. 口縁部径 17.3, 器高 13.6, 脚端部径 10.9. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ナデ. 脚部内外面筋ナデ. 脚端部内外面ヨコナデ. D. 雲母、細礫. E. 橙色. F. 2/3. H. カマド焚口部.
7	高坪	A. 口縁部径 17.7, 器高 11.9, 脚端部径 12.6. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 脚部内外面筋ナデ. 脚端部内外面ヨコナデ. D. 雲母、細礫. E. 淡橙色. F. 1/3. H. 覆土中.
8	高坪	A. 口縁部径 15.6, 器高 12.8, 脚端部径 11.4. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ナデ. 脚部外面ナデ. 内面指ナデ. 脚端部内外面ヨコナデ. D. 雲母、細礫. E. 橙色. F. 2/3. G. 口縁部内面に放射状暗文を施す. H. 床面付近.
9	高坪	A. 口縁部径 17.3, 残存高 6.3. B. 粘土紐積み上げ. C. 口縁部内外面ナデ. 坯部外面ケズリ. D. 雲母、細礫. E. 橙色. F. 坯部のみ. H. 覆土中.

9	高坪	A. 口縁部径17.3、残存高6.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナダ。坪部外面ケズリ。D. 雲母、細砂。E. 橙色。F. 坪部のみ。H. 覆土中。
10	坪	A. 口縁部径14.3、器高5.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。体部外面鏡ナダ、内面ナダ。D. 石英、細砂。E. 黄褐色。F. 完形。H. 覆土中。
11	坪	A. 口縁部径13.2、器高4.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。体部外面ケズリの後ナダ、内面ナダ。D. 雲母、結晶片岩、細砂。E. 淡橙色。F. 完形。H. 覆土中。
12	坪	A. 口縁部径12.9、器高5.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。体部外面鏡ナダの後下半分ケズリ、内面ナダ。D. 雲母。E. 淡赤褐色。F. 1/2。H. カマド内。

#### 第46号住居跡(第87図、図版11)

調査区の北端に位置し、重複する第47号住居跡を切り、住居西側壁中央部の上面を後世の土坑に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部がやや丸みを持ち、台形状に若干歪んだ方形を呈している。規模は、東西方向が3.75m、南北方向が3.85mある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で60cmある。壁溝は、東側壁以外の各壁下を巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼付で、全体的に堅く締まっている。ピットは、2ヶ所検出されている。P2は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。90cm×55cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは30cmある。上面からは、複数の長胴甕や大形甕が横倒しになった状態で出土しており、P2の上には蓋が施されていた可能性が高い。

カマドは、住居東側壁の中央やや北側寄りに位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長177cm・最大幅92cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居壁と一致している。燃焼面(火床)は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。支脚は見られない。袖は、地山掘り残しの可能性もあるローム土である。煙道部は、住居の壁外に90cmほど延びて立ち上がっている。

出土遺物は、カマドや貯蔵穴周辺及び住居中央部の床面付近から、完形に近い土器が比較的多く出土している。壁際の覆土中から出土した土器は、住居廃絶後に周辺から投棄されたものであろう。土器以外では、覆土中から砥石が出土している。

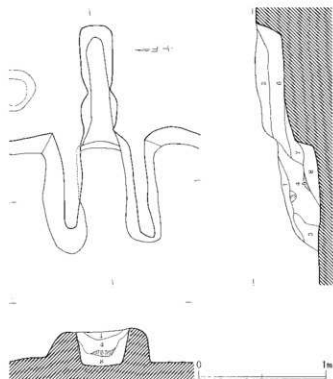
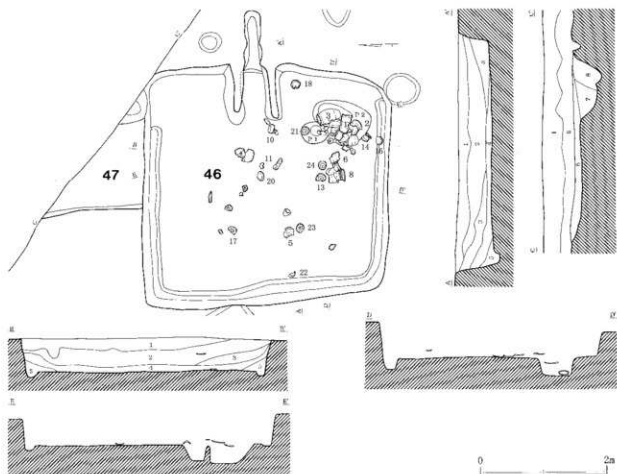
本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

#### 第46号住居跡カマド土層説明

- 第1層: 黒褐色土層(ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。)
- 第2層: 黒褐色土層(白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。)
- 第3層: 暗黄褐色土層(ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。)
- 第4層: 黒褐色土層(焼土粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。)
- 第5層: 暗赤褐色土層(焼土ブロックを多量含む。粘性、しまりともない。)
- 第6層: 暗褐色土層(ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。)
- 第7層: 暗褐色土層(ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。)
- 第8層: 暗褐色土層(焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。)

#### 第46号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径18.7、残存高27.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。胴部外面ケズリ、内面鏡ナダ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗褐色。F. 底部欠損。H. 貯蔵穴P2上面。
2	甕	A. 口縁部径17.4、器高31.5。底径5.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。胴部外面ケズリ、内面鏡ナダ。底外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗褐色。F. ほぼ完形。H. 貯蔵穴P2上面。
3	甕	A. 口縁部径17.4、器高32.8。底径5.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。胴部外面ケズリ、内面鏡ナダ。底外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 茶褐色。F. ほぼ完形。H. 貯蔵穴P2上面。
4	甕	A. 口縁部径17.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。胴部外面ケズリ、内面鏡ナダ。D. 赤色粒、白色粒、細砂粒。E. 暗褐色。F. 口縁部1/5。H. 覆土中。
5	小形甕	A. 口縁部径15.2、残存高15.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。胴部外面ケズリ、内面鏡ナダ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明褐色。F. 1/3。H. 床面直上。
6	小形甕	A. 口縁部径14.6、器高16.2。底径8.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナダ。胴部外面ケズリ、内面鏡ナダ。底外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡赤褐色。F. 1/2。H. 床面直上。



#### 第46・47号住居跡土層説明

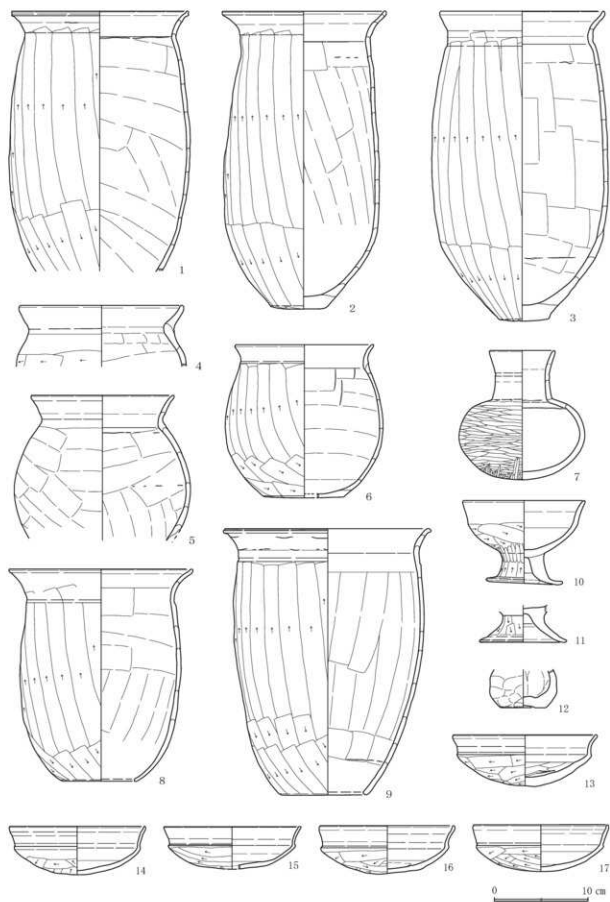
##### <第46号住居跡>

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を多量に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗茶褐色土層（白色粒子・ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまり共にない。）
- 第5層：暗黄褐色土層（炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

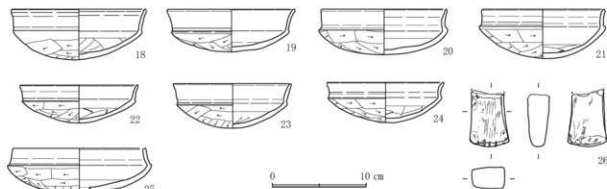
##### <第47号住居跡>

- 第6層：黒褐色土層（ローム粒子・白色粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第87図 第46・47号住居跡



第 88 图 第 46 号住居跡出土遺物 (1)



第 89 図 第 46 号住居跡出土物 (2)

7	小形盃	A. 口縁部径 7.0, 器高 13.7, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 茶褐色。F. 口縁部 1/4 欠。H. 貯蔵穴 P 2 内。
8	大形甕	A. 口縁部径 19.5, 器高 22.4, 底部径 7.6, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗茶褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
9	大形甕	A. 口縁部径 22.0, 器高 28.2, 底部径 9.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗褐色。F. ほぼ完形。G. 外面下端に黒斑あり。H. 貯蔵穴 P 2 上。
10	高坏	A. 口縁部径 13.0, 器高 8.9, 脚端部径 8.1, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。脚部外面ケズリ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 淡黄褐色。F. 2/3, H. 床面付近。
11	高坏	A. 残存高 3.9, 脚端部径 9.2, B. 粘土組織み上げ。C. 脚部外面ケズリ、内面ヨコナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡褐色。F. 脚部 1/2。G. 二次焼成を受けて荒れている。H. 床面付近。
12	小形土器	A. 残存高 4.0, 底部径 4.7, B. 手捏ね。C. 胴部外面指ナデ、内面指ナデ。底部外面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
13	坏	A. 口縁部径 15.3, 器高 5.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. 3/4。G. 内面に黒斑あり。H. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径 14.5, 器高 5.1, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 暗茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
15	坏	A. 口縁部径 14.5, 器高 4.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
16	坏	A. 口縁部径 14.4, 器高 5.1, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
17	坏	A. 口縁部径 14.4, 器高 4.9, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
18	坏	A. 口縁部径 14.3, 器高 5.4, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 白色粒、小石。E. 暗茶褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
19	坏	A. 口縁部径 13.5, 器高 4.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗褐色。F. 2/3。G. 内面斑点状剥落顕著。H. 覆土中。
20	坏	A. 口縁部径 13.3, 器高 4.8, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗褐色。F. ほぼ完形。G. 器表面は荒れている。H. 床面直上。
21	坏	A. 口縁部径 13.1, 器高 5.2, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 淡茶褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
22	坏	A. 口縁部径 12.5, 器高 4.0, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗褐色。F. 1/3。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
23	坏	A. 口縁部径 12.5, 器高 4.7, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 白色粒。E. 暗褐色。F. 完形。H. 覆土中。
24	坏	A. 口縁部径 12.4, 器高 4.3, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明茶褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
25	坏	A. 口縁部径 14.0, 器高 4.5, B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 暗茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
26	柱状砥石	A. 残存長 6.0、最大幅 4.2、厚さ 2.2、重さ 72g。C. 各面とも研磨。F. 1/2。H. 覆土中。

第 47 号住居跡 (第 87 図、図版 11)

調査区の北端に位置し、重複する第 46 号住居跡に切られている。住居跡の大半は北側の

調査区外にあるため、遺構の全容は不明である。

平面形は不明である。規模は、東西方向は1.40 mまで、南北方向は1.60 mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で15cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代後期と考えられる。

#### 第48号住居跡（第91図、図版11）

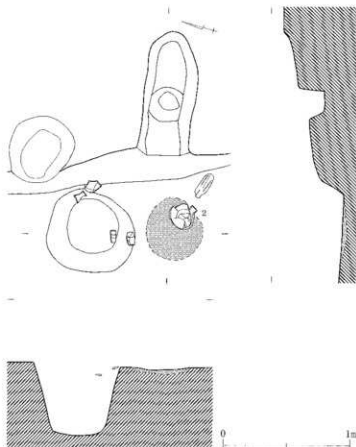
調査区北側の西側寄りに位置する。住居跡の北側コーナー部と南東側壁の一部を、後世の土坑に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ比較的整った方形を呈している。規模は、北東～南西方向が5.38 m、北西～南東方向が5.43 mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で46 mある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、9ヶ所検出されている。P1～P3は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、4本主柱穴を構成するものと考えられる。長さ30cm～45cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは20cm～48cmある。P6は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。56cm×53cmの円形ぎみの形態で、床面からの深さは25cmある。中からは、No5の脚付鉢が出土している。

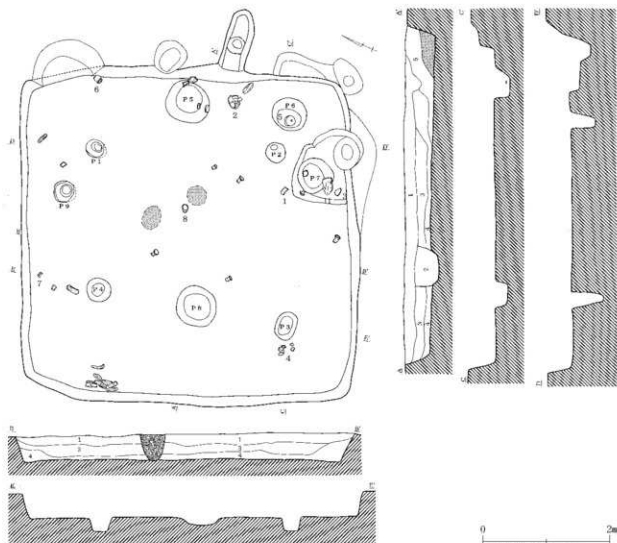
炉は、住居中央部から2ヶ所検出されている。いずれも、床面が直径35cm～40cmの円形や楕円形に焼けただけの地床炉で、比較的良く焼けて赤色化している。

カマドは、住居北東側壁の中央やや東側コーナー部寄りの位置に付設されていたようである。カマド本体はすでに崩壊して痕跡は見られないが、燃焼面（火床）と煙道部の一部が残存している。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居壁と一致している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られており、中央部にはNo2の高坏を伏せた転用支脚が据えられている。煙道部は、住居の壁外に97cmほど延びて削平されている。

出土遺物は、住居の床面付近から土器の破片が多く出土している。土器以外では、P7上面から自然石を利用した台石の可能性もある大形の砥石（No11）が1点出土し、住居南西側壁際の床面上から、長さ15cm～20cmの棒状の片岩系川



第90図 第48号住居跡カマド



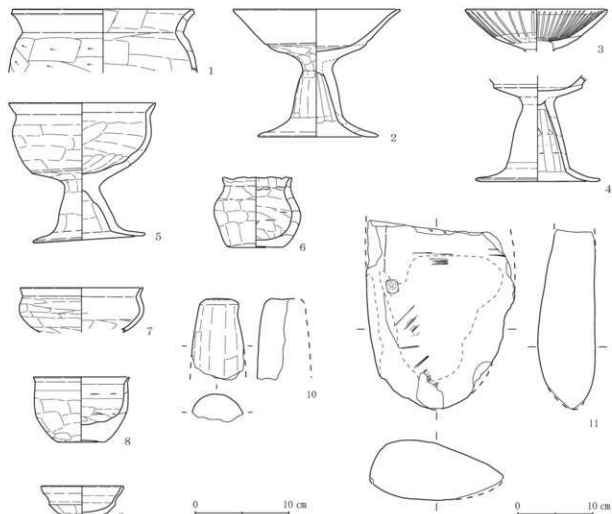
第91図 第48号住居跡

第48号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（白色粒子を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第4層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）

原石が8個集石されたような状態で出土している。また、覆土中からNo10の土製専用支脚の破片が出土しているが、本住居跡のカマドはNo2の高坏を伏せた土器転用支脚を使用していることから、No9の小形模倣坏とともに、おそらく混入品と考えられる。

本住居跡は、住居東側壁のカマドと住居中央部の炉を併用している。出土土器の様相から見ても、当地域の住居にカマドが急速に普及する時期であり、当地域における炉からカマドに移行する段階の住居の一形態として注目されよう。



第 92 図 第 48 号住居跡出土遺物

第 48 号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 19.4. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ヨコナデ, 内面箇ナデ. 胴部外面ケズリ, 内面箇ナデ. D. 赤色粒, 片岩粒. E. 淡褐色. F. 口縁部 1/4. G. 内面黒斑あり. H. 覆土中.
2	高坏	A. 口縁部径 17.8, 器高 13.5, 脚端部径 12.7. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 脚柱部外面ナデ, 内面ケズリ. 脚端部内外面ヨコナデ. D. 赤色粒, 白色粒. E. 暗茶褐色. F. 坏部完形, 脚部破片. H. カマド支脚.
3	高坏	A. 口縁部径 15.0. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ナデの後に放射状暗文を施す. D. 赤色粒, 白色粒. E. 暗橙褐色. F. 坏部 1/3. H. P 7 上面.
4	高坏	A. 残存高 11.0, 脚端部径 13.2. B. 粘土組織み上げ. C. 脚柱部外面ナデ, 内面ケズリ. 脚端部内外面ヨコナデ. D. 白色粒. E. 暗橙褐色. F. 脚部 3/4. H. 床面付近.
5	脚付鉢	A. 口縁部径 17.8, 器高 13.5, 脚端部径 12.7. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部内外面ナデ. 脚柱部内外面ナデ. 脚端部内外面ヨコナデ. D. 赤色粒, 白色粒, 片岩粒. E. 明茶褐色. F. ほぼ完形. H. 貯蔵穴 P 6 内.
6	鉢	A. 口縁部径 7.4, 器高 7.4, 底部径 6.0. B. 粘土組織み上げ. C. 内外面ナデ. D. 赤色粒, 白色粒. E. 茶褐色. F. 完形. H. 覆土中.
7	坏	A. 口縁部径 13.0, 器高 4.7. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリの後ナデ, 内面箇ナデ. D. 赤色粒, 白色粒. E. 茶褐色. F. 1/2 弱. H. 覆土中.
8	坏	A. 口縁部径 10.2, 器高 6.9, 底部径 4.8. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部内外面ナデ. D. 赤色粒, 白色粒. E. 茶褐色. F. 1/2. H. 床面付近.
9	坏	A. 口縁部径 8.8, 器高 3.2. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリの後ナデ, 内面ナデ. D. 白色粒. E. 淡茶褐色. F. 1/2. H. 覆土中.
10	土製支脚	A. 残存高 8.6, 幅 5.5. B. 手捏ね. C. ナデ. D. 砂粒. E. 暗茶褐色. F. 上半 1/2. H. 覆土中.
11	砥石	A. 残存長 24.9, 幅 19.7, 厚さ 8.0. B. 自然石を利用. C. 表面は良く磨かれている. F. 2/3. H. P 7 上面.



## 第2節 掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡（第93図、図版11）

調査区の南側中央部に位置し、柱穴の一部は第42号住居跡と接している。

建物の形態は、東西方向2間、南北方向2間の、平面形が東西方向に長い長方形を呈する側柱式建物である。規模は、東西方向3.80 m、南北方向が2.90 mある。柱通りは比較的良く、いずれの側柱穴も直線上に並んでいる。柱心間は、東西方向が1間1.90 mの等間隔、南北方向がほぼ1間1.45 mの等間隔で、南北方向と東西方向では1間の長さがかなり異なり、1間×1間の平面形の形態が長方形を呈している。柱穴は、いずれも直径40 cm～45 cm程度の円形を呈し、確認面からの深さは30 cm～50 cmあるが、南北方向側柱穴の中間に位置する柱穴は、他の側柱穴に比べて若干浅く、長方形建物の長軸に位置することから、棟持柱の可能性が考えられる。

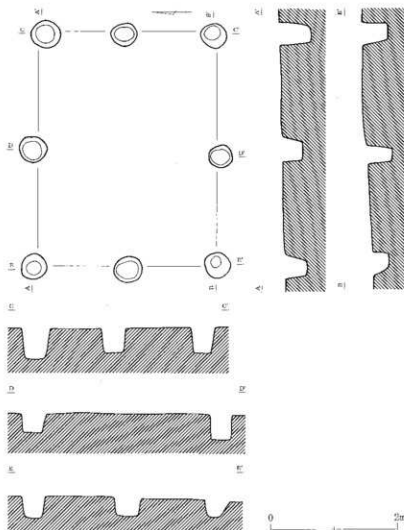
出土遺物は、柱穴覆土中から古墳時代後期の土器片が数片出土しただけである。

本建物跡の時期は、遺構に伴うと考えられる遺物がないため明確にはできないが、柱穴掘り方の形態が比較的整った円形で規模が小さいことや、1間×1間の平面形が長方形であることなど、中世的建物の特徴が窺えることから、中世の所産である可能性が高いと思われる。ちなみに、本調査区の北西側約70 mに位置するE1地点（恋河内2008b）では、13世紀後半頃を主体とする方形堅穴状遺構3基と井戸跡1基が検出されており、それらと関係する建物である可能性も考えられる。

## 第3節 土 坑

### 第1号土坑（第96図、図版11）

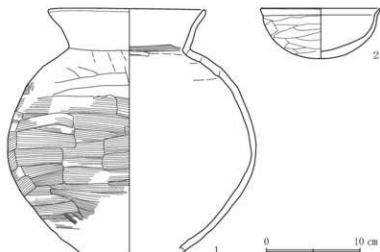
調査区の北側中央部に位置し、重複する第24号住居跡を切っている。平面形は、1.94 m



第93図 第1号掘立柱建物跡

×1.74 mのコーナー部の丸み  
が強い方形ぎみの形態である。  
壁は、直線的に傾斜して立ち  
上がり、確認面からの深さは  
60cmある。底面は、広く平坦  
である。覆土は、炭化粒子や  
焼土粒子を含む黒褐色土と、  
ロームブロックを含む暗褐色  
土の互層である。出土遺物は、  
底面直上から甕や坏などの土  
器が出土している。

本土坑の時期は、遺構の重  
複関係や出土土器の様相から、  
古墳時代中期の所産と考えら  
れる。



第94図 第1号土坑出土遺物

第1号土坑出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 16.7、残存高 25.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。胴部外面木口状工具によるナゲ、内面ナゲ。D. 石英、雲母、結晶片岩、靑。E. 橙色。F. 口縁部～胴部破片。H. 床面直上。
2	坏	A. 口縁部径 12.7、器高 5.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナゲ。体部外面ケズリ、内面ナゲ。D. 雲母、細砂。E. 明褐色。F. ほぼ方形。H. 床面付近。

### 第2号土坑（第96図、図版11）

調査区の北東端に位置し、重複する第18号住居跡を切っている。遺構の北東側は調査区外に位置するため、土坑の全容は不明である。平面形は、おそらく隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向が2.10 m、北東～南西方向は1.10 mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態から、古墳時代後期の所産と考えられる。

### 第3号土坑（第96図）

調査区の北東端に位置し、重複する第18号住居跡を切っている。遺構の北東側半分は調査区外に位置するため、土坑の全容は不明である。平面形は、おそらく楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向は1.41 mまで、北東～南西方向は56cmまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは45cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態から、中世以降の所産と考えられる。

### 第4号土坑（第96図）

調査区の北東端に位置する。遺構の北東側は調査区外に位置するため、土坑の全容は不明である。平面形は、不明である。規模は、北西～南東方向は1.10 mまで、北東～南西方向は40cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子を含む暗い褐色土を主体にしている。出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態から、古墳時代後期の所産と考えられる。

### 第5号土坑 (第96図)

調査区の中央部に位置し、重複する第6号住居跡を切っている。平面形は、東側壁が歪んだ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が3.60m、南北方向が1.56mある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、暗灰褐色土を主体にしている。出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、中世以降の所産と考えられる。

### 第6号土坑 (第96図)

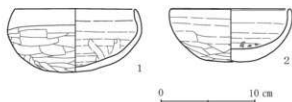
調査区の中央部に東端に位置し、重複する第28号住居跡に切られている。遺構の南東側は調査区外に位置するため、土坑の全容は不明である。平面形は、不明である。規模は、北東～南西方向は2.32mまで、北西～南東方向は70cmまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは65cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、土器の破片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代の所産と考えられる。

### 第7号土坑 (第96図、図版11)

調査区の中央部に東端に位置し、重複する第28号住居跡を切っている。平面形は、1.48m×1.38mの円形を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは42cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から土器が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期の所産と考えられる。



第95図 第7号土坑出土遺物

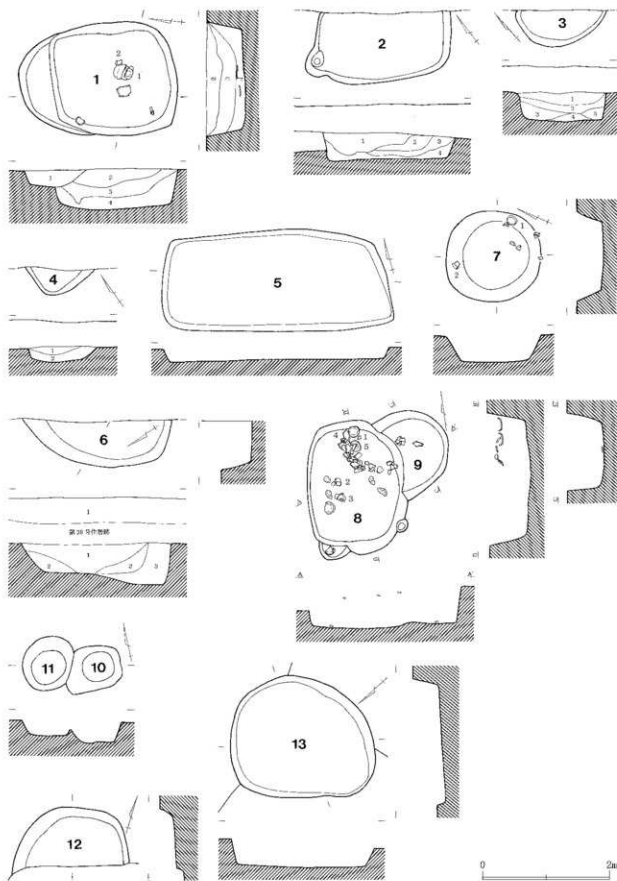
#### 第7号土坑出土遺物観察表

1	環	A. 口縁部径12.8、器高6.8、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面踏ナデ、D. 石英、雲母、細砂。E. 橙色。F. 完形。H. 覆土中。
2	環	A. 口縁部径12.7、器高5.6、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面踏ナデ、D. 雲母、細砂。E. 橙色。F. 2/3。H. 覆土中。

### 第8号土坑 (第96図、図版12)

調査区の北側の東側寄りに位置し、重複する第9号土坑を切り、第26号住居跡に切られている。平面形は、2.05m×1.55mの隅丸長方形を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは60cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土上層から土器の破片が比較的多く出土している。

本土坑の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期の所産と考えられる。



第96图 土坑

#### 第1号土坑土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）  
 第4層：黒褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）

#### 第2号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第3層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子・ロームブロックを微量含む。粘性、しまりともない。）

#### 第3号土坑土層説明

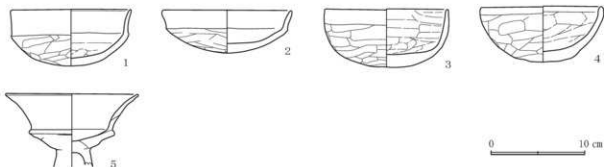
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）  
 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第3層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）  
 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性、しまりともない。）

#### 第4号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性、しまりともない。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

#### 第6号土坑土層説明

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性、しまりともない。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）



第97図 第8号土坑出土遺物

#### 第8号土坑出土遺物観察表

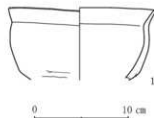
1	坏	A. 口縁部径 12.8、器高 6.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面強ナデ。D. 雲母、細砂。E. 橙色。F. 4/5。H. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径 13.7、器高 4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 雲母、細砂。E. 橙色。F. 2/3。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径 13.1、器高 6.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、結晶片岩、礫。E. 淡橙色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径 12.9、器高 5.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母、結晶片岩、礫。E. 淡橙色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
5	高坏	A. 口縁部径 14.0、残存高 7.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚部内外面不明。D. 雲母。E. 橙色。F. 坏部破片。H. 覆土中。

#### 第9号土坑（第96図、図版12）

調査区の北側の東側寄りに位置し、重複する第26号住居跡と第8号土坑に切られている。平面形は、楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向が1.26 m、北東～南西方向は1.10 mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面か

らの深さは56cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態や出土土器から、古墳時代中期の所産と考えられる。



第98図 第9号土坑出土遺物

第9号土坑出土遺物観察表

1	鉢	A. 口縁部径15.5、残存高7.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 雲母。E. 明赤褐色。F. 口縁部～体部破片。H. 覆土中。
---	---	---------------------------------------------------------------------------------------

#### 第10号土坑（第96図）

調査区の北側の東側寄りに位置し、重複する第26号住居跡と第11号土坑に切られている。平面形は、90cm×68cmの隅丸長方形ぎみの形態を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは32cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代中期後半の土器片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態や出土土器から、縄文時代中期後半の所産と考えられる。

#### 第11号土坑（第96図）

調査区の北側の東側寄りに位置する。重複する第10号土坑を切っている。平面形は、85cm×80cmの円形を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは23cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代中期後半の土器片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代中期後半の所産と考えられる。

#### 第12号土坑（第96図）

調査区中央部の東側寄り位置し、重複する第26号住居跡に切られている。平面形は、残存する部分から推測すると、円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が1.83m、南北方向は92cmまで測れる。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態や遺構の重複関係から、古墳時代の所産と考えられる。

#### 第13号土坑（第96図、図版12）

調査区中央部の東端に位置し、重複する第26・28号住居跡に切られている。平面形は、東西方向2.30m、南北方向2.00mの不整の楕円形を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本土坑の時期は、覆土の状態や遺構の重複関係から、古墳時代の所産と考えられる。

## 第4節 溝 跡

### 第2号溝跡 (第100図)

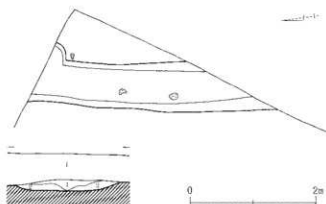
調査区北側の東側寄りに位置し、重複する第19号住居跡を切っている。調査区内では、やや北東～南西方向に向いて、直線的な流路をとっており、東端の第3号溝跡と並走している。規模は、溝の上幅が165cm～105cmあり、下幅は40cm～50cmの比較的均一な幅である。断面の形態は逆台形を呈し、確認面からの深さは28cmある。遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、遺構に伴う遺物がないため明確にはできないが、覆土の状態から、近世以降と考えられる。

### 第3号溝跡 (第99図、図版12)

調査区の東端に位置する。調査区内では、やや北東～南西方向に向いて、直線的な流路をとっており、西側の第2号溝跡と並走している。規模は、溝の上幅が70cm～80cm、下幅50cmの比較的均一な幅である。断面の形態は逆台形を呈し、確認面からの深さは15cmある。遺物は、覆土中から拳大の自然石や土器の破片が少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、遺構に伴う遺物がないため明確にはできないが、覆土中に浅間山系A軽石を含むことから、近世後半以降と考えられる。

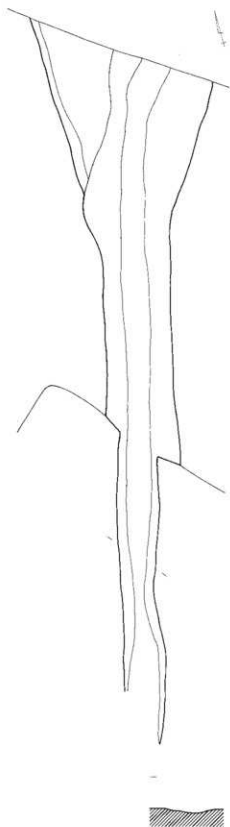


第99図 第3号溝跡

#### 第3号溝跡土層説明

第1層：淡灰色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、浅間山系A軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第100図 第2号溝跡

## 第V章 ま と め —塚畠遺跡C地点の古墳時代集落の様相—

塚畠遺跡は、これまでのA地点からF地点の調査で、縄文時代・古墳時代・鎌倉時代の遺構と遺物が確認されているが、主体は古墳時代の集落跡である。本遺跡の古墳時代集落は、4世紀後半の前期末～6世紀代の後期の比較的長期間に及び、概ね継続的に営まれていると考えられる。

前期末の集落は、本地点の東側約200mの台地と水田部の比高差があまりない境界付近に位置するA地点で、住居跡3軒が検出されている(大屋1991)。西側のB地点～F地点では、前期の遺構がまったく確認されていないことから、本遺跡の前期集落は数軒の住居からなる小規模集落として、A地点付近に出現したものと推測され、その主目的は女堀川沖積低地の生産域拡大と本庄台地縁辺部の畠地開発であったと思われる。中期の5世紀代になると、集落規模は不明ながら、集落の中心は本地点の周辺に移り、5世紀後半には本遺跡から北東側の古井戸南遺跡(井上1986)にかけて、おそらく集落範囲が拡大すると思われる。後期の6世紀後半には、本遺跡や南側の新宮遺跡(恋河内1995)・辻ノ内遺跡(大屋1991)にかけて、徐々に集落が拡散するようである。

### 第1節 中期の集落

本報告のC地点の調査では、古墳時代中期～後期の住居跡が重複して45軒検出されている。5世紀代の中期の住居跡は12軒あり、これらは住居内に炉を有するものとカマドを有するものの二者がある。両者に直接的な重複関係はないが、炉とカマドが明確な住居跡の出土土器を比較した場合、炉を有する住居跡の土器の方が若干古相と考えられるため、両者は時期差とみてよいであろう。そのため、おそらく両者は同時に存在した目ではなく、炉を有する住居からカマドを有する住居へ、急激に変化した集落として注目されるが、その時期は当地域でカマドが最初に出現する時期よりも一段階遅れるようである。

#### <5世紀前半>

炉を有する住居跡は、第19・23・31号住居跡とその可能性が高い第9・24・41号住居跡の6軒で、第23号住居跡と第24号住居跡は相互に重複している。規模は、最大7.7mの第19号住居跡から最小4.2mの第23号住居跡まで様々である。住居跡の向きは、北東方向に向けるものが多いが、主軸方位にあまり画一性は見られないようである。炉は、3軒とも炉石等の付帯施設を伴わない単純な皿炉である。住居内の場所は、住居の北東側寄りか北西側寄りの主柱穴間が多いが、第19号住居跡のように住居の中央部や複数の炉を有するものもある。貯蔵穴は、住居のコーナー部付近(南側2・東側1)にあり、炉の位置との相関関係はあまり強くないようである。

出土土器の様相は、器種組成の时期的な特徴として、小形土器群の主体が供献器の小形直口壺(小形埴)から供膳器の小形杯・埴類(和泉型杯・内斜口縁杯等)に移行し始めていることで、その量的な割合はおそらく半々程度の段階と推測される。器種別の特徴では、甕は胴部の張りが強いものが多く、あまり長胴化したものは見られない。高杯は、脚部はまだ長めであるが、全体的にやや小形化したものが主体で、器面調整がナデのものがある程度の量を占めている。小形杯・埴類は、器高がやや高く平底形態のものが多い。特徴的な土器では、第23号住居跡から定型化していない鉢形の大形甕が出土しているが、当地域ではカマドよりも先に大形甕が出現するのが地域的な特徴である(中村1989)。また、第31号住居跡からは、坏部に円孔を有する有段高環形の器台が出土している。これは、本庄市(旧児玉町)堀向遺跡第三区河川址B地点(徳山1995)出土の有段高環形器台の系譜を引くと考えられ、その定型化したものとして注目される。



以上の土器様相から、本地点の炉を有する住居跡の時期は、当地域の該期編年を行った中村倉司氏のⅡ期（中村 1989）に該当し、先に報告した本遺跡E地点の時期区分（恋河内 2008b）では、その第Ⅰ期と第Ⅱ期の中間に該当しよう。この中村氏のⅡ期は、当地域の女堀川下流域に位置する諏訪遺跡（柿沼他 1979）や下田遺跡（柿沼他 1979）と中流域の東牧西分遺跡（恋河内 1995a）などで、カマドを有する住居跡が見られ、当地域のカマド出現期にあたる。本遺跡の場合、該期はまだ炉を有する住居跡が主体で、次期になってカマドを有する住居跡に変わっており、当地域ではカマドの出現が一斉ではなく、集落によってその出現時期が若干異なる点は注意される。

#### < 5 世紀後半 >

カマドを有する住居跡は、第 16・45・48 号住居跡とその可能性が高い第 17・28 号住居跡の 5 軒で、相互に重複するものはない。カマドは、3 軒とも住居の北東側壁の中央からやや東側コーナー部の方に寄った位置に付設されており、住居の主軸方位も画一性が高い。第 17 号住居跡は、残存する北東側壁と北西側壁にカマドの痕跡が見られないことから、その他の壁に付設されていたと思われる。いずれも構造的には整ったカマドで、燃焼部は粘土やローム土を住居壁に直接貼り付けて袖を構築しており、時的な特徴でもある高坏を伏せた転用支脚を使用し、住居壁外に延びる煙道部を伴っている。貯蔵穴は、いずれもカマド右側の住居東側コーナー部付近に位置し、カマドとの相関関係は炉よりも強いようである。第 48 号住居跡は、住居の中央部に 2ヶ所の地皿炉を伴い、炉とカマドの併用が窺え、移行期の住居のよう様相として注目されるが、第 28 号住居跡でも住居中央部に炉の痕跡があり、同様の住居形態であったかもしれない。

出土土器の様相は、器種組成の時的な特徴として、小形土器群の主体が完全に供膳器の小形坏・埴類に移行していることで、これまでの小形土器群の主流であった小形直口壺（小形埴）は、出土しても各住居跡でせいぜい 1 個体程度の割合である。器種別の特徴では、甕は、大形のものに長胴化の進行が認められる。高坏は、器面調整がナゲのものが主体となり、より小形化・短脚化している。小形坏・埴類は、これまでのものは器高を減じて扁平化し、中村氏が「源初坏」と命名したタイプのものが新たに見られる（中村 1979）。特徴的な土器では、第 45 号住居跡で前段階と類似した有段高坏形器台が出土し、第 16 号住居跡では古式須恵器のおそらく把手が付くと思われる埴の破片が出土している。

以上の土器様相から、本地点のカマドを有する住居跡の時期は、大半が中村氏のⅢ期に該当し、第 45 号住居跡は甕のさらなる長胴化や高坏の小形化が窺えることと、口縁部と体部の境に段をもつ模倣坏の出土から、中村氏のⅣ期に下ると考えられる。先に報告した本遺跡E地点の時期区分（恋河内 2008b）では、概ね第Ⅱ期に該当する。

## 第 2 節 後期の集落

後期の住居跡は、調査区内から 32 軒検出されている。これらは、概ね 6 世紀前半から後半にわたるものであるが、少数ながら一部は 7 世紀初頭に下るものもあろう。

#### < 6 世紀前半 >

6 世紀前半の住居跡は、第 6 号住居跡・第 10 号住居跡・第 14 号住居跡・第 18 号住居跡・第 32 号住居跡・第 34 号住居跡・第 35 号住居跡・第 40 号住居跡の 8 軒で、第 34 号住居跡と第 35 号住居跡が重複し、第 6 号住居跡と第 10 号住居跡が接している。大半の住居跡が 6 世紀後半の住居跡に切られており、該期で遺構の全容が分かるのは第 6 号住居跡だけである。規模は、5 m 程度の方形の住居が主体のようであるが、第 40 号住居跡のように 3 m 弱の小形住居も見られる。住居の向きは、北東方向に向けるものが多く、画一性がある程

度認められる。カマドは、大半が住居の北東側壁か南東側壁に付設されている。第10号住居跡は、他の一般的な住居とは異なった形態の特異な住居で、住居の平面形が長方形を呈し、カマドは南側コーナー部に付設されている。また、第35号住居跡のカマドは、燃焼部が住居の壁を掘り込んで作られており、カマド燃焼部がまだ住居内にある形態が主流の該期では、比較的珍しい先駆的形態と言える。貯蔵穴は、小形住居の第40号住居跡と特異な形態の第10号住居跡以外は、カマド右側のコーナー部に位置し、カマドとの相関関係はかなり強いと言える。

出土土器の様相は、器種組成の时期的な特徴として、須恵器の影響を受けた大形・小形の壺や、鬼高型・和泉型の高坏が、まだ安定的に一定の割合を占めている。供膳器は、坏蓋型の模倣坏が主体であるが、中期からの系譜を引くような坏・埴類がまだ少量ながら残存している。器種別の特徴では、甕は長胴化が急速に進行し、最大径を胴部の中位から下位にもつ突出底の形態である。模倣坏は、口縁部径12cm程度、器高5cm程度の若干小ぶりで口縁部・体部とも高さのある形態と、口縁部径13cm前後・器高4.5cm以下の若干大ぶりで浅い形態の二者があるが、いずれも口唇部に面取りや沈線を施さず、口縁部が緩やかに外反する形態が主流になっている。特徴的な土器では、第6号住居跡からMT15～TK10段階頃と考えられる須恵器の坏身と甕が出土している。

以上の土器様相から、この6世紀前半とした住居跡群は、前半でも新しい段階と考えられ、本遺跡E地点の時期区分(恋河内2008b)の第Ⅲ期に該当する。

#### <6世紀後半>

6世紀後半の住居跡は、推定も含めて20軒あり、第4号住居跡と第5号住居跡、第12号住居跡と第13号住居跡、第15号住居跡と第22号住居跡、第42号住居跡と第43号住居跡が、同時期のもので重複している。規模は、最大7mの第39号住居跡から、最小3m弱の第36号住居跡まで様々で、第39号住居跡は同一場所での建て替えによる拡張、第8号住居跡は西側壁側の拡張が認められる。住居の向きは、北東方向に向けるものと東方向に向けるものの二者があり、両者の重複関係が見られない点は注意される。カマドは、前時期までと同じく大半は住居の北東側壁か東側壁に付設されているが、北西側壁が1軒(第8号住居跡)、南西側壁が2軒(第22号住居跡・第39号住居跡)見られる。該期になると、本地点ではカマド構築材に混入土をほとんど含まないローム土を、袖の芯にしているものが多く見られるようになる。これらは、地山ローム土との区別が難しいものも多いことから、地山を掘り残して袖の芯にしたものも存在すると思われる。貯蔵穴は、前時期までと同じく、大半はカマド右側のコーナー部にあるが、南西側壁にカマドを付設する2軒だけは、カマド左側のコーナー部に位置している。

該期の注目すべき遺物として、第8号住居跡と第39号住居跡から土製品の玉類が多く出土している。この住居跡から出土した土製の玉類は、その形状から石製の管玉や切子玉もしくは算盤玉と、ガラス製の小玉を模倣したものと考えられ、おそらく一緒に出土した数個の石製管玉や石製白玉などをアクセントに配した首飾り等の装身具を構成していたものであろう。本文中でも記したように、この玉類の組み合わせは、石製品とガラス製品を主とする後期群集墳に埋葬された被葬者の副葬品に見られる装身具の構成とほぼ同じであり、両者の装身具における材質の差異は、おそらく社会的身分表象の規制を表すものと思われる。

出土土器の様相は、器種組成の时期的な特徴として、前段階までの須恵器甕を模倣した頭部中位に段もしくは沈線を施す大形壺はほとんど見られなくなり、高坏では和泉型高坏は姿を消し、鬼高型高坏も少なくなる。供膳器は、前段階の浅い形態の方の坏蓋型模倣坏が主流となり、坏身型模倣坏が安定した器種として一般的に見られるようになる。器種別

の特徴では、甕は長胴化がさらに進行し、最大径を胴部中位から口縁部にもち、底部があまり突出しない形態になる。模倣坏は、坏蓋型模倣坏の中に有段口縁坏が出現する。有段口縁坏は、まだ量的には比較的少なく、あっても各住居跡に1個体程度の割合で、模倣坏の主体にはならない。特徴的な土器では、第8号住居跡から群馬県北部の北毛地域との関係が窺える内面にミガキ調整と黒色処理を施した鉢と坏が出土し、第39号住居跡からは口縁部が外反して「ハ」の字状に開くやや古相の在地的な須恵器坏蓋が出土している。この口縁部が「ハ」の字状に開く在地的な須恵器坏蓋は、同様の形態のものが本庄市（旧児玉町）秋山東遺跡第15号土坑（恋河内1987）でも出土しており、本遺跡の第39号住居跡No19のような器高が低い形態のものは、本遺跡E地点の第64号住居跡（恋河内2008b）で出土している。

以上の土器様相から、この6世紀後半とした住居跡群は、単一時期ではなく比較的時間幅があり、漸移的に移行していった住居跡群と推測される。本遺跡E地点の時期区分（恋河内2008b）では、第Ⅳ期～第Ⅴ期に該当する。

#### <参考文献>

- 井上 尚明 (1986) 『得監塚・古井戸Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 大屋 道則 (1991) 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集
- 柿沼幹夫他 (1979) 『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集
- 恋河内昭彦 (1987) 『秋山東遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第2集
- (1995a) 『飯玉東Ⅱ・高縄田・桶越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』 児玉町文化財調査報告書第17集
- (1995b) 『南共和・新宮遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第6・7集
- (2008a) 『塚島遺跡Ⅱ —F地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第22集
- (2008b) 『塚島遺跡Ⅲ —E地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第23集
- 徳山 寿樹 (1995) 『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第18集
- 中村 倉司 (1979) 「児玉地方における鬼高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告第38集
- (1989) 「関東地方における甕・大形甕・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』第6号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 写真図版



C地点調査区全景（北より）



C地点調査区北側



第4・5号住居跡



第5号住居跡カマド



第6・7号住居跡



第6号住居跡カマド



第6号住居跡須恵器甕出土状態(1)



第6号住居跡須恵器甕出土状態(2)



第8～11号住居跡



第8号住居跡カマド(北)



第 8 号住居跡旧カマド (東)



第 8 号住居跡遺物出土状態



第 9 号住居跡遺物出土状態



第 10 号住居跡カマド



第 12 号住居跡



第 12 号住居跡カマド



第 12 号住居跡遺物出土状態 (1)



第 12 号住居跡遺物出土状態 (2)



第 13 号住居跡



第 13 号住居跡カマド



第 14 号住居跡



第 14 号住居跡カマド



第 15 号住居跡



第 15 号住居跡カマド



第 16 号住居跡



第 16 号住居跡カマド





第 18 号住居跡



第 19 号住居跡



第 19 号住居跡遺物出土状態



第 20 号住居跡



第 21 号住居跡



第 21 号住居跡カマド



第 21 号住居跡遺物出土状態 (1)



第 21 号住居跡遺物出土状態 (2)



第 22・24 号住居跡



第 22 号住居跡カマド



第 23 号住居跡



第 25 号住居跡



第 25 号住居跡カマド



第 26・27 号住居跡



第 26 号住居跡カマド



第 27 号住居跡カマド



第 28 号住居跡



第 29 号住居跡



第 29 号住居跡カマド



第 30 号住居跡



第 30 号住居跡貯蔵穴



第 31 号住居跡



第 31 号住居跡遺物出土状態



第 32 号住居跡



第 33 号住居跡



第 33 号住居跡カマド



第 34 号住居跡



第 34 号住居跡カマド



第 35 号住居跡カマド



第 36 号住居跡



第 36 号住居跡カマド



第 37 号住居跡



第 37 号住居跡カマド



第 38 号住居跡



第 39・40・41 号住居跡



第 39 号住居跡カマド



第 40 号住居跡



第 40 号住居跡カマド



第 42 号住居跡



第 42 号住居跡カマド





第 43 号住居跡



第 43 号住居跡カマド



第 44 号住居跡



第 44 号住居跡カマド



第 45 号住居跡



第 45 号住居跡カマド



第 45 号住居跡遺物出土状態 (1)



第 45 号住居跡遺物出土状態 (2)



第 46・47 号住居跡



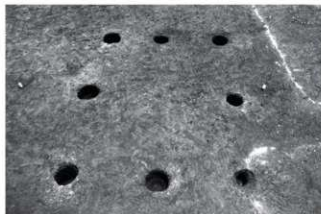
第 46 号住居跡カマド



第 48 号住居跡



第 48 号住居跡カマド



第 1 号掘立柱建物跡



第 1 号土坑



第 2 号土坑



第 7 号土坑



第8・9号土坑



第13号土坑



第3号溝跡



C地点調査区北側（東より）



C地点調査区北側（南より）



C地点調査区北側（西より）



C地点調査区北端（南より）



C地点調査区中央部（西より）





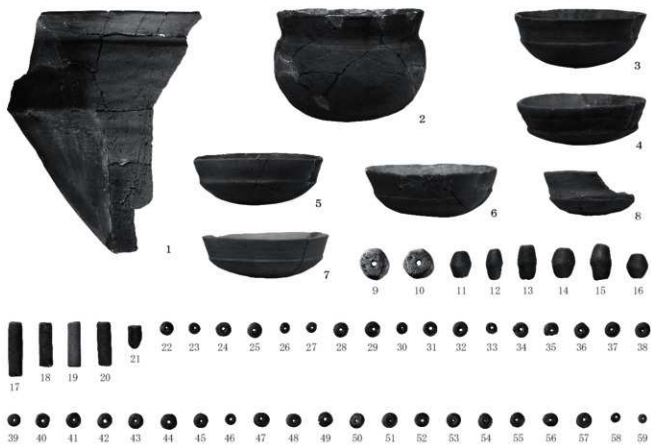
第 4 号住居跡出土遺物



第 5 号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物



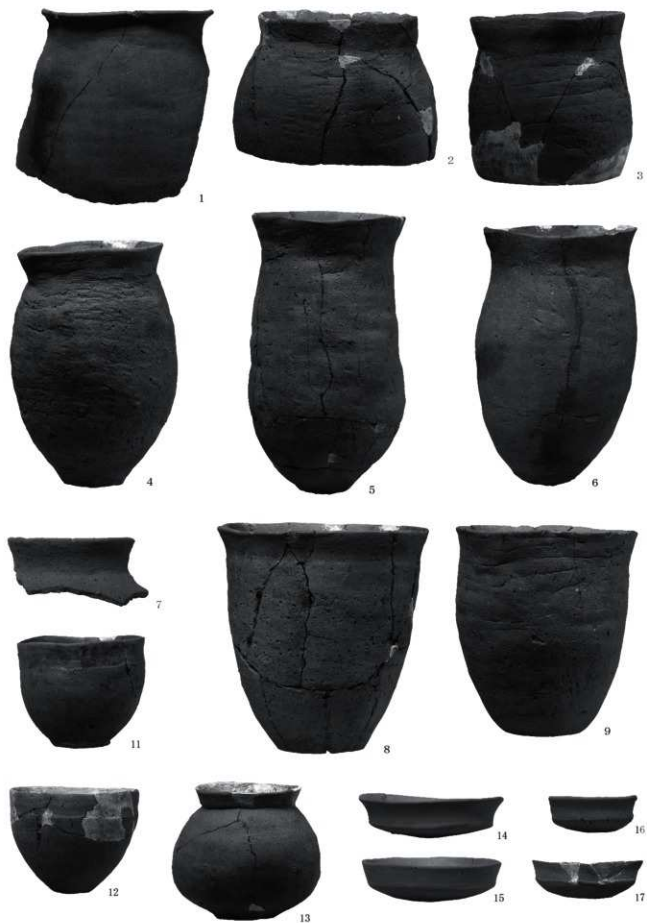
第 8 号住居跡出土遺物



第 9 号住居跡出土遺物



第 10 号住居跡出土遺物



第 12 号住居跡出土遺物 (1)



第 12 号住居跡出土遺物 (2)



第 13 号住居跡出土遺物



第 14 号住居跡出土遺物



第 15 号住居跡出土遺物



第 16 号住居跡出土遺物



第 17 号住居跡出土遺物



第 18 号住居跡出土遺物



第 19 号住居跡出土遺物



第 21 号住居跡出土遺物



第 22 号住居跡出土遺物



第 23 号住居跡出土遺物



第 24 号住居跡出土遺物





第 25 号住居跡出土遺物



第 26 号住居跡出土遺物



第 28 号住居跡出土遺物 (1)



第 28 号住居跡出土遺物 (2)



第 29 号住居跡出土遺物 (1)



第 29 号住居跡出土遺物 (2)



第 30 号住居跡出土遺物



第 31 号住居跡出土遺物 (1)



第 32 号住居跡出土遺物

第 31 号住居跡出土遺物 (2)



第 33 号住居跡出土遺物



第 34 号住居跡出土遺物



1

第 35 号住居跡出土遺物



1



2



4



6



7



8



3



5



9



10



11

第 36 号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

第 37 号住居跡出土遺物



第 39 号住居跡出土遺物





第 40 号住居跡出土遺物 (1)



第 40 号住居跡出土遺物 (2)



第 41 号住居跡出土遺物



第 42 号住居跡出土遺物





第43号住居跡出土遺物(2)



第 44 号住居跡出土遺物 (1)



12



13



14



15



16



17



18



19



20

第 44 号住居跡出土遺物 (2)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

第 45 号住居跡出土遺物



第 46 号住居跡出土遺物 (1)



第 46 号住居跡出土遺物 (2)



第 48 号住居跡出土遺物



第 1 号土坑出土遺物



第 7 号土坑出土遺物



第 8 号土坑出土遺物



第 9 号土坑出土遺物



報告書抄録

フリガナ	ツカバタケイセキⅣ							
書名	塚島遺跡Ⅳ							
副書名	C地点の調査							
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書					巻次	第33集	
編著者	恋河内昭彦							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行日	西暦2012年(平成24年) 3月 30日							
フリガナ	フリガナ	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡	( ° ' 〃 )	( ° ' 〃 )			
塚島遺跡 (C地点)	本庄市児玉町 共栄字南共和 250、277番地	112119	54-028	36° 12' 48〃	140° 31' 43〃	19890401 ～ 19890630	約 1920 ㎡	工場 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
塚島遺跡 (C地点)		旧石器			削器			
	集落	縄文期中	土坑2		縄文土器(勝坂～加曾利E3式)			
	集落	古墳中～後期	竪穴住居45、土坑8		土師器、須恵器、石製品(紡錘車・管玉・小玉)、土製品(切子玉・管玉・小玉)			
	屋敷	中世以降	掘立建物1、土坑3、溝2		在地産片口鉢			

---

本庄市遺跡調査会報告書 第33集

## 塚畠遺跡Ⅳ

- C地点の調査 -

---

平成24年3月30日 印刷

平成24年3月30日 発行

発行／ 本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1185

印刷／山進社印刷株式会社